父の心

PL 810 U7C46

Kurata, Hyakuzo
Chichi no shimpai

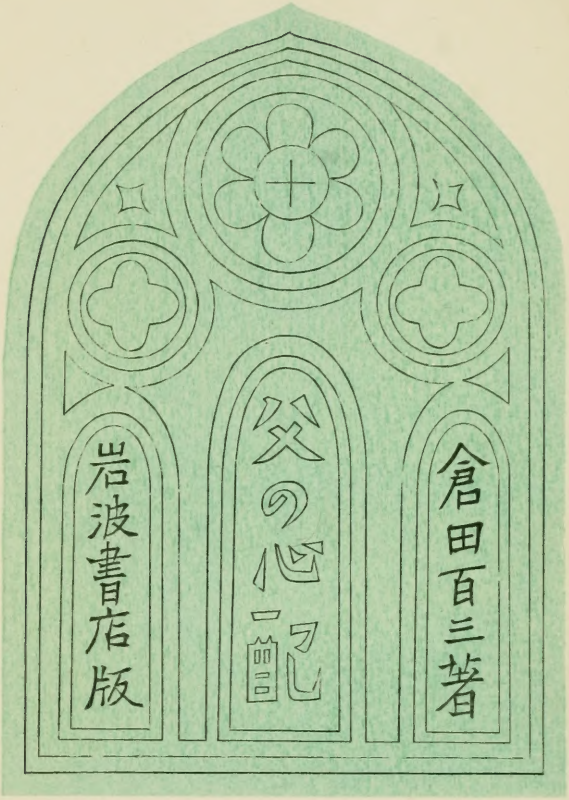
East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

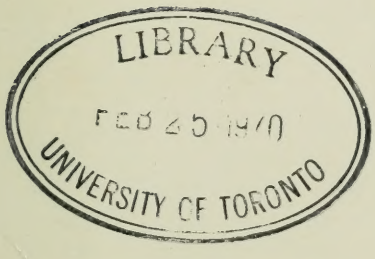
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

裝幀

兒島善三郎


倉田百三著
父の心配
岩波書店版

PL
810
U7C46



父の心配

父の心配

倉田百三

人。

加藤順作。（牧師。五十歳）
民子。（その妻。四十五歳）
成吉。（その息。二十四歳）
道子。（その養女。十九歳）
とき。（女中。）
小山松子。（道子の友人。十九歳）
小山博士夫人。（松子の母。三十九歳）
副牧師。

第一幕

副牧師の妻。
信者の婦人。
信者の娘。
合唱隊。（登場せず）

處。

東京郊外。

時。

明治四十年頃。二月下旬より復活祭の前夜まで。

第一幕

父の書齋。居間を兼ぬ。西洋風を加味したる日本間。質素なれど、品よく裝飾しあり。隣室は客間に宛て

らる。前面は稍廣き芝生ある庭。植木、草花等よく手入れしあり。左手庭をへだてゝ道子の部屋の窓見ゆ。庭の右手に門あり。書齋の後ろ、左手寄りにドアあり。廊下に通ず。廊下は左手に臺所、右手に他の部屋、玄關に通ずるこゝろ。書齋の正面後ろの壁に喪服をつけたる三十歳位の婦人の肖像掲げあり。父はテーブルに向ひ、道子は椅子に腰かけ、編物をしながら語りゐる。朝。

道子。（針を動かしながら。）ではいよ〳〵新しい會堂も出來あがるのでございますね。

順作。（讀みかけの聖書を机の上に置き。）あゝもうぢきだ。もうそろ〳〵獻堂式の準備もしなくてはならない。

道子。獻堂式は何日頃になりますの。

順作。復活祭と一緒にしたいと思つてゐる。そう思つて工事を急いでゐるのだ。丁度重苦しい受難週間があけた後、キリストの蘇り給ふのを、皆が希望に充ちて慶び迎へる日にね。

道子。（何か考へる。編物を袂に入れる。）イエス樣は十字架におかゝり遊ばしてから、三日目に蘇り遊ばすのでございましたね。

順作。うむ。「三日にして宮を建てる」と云はれた言葉もある。今度の會堂が出來る迄にはわしは長い間かゝつて、隨分苦心したつけが……道子。お前獻堂式にはあの獻堂式の歌を唱つてくれるのだつたね。

道子。えゝ。一生懸命歌ひますわ。歌を選んで置いて下さい。大勢の前で歌ふのは、少し氣まりが悪いけれど、お父さまの願の成就した日を心から祝して歌ひますわ。本當に隨分な苦心だつたのですもの。

順作。いや。耶蘇の受けられた惱みを思へばこれ位なことを苦心だなどゝ云つては濟まない。大體私の力で出來たやうに思つてはいけない。榮えを神に歸しなくては。（机の上の聖書を取り、別に小さな聖書を道子に渡す。）詩篇の處を開いて御覽。（道子聖書を開きページを繰る。）百二十七篇の一節を讀んで御覽。

道子。（讀む。）「エホバ家を建て給ふにあらずば、建つるものゝ勤勞は空し。」

順作。その通りだ。（考へる。）「建つるものゝ勤勞は空し」だ。神が自ら働き給はなかつたら、會堂

は永久に出來なかつたらう。（間。）だが私の年來の願ひの叶つたのは實に嬉しい。神の家を建てたいといふ願ひは、美しい、クリスチアンとして相應しい願ひだと思はれるから……歷代史略を開けて御覽。

道子。（聖書のページを繰る。）上でございますか。

順作。下の六章だ……その八節を讀んで御覽。

道子。（讀む。）「我名のために家を建つること、汝の心にあるはよし。」

順作。（滿足そうに。）私のハンブルな願ひを主は嘉し給ふであらう。

道子。（何か考へ、涙ぐみ、聖書の上にうつむく。）

順作。お前どうかおしかい？

道子。御免なさい。私此の頃聖書を讀んでゐると、變に言葉が胸に沁みますの。

順作。あまり感じ易くならないやうにね。（道子の細つそりした肩のあたりを眺めながら。）晴々として、生々と暮らすがいゝ。お前達のやうな少女（をとめ）は花のやうに、鳥のやうに、此の世界を樂しくして

くれるやうだといゝね。

道子。私そうなりたいと思ひますわ。だけど——

順作。（快活に。）是非そうなつて貰ひたいものだね。（間。）お前、なにも氣にすることはないよ。なに、お前はデリケートな心を持つてゐる。鈍くて粗いのは困るて。わしはお前のことを思ふとあの雅歌のなかにある言葉を思ひ出すのだ。確か七章の一節だつたと思ふ。「女よ、汝の足は鞋の中にありて如何に美はしきかな」と云ふのだがね。お前にはそういふ感じのする清い、美くしいところがある。

道子。まあ。お父様。私にそんなところがあるでせうか。

順作。あるよ。それを失はぬやうにするがいゝ。

（民子手紙を持ちて登場。）

民子。只今小山さんからお使ひが持つて參りました。（手紙を渡す。）御返事を待つてゐます。

順作。（開封し、讀む。）教會のことで相談があるから來て呉れといふのだ。では出かけよう。……

朝の祈りをすませてね。

民子。（道子に。）お前あちらに行つてね。成吉とときを呼んで來て下さい。朝の祈禱がありますからつて。そして小山さんのお使ひに「直ぐに參りますから」つて。

道子。はい。

（道子退場。）

民子。（腰をかける。）獻堂式の相談でせうね。

順作。そうだらう。今道子とその話をしてゐたところだ。小山さんは非常な盡力だつた。

民子。ほんとうに教會のために力になる方で御座いますね。

順作。（何か考へる。）成吉は小山さんの宅へ此頃もよくゆくのかい。

民子。度々行くやうで御座いますよ。成吉は小山さんに大變氣に入つてゐるらしう御座います。松子さんだつてよく遊びにくるのですし。あゝいふ立派な家と親しく往來することは結構なことだと思ひます。

順作。あゝいふ精神的に立派な家庭とね。小山さんは善良なクリスチアンだ。自分の仕事の中に非基督教的な部分が含まつてゐることは免れないけれども。あの人はそれを氣にしてゐるからね。

民子。私はまた、あの松子さんていふ子が大變氣に入りましたの。素直で、快活で、それでゐてしつかりしてゐますからね。

順作。あゝ。うちの道子といゝお友達だ。どちらもそれ〴〵に美しい。

民子。さあね。

（間。道子と女中登場。）

道子。（云ひにくそうに。）あの、兄様は失禮しますとおつしやいますの。

順作。そうかい。

民子。どうして？　氣分でも悪いのかい。

道子。いゝえ。

民子。何故だらうね。成吉は此の頃少し變だ。昨日も出て來なかつた。皆と一緒に朝のお祈禱(いのり)を
するのは私の家の久しい習慣だからね。

道子。そう申したので御座いますけれど、兄樣は皆と一緒に聖書を讀むのはいゝけれども、お祈
りをするのはどうも自分にピツタリしなくて心苦しいとおつしやいますの。

民子。何故だらうね。一緒に祈つて、そしてお父樣の祝福を受けるのがどうして心苦しいのだら
うね。お前、も一度行つて呼んできて頂戴。

道子。はい。(もじ〳〵する。)

民子。私が行つて呼んで來やう。(退場せんとす。)

順作。いや。ほつて置くがいゝ。強いるべきことではない。成吉には自分の考へもあるのだし、
私も分る氣持ちもするから。

民子。だつて。

順作。いや。その儘にして置いた方がいゝ。時を待つがいゝ。(椅子より下り、跪く。)

（一同跪く。）

順作。（節をつけず、自然の調子にて。）神様、今日一日の命を與へ給ひましたことを感謝致します。今日一日をあなたのお氣に入るやうに過さして下さいまし。私の受け持たせていたゞいてゐる仕事を過ちなく今日も果たさせて下さいまし。別けて今築きつゝある會堂をあなたのお氣に入りますやうに、障りなく出來上りますやうに。神様、私の家族の上に祝福を與へて下さいまし。各々があなたのお教へを守り、互に和らぎ、正しく一日を送りますやうに、助けて下さいまし。あなたのゆるし給ふ樂しさが、私の家庭にもありますやうに。神様、私の倅を守つて下さいまし。あなたの欲し給ふ仕方で彼を育てゝ下さいまし。（間。）天にまします我等の父よ。

一同。願はくは御名をあがめさせ給へ。御國を來らせ給へ。御心の天に成るごとく地にもならせ給へ。吾等が日用の糧を今日も與へ給へ。吾等に負債あるものを吾等が赦すごとく、吾等の負債をも赦し給へ。吾等を試みに會はせず惡より救ひ出し給へ。國と權能と榮えとは限りなく爾の保ち給ふところなればなり。アーメン。

（沈默。）

一同。（立ち上る。）

順作。では出掛けよう。

民子。小山さんによろしく。（外套を着せる。）松子さんにお遊びにいらつしやいましつて。

順作。あゝ。（緣先に下りる。靴を穿きつゝ。）教會から人が來たらね。小山さんところから教會の方に廻りますつて、そう云つて下さい。

民子。（帽子をさゝげる。）よろしう御座います。

道子。（鞄を渡す。）松子さんによろしく。

順作。では行つて來るよ。（門の方に行く。）

三人。（門口まで送る。）行つてらつしやいまし。

（順作退場す。女中部屋に上り、椅子を直し、机の上をかたづけなどす。）

民子。まだなか〳〵寒いね。

道子。春と云つても淺うございますからね。

民子。イースター頃にならなくては本當に暖かにはならないね。

道子。（空を仰ぐ。）曇つてまゐりました。

民子。（襟を掻き合はせつゝ。）風になるらしい。ベコニヤをフレームにしまつて下さい。

道子。はい。（ベコニヤの鉢をフレームに入れる。）

民子。（部屋に上る。）ストーブを焚いておくれ。

とき。はい。（ストーブを焚く。）

民子。バタが切れたね。それからついでにトマトソースとマカロニを菊屋に云つといて下さい。

とき。はい。（退場。）

道子。（部屋に上る。）

民子。道子さん。お前に頼みたいのだが、献堂式の時に着る私の着物の裄が厚過ぎて困るから、あれをもつと薄くして置いて下さい。

道子。はい。どの位に致しませうか。

民子。一分位でいゝだらう。それから袖丈を縫ひ込んで置いて下さい。

道子。はい。

民子。お前に帯のいゝのが要るだらうが、どうも松子さんと同じやうにはね。前ので間にあはせて下さい。

道子。私はよう御座いますわ。

民子。物入が嵩むのでね。（間。）松子さんと一緒に歌ふのかい。

道子。はい。お父さんがそうおつしやいますから。

民子。松子さんは素直で、活々して、いゝ娘だ。娘がませたのはあまり感じのいゝものではない。

道子。（苦しさうにうつむき、袂から編物を出して針を動かす。）

民子。何を編んでるの。

道子。（面を赤くし。）兄さんの手袋。

民子。成吉が頼んだのかい。

道子。いゝえ。

民子。松子さんは今日宅へ來るのぢやない？

道子。どうで御座いますか。

民子。ほんとに松子さんは雷のやうだ。見るものゝ心に樂しい春を約束する——

道子。私も松子さんは本當に好きで御座いますわ。

民子。成吉だつて大變氣に入つてゐるらしい。成吉のやうに一徹な激しい氣質の人間には、松子さんのやうな自由な、明るい心が側にあつて、和らげて呉れることが必要です。（間。）：成吉は此の頃どうして集りにも出て來ないのだらう。あれが教會に行かなくなつてからはもう久しいものだ。一日一度の朝の祈禱にだけは出て呉れなくては。妾達の心からだん〳〵離れて行くやうだ。成吉はお前に何か言はないかい。お父様や妾を信じないのだらうか。

道子。いゝえ。兄様はお父様を尊敬してゐらつしやいます。あゝいふいゝお父様は滅多にないと云

つてゐられます。

民子。妾のことはなんといつてゐるか知ら。成吉は妾の氣かは知れないけれど、何だか妾に心を
を固くするやうだ。

道子。お母さんも心から愛してゐらつしやいますわ。

民子。誰かゞいつたつけ。子供を持つのは心配を持つやうなものだつて。お腹にゐるときから母
親は色々な苦しみをする。恐しい産みの苦しみの後でやつと赤坊を抱き上げてから、それを
育て上げるまでにはどんなに心を使ふだらう。そして育て上げたときには子供の心はもう親
から離れてゐる。（間。）だけど此の頃の成吉はあんまりに私達から離れ過ぎる氣がする。個
人の自由は尊ばなくてはならない。けれど一家の團欒を傷つけて、皆に不安を感じさせるや
うでは……行つて成吉とよく話して見やう。（立ち上り、ドアの方に行く。）成吉は先刻何を
してゐましたか。

道子。本を讀んでゐらつしやいました。

民子。哲學の書物だね。哲學といふのは神樣の御計畫と其榮えとについて研究する學問だといゝ。

（民子退場。）

道子。（しばらく編物をつゞける。やがて針を止め溜息をつく。）私の思つてゐることは私の分に過ぎた願ひなのかしら。（間。編物を袂に入れる。）もしそうだつたら神樣がそれを消して下さるやうに。（聖書を手にとり、ところ〴〵見る。）私が今思つてゐるやうなことについて聖書にはどのやうに書いてあるのだらう。私にはよく分らない。（聖書を机の上に置き、立ち上り、室を歩く。）私の此の願ひがどうしても神樣のお教へに適はぬとは思はれない。（母の肖像の前に立ちどつと見入る。）私には本當にお母樣があつたのだらうか。何だか遠い〳〵雲の上に初めからいらつしやつたやうな氣がする。そして私を守つてゐて下さるやうな氣がする。（間。）私の心を分つて、憐んでゐて下さるのではないかしら。（夢見るやうな熱情的な表情になる。次の室に行き、窓の側に倚る。うつとりとして空想に浸つてゐる。）

（成吉登場。しばらく入口に凝つと立つてゐる。聽てしづかに道子の後に近づく。）

道子。（ふり返り。）あら兄様。（少し慌て、顔を赤くする。）いついらしつたの。

成吉。さつき。何か考へてゐるやうだつたから妨げまいと思つて。

（間。）

道子。母様が貴方のお部屋へいらしつたのですが。

成吉。うむ。いらしつたのだが。話しが苦しくなつたから失禮して來たのだ。

道子。お母様は心配なすつていらつしやいますよ。

成吉。心持ちは分るが、どうも僕は仕方がない氣がする。僕はお父さんや、お母さんを愛してゐるつもりだ。だが親の愛が或る境を越えて、自分の世界に侵入——といつては適當ではないかも知れないが、あまり立ち入つて來ると逃げ出したい氣がする。殊に母親のはあくどいからね。

道子。だけど母様は心から貴方を愛しておつしやるのですわ。

成吉。その愛が智慧で深められ、そして適當な或限りを保たなくてはかなり重苦しい——時とし

ては不愉快なものだ。

道子。母様は自分の家庭を御自分の氣に入るやうに、美しい、調和した一塊に保つて置きたいとお思ひになるのですわ。

成吉。それは母親らしい考へではあらう。だが僕には僕の思想がある。家庭の内に繋がれてばかりはゐられない僕の世界がある。思想でも、生活でも、僕は非常に高い程度の自由が欲しい。家庭といふものゝ基礎にも僕はかなり深い疑ひを持つてゐる。況してその内で行はれる習慣をそのまゝ受け容れることは出來ない。殊にその習慣が自分の心の内に在る非常に重大なものと矛盾したり、矛盾する程でなくてもルーズだつたりする時には。僕はものを純粋に、そして嚴しく考へたいのだ。

道子。皆が朝一緒に集つて、一日を義しく暮らすことが出來るやうに神様にお祈りするのは、あなたのお心に合ひませんの。

成吉。全く合はないことはない。けれど義しいといふことも色々な考へ方がある。神といふ言葉

も僕のとお父さんのとはかなり内容が違つてゐる。それに祈禱だつて、あんなに口に出して、他人の居る前で祈るのはどうも僕の趣味には合はない。

道子。お父様は、皆と一緒に、口に唱へなくてはわからない祈りの味があると云つてらつしやいましてよ。「主の祈り」などは殊にさうだつて。私などは朝お父様にお祈りしていたゞくのがどんなに嬉しいか知れませんわ。殊にあんなに信心な、いゝお父様に。神様がきつとお父様の名によつて、私にでも祝福を與へて下さる氣がしますわ。

成吉。お前にそれが、自然に出來るならそれでいゝのだ。何だかお前にはそれがよく似合ふやうな氣もする。だが僕にはどうもぴつたりしない。(間。)今の僕は一個の異教徒だ。(夢みるやうに。)非常に自由な、樂しい視界が今僕に展けかけてゐる。(部屋を歩く。)

道子。(ある感じを籠めて。)兄様が私のためにお祈りして下さらなくなつたのは私本當に淋しうございますわ。

成吉。(突然に歩みを止め。)僕はいつもお前の幸福を祈つてゐる。(非常に優しく。)お前は幸福かい。

道子。（涙ぐむ）はい。

成吉。お母さんは愛して下さるかい。

道子。……

成吉。お前氣を暢々してゐるがいゝ。女といふものは變に狹いものだからね。お前に氣の毒だ。

道子。どうぞ母様のことをそんなにおつしやらないで。

成吉。いや。女は質が悪い、變なところで復讐をするから。

道子。そんな言葉は恐ろしう御座いますわ。

成吉。お前は本當のお母さんのことを思ふかい。

道子。えゝ。だけど私は、私にはお母さんが二人あるのだと思つてゐますの、そしてそれを神様に感謝したく思ひますわ。一人は雲の上に、天國に、私の覺えぬ昔からいらつしやる。そして一人は地の上に、私の側に、いつも私の世話を燒いて下さる——

成吉。お前の亡くなつたお母さんは天國にふさはしい程清くて、美しかつたさうだ。（肖像を見な

がら。）お父さんはお前がお母さんの若い時に非常によく似てゐるといつてゐらつしやる。それが私のお母さんには氣にいらないのだ。

道子。私のお母さんはあなたのお母さんとお友達だつたではございませんか。

成吉。それが一層いけなかつたのだ。

道子。私のお母さんは何か悪いことをなさいましたの。

成吉。いゝや。決して！　天使のやうに清かつた。だが、悪魔が——

道子。兄様！　私はそれだけ聞けばよろしう御座います。悪魔の計畫を色々と知りたくは御座いません。

成吉。（考へる。）あゝ。それでいゝ。お前が苦しい事や醜いことをこれから先き知らずにすめばいゝが。お前は天の使に護られて暮らされるやうに。だが、僕はそれではいけない。僕は悪魔の計畫のどんな細部も知らなくてはならない。醜いことも、苦しいことも、それが此の世に存在する限りは眼を塞ぐことは出來ない。僕は此の世界の眞相を知らなくては。（道子の淋しそ

うなのを見て氣を揉へる。)道子お前は音樂をやつてゆくのだつたね。

道子。そうしたいと思つてゐます。だけど私に出來るかしら。

成吉。そう決心するがいゝ。お前のお父さんの遺志をついで。お前のお父さんは大變いゝ素質の音樂家だつたそうだ。不幸にして大きな仕事をしないで夭折された。お父さんがいつもそれを話して惜しがつてゐられる。

道子。兄様、私のお父様のことをもつと話して下さいな。誰もあまり話して下さらないんですもの。私のお父様はあなたのお父様と一番仲のいゝお友達だつたので御座いませう?

成吉。仲のいゝ——さうさなあ。まあ一番深い友達だつたのだね。御互の素質と使命とを最もよく理解し合つてゐると云ふ點でね。二人は中學の時から同窓だつたのだ。そしておまへのお父さんは一番深い藝術家で僕のお父さんは一番眞實な說教師にならうと志して互に勵まし合つて勉强してゐられたのだ。が或る出來事があつてから二人は往復しなくなつたのだ。其の意味では仲のいゝと云ふ言葉は當てはまらないかもしれないね。しかし互に自分の一番恃み

としてゐる處を理解し合つてゐるものが一番親友だとすれば——實際さうでなくてはならないからね。——二人はやはり一番仲のいゝ友達だつたと云つていゝだらう。（考へてゐる。）

道子。（不安さうに、成吉の顔を見乍ら。）一番親友がゆきゝをしないなんて、そんなことがあるのでせうか。

成吉。それがあつたのだよ。さうなる外はなく、又それが一番自然なことだつたらう。

道子。其の出來事と云ふのはどう云ふことなのかしら。私何だか聞くのが怖いやうな氣がするのだけれど。……

成吉。（一寸躊躇するがきつぱりと。）つまりお前のお母さんのことなのさ。

道子。……

成吉。お前のお父さんと僕のお父さんとはどちらもお前へのお母さんを思つてゐられたのだ。けれどお前のお母さんは僕のお父さんを尊敬していらしたけれど、お前のお父さんを思つてゐたのだ。そしていろ〳〵ないきさつの後で、お前のお父さんと結婚なすつたのだ。そこ

で僕のお父さんは二人の平和を亂さない爲に――

道子。兄様。私やつぱりもうよろしう御座いますわ。（着ざめ乍ら。）私胸がドキ〳〵して苦しくなりますから。

成吉。（憐れむやうに道子を見乍ら。）つまり三人とも爲すべきことをなされたのだ。幸福を享ける運命をあたへられた者は他人への同情の爲に眞理をまげないで勇ましく其の幸福をうけ、幸福を拒まれる運命を與へられた者は他人の幸福を妬まないで、自分の淋しい運命を勇ましく忍んだのだ。僕は其のどちらも勇氣が要ると思ふ。そしてどちらもヒロイツクな立派な行ひだと思ふ。（道子の不安さうなのを見て。）僕は云つておく。安心するがいゝ。お前のお母さんもお父さんも、少しも惡かつたのではない。只出來事は人生の不調和だつたのだ。

道子。（何か自分の內に感じた樣に。）さう云ふ不調和がどうして此の世界にあるので御座いませうねえ。神樣が御造りになつたよい世界に。

成吉。それだよ。それが實に深い、深い問題なのだ。お父さんが本當に說敎師としての使命を益

益確に感じられ出したのも其時からだつたのだ。お父さんは今では其の問題には打克つた積りでゐらつしやるらしい。しかしさうなられる迄には随分苦しかつたのだらう。（間。）が僕はまだ／＼とても解らないね。お父さんの言葉丈けではどうもぴつたりしない。自分には自分の見方がある。自分でぶつかつて考へなければ駄目だ。（獨白の様に。）今僕にとつて直接な問題は別な問題だ。僕は今世界を自分の爲に創りたいのだ。もつと積極的に此の世界を肯定したいのだ。自分の全身の情熱で此の世界の春を歌ひたいのだ。

道子。（溜息を吐く。）春つて淋しいもので御座いますわね。

成吉。ふむ。（空想し乍ら煙草に火をつける。）さうさな。無限の味——憧憬をこめた淋しさだね。僕は昨日郊外を散歩して沁々とそう思つた。あの××川の岸を歩るきに行つたのだがね。（煙草を吸ふ。）畑からはもうかげらふが立つてゐる。森には山櫻の早い奴がチョイ／＼見える。雪解けで川の水嵩はふえて漫々としてゐる。風が時々吹くと川岸の堤をぱつと埃が立つ。それがいかにも早春らしい。あゝ春だなと思つた。その時ふと遠くの山脈のまだ雪の殘つたのが

春の陽をうけて大きく波のやうにうねつてゐるのを見てゐたら僕は變に淋しくなつた。「山なみは淋し。山なみは淋し」僕はふとこんなことを云つてゐた。そして隨分長くぼんやりして立つてゐた。

道子。あの川岸は私も隨分好きで御座いますわ。あの××橋を渡つて、堤について五、六丁行くと猫柳が一ぱい茂つて、水車が御座いますね。彼處に立つて、川下の方に立つてる澪標（みをつくし）を見るのが私何だか好きですの。だけどその側までは藪があつて行けませんの。（追想的になる。）兄様去年の春は松子さんと三人であの川上に櫻草を摘みに行きましたわね。

成吉。（煙草の灰をはたき乍ら。）あゝ。あの時は愉快だつたね。（急に噴き出して。）あの時櫻草を摘んでしまつては、後から來る人のために殘して置かないのは不道德かどうかと云ふことについて、お前が松子さんと議論したつけな。

道子。あら。いやな兄様。

成吉。お前のは何處までもクリスチヤンらしい意見だつたつけ。

道子。（赤くなり乍ら。）だつてあの時兄様はあんまり大きな花束を澤山おつくりになつて、私何だか恐ろしい氣がしたんですもの。

成吉。（愉快さうに。）なあに。もつと川上に行くと櫻草だらけの野原があるのだ。幾ら摘んだつて摘み切れはしない。あれからずつと川上に行くと野薔薇の一ぱい咲いたそれはいゝ徑がある んだぜ。（ある追想のため、夢みるやうな目付きをするが、軈て堪え切れなくなつたやうに立ち上り、あちこち歩く。）

道子。（急に淋しそうに。）そんないゝ徑があるのなら兄様何故私を連れて行つて下さいませんの。

成吉。（解らない位ドギマギして。）なあに、少し道が遠過ぎるのでね。（煙草をしきりに吸ふ。）

（間。）

道子。兄様。

成吉。（歩みを止め、道子の面を見る。）

道子。（何か云ひかけて止める。やがて氣を變へて。）今日は松子さんがいらつしやるのでは御座いませ

んの。

成吉。あゝ。來ることになつてる。お前、松子さんが來たらあの獻堂式の日に一緒にうたふ歌を二人で稽古してお見。僕が聞いてあげるから。

道子。（何か考へ乍ら）ええゝ。

成吉。松子さんはお前の音樂の天分を感心してゐたよ。

道子。あら。私なんか駄目ですわ。それよりも松子さんこそそれは繪がお出來になるんですわ。

成吉。いや。繪は大したことはない。正直な處松子さんは藝術家として特にいゝ素質を持つてゐるといふのではないやうだ。まあ。僕はすゝめないね。彼の人のいゝ所は別にある。つまりあの素直な、のび〳〵した性質、水々しいふつくらした感觸、デリケートな處女性、そして何よりも品のいゝものと、下品なものとを感じ分ける先天的な、細かい感受性にあると思ふ。

道子。本當に松子さんは春の光のやうで御座いますのね。觸れるものゝ心を明るく、溫かにする

――私なんか彼の方と一緒にゐろ間は心がゆつたりとして、自由になつて心から嬉しくなりますわ。

成吉。あゝ。お前にはあつらへ向きのお友達だね。（笑ひ乍ら。）お前のやうに鬱ぎ屋さんには。

道子。（考へながら。）ほんとうに私はどうしてこんなのでせうね。いつもお父様から晴々としなくてはいけないとおつしやつて戴くのですけれど。そして私もさうなりたいと努めて居るのですけれど……

成吉。なあに、お前はお前でいゝのさ。人には各々違つた特色があるのだから。むやみに傍から矯めさせようとするのはつまらない事だ。その特色を生かし切つた方がいゝ。マリアにマルタの様になれとすゝめる必要はないからね。

道子。兄様。ほんとうに私にだつていゝところがあるのでせうか。

成吉。（快活に然し真面目に。）あるとも。僕はお前の様に清い感じのする處女はまれな氣がする。僕は誇りたい位な氣がして居る。

道子。（顔を赤くして、伏目になる。間。やがて或る感じをこめて、成吉の顔は見ないで。）だけど兄様は私の様な女はお好きではないのでせう？

成吉。好きだよ。どうして？

道子。だつて私には人の心を春のやうにするところがないんですもの。

成吉。（不安を感じて。）そんなことはないさ——それは同じ春といつても薔薇の花と忘れな草とでは違ふ氣分があるだらうけれど。

道子。兄様はあの忘れな草の話を知つてゐらつしやるでせう。

成吉。いゝや。知らないよ。何かあるのかい。

道子。あらそう。女の人は誰だつて知つてゐますのに。

成吉。女學生の知つてゐるやうなことは僕は知らないんだ。

道子。話しませうか。或る青年と娘とが川岸を歩いて居たんですつて。すると川向ふの岸に花が咲いて居たので、其の娘があの花を摘んで下さいつてお願ひしたんですつて。すると其の青

年は喜んで急流を渡つてその花を摘んで歸つて、娘の手に渡さうとすると途端に踏みすべつて、急流に落ちたんです。そうして流されながらも、もう駄目だと知つて、其の花を戀人の手になげて、「永久に私を忘れてくれな」と一言云つたきり、おぼれて死んだんですつて。それから其の花を忘れな草と呼ぶやうになつたんですつて。

成吉。（感動したやうに。）ふむ。ロマンテックな、美しい話だね。そういふ話の持つ悲しみはいつになつても新しく人の心を打つんだね。

道子。その死んだ青年の記憶は娘の心に一生涯生きたでせうね。

成吉。其の花を摘む毎に思ひ出しただらうな。（何か考へながら。）其の場合其の青年は輕はずみなことをしたとは云つて了ひたくないね。僕だつて愛するものから賴まれた時にはそれだけの、危險は喜んで冒すだらうから。

道子。其の青年はきつと丈夫な、男らしい人だつたやうな氣がしますわ。（小さな聲で。）兄様見たやうな——

成吉。（肩を聳やかすやうにしながら。）男は健康で、逞ましく、女は美しくてデリケートなのが自然の意志だらうな。

道子。（何か云ひかけて、心もち顔が青くなる。）

成吉。（立ち上り、縁側に出で、新しい煙草に火をつけながら庭を見る。）あゝ。春だ。

（間。）

道子。（突然。）兄様！

成吉。（道子を見る。）

道子。（眼に一杯涙を溜めてうつむく。）

成吉。（煙草を捨て、道子の側に倚り。）お前。どうかおしかい。

道子。（小さな溜息をつき、涙を一滴膝の上に落す。）

成吉。（道子の肩にやさしく手を置き。）道子。

（民子手に書きつけを持ちて登場。二人離れる。）

民子。（成吉に書きつけを渡し乍ら。）中西屋から書物を持つてきてゐますよ。お前の部屋の方にまはつて待つてゐます。

成吉。さうですか。

（成吉退場。）

民子。（道子の傍へに近寄りながら、不機嫌に。）道子さん。今日は少しいそがしいから手傳つて下さいね。

道子。（立ち上り。）はい。

民子。今晩今度見えた副牧師さんの小さな歡迎會が宅であるさうだから。少し準備があるのでね。それに獻堂式の日の案内狀を特別に書かなくてはならない處がかなりありますのでね。一般の寄附者へは教會の方の事務の方でして下さるんだけれど。帳簿を整理して見なくてはなりませんの。（主人の机に坐り、引出しより帳簿を出す。）道子さん。では部屋を片附けて、少し飾つて下さいませんか。

道子。あのいつものやうでいゝのでございませうか。

民子。（帳簿に何か書きこみ乍ら。）えゝ。それから花を今朝小山さんの處から綺麗なのを澤山戴いたからあれを持つてきて花瓶にね。

道子。（そこらを片附け、新らしい卓子掛けを掛け、次の間の食卓をきちんと直しなどす。一度退場し、直ぐに色々な花の、かなり大きな束を持ちて登場。花瓶にさす。）

民子。（振り返り、一寸改まつた態度にて。）あなたに一度御願ひしておかうと思つたんだけれど……

……どうか出すぎるやうなことのないやうにね。

道子。（うつむく。）

民子。成吉はあんな人間なんだから何でも無頓着な方だけれど、あなたの方で氣を注けて下さるやうにね。成吉の身の上については私が少し考へてゐることもあるんだから。小山さんからもお話があるんだし。

道子。（少し蒼ざめ乍ら、微かに唇を噛んでゐる。）

民子　あなたはおとなしくつて、悧巧だし、皆さんからも評判がいゝんだし、私は本當に成吉の妹のやうにして、これから先きだつて、出來る限り力になり度いと思つてゐるんだから。家庭でのいはゞまああなたの地位つて云ふやうなもの丶事をお腹の中で、忘れて下さらないやうにね。それが目立つては困るけれど。只心の中で一寸加減さへしてゐて下さればねえ。なあに只私が考へてゐる一つの樂しい計畫について、あなたが一つの障りと云つた風なものに成つて下さりさへしなければねえ。（獨白のやうに。）それは母として、又主婦として許されていゝ、一番樂しくつて、又大事な計畫なんだから。

道子。（見えない位慄へながら）母様。御免遊ばせ。私の氣の注かない處は是れから充分直しますわ。そして愼しみ深く致しますわ。これまでだつて氣を注けるには注けてゐたので御座いますけれど。

民子。（不機嫌に）それだつたら云ふことはないのですがね。まあ云つてみれば、私の目にはあなたが成吉に少し馴れ馴れしいやうに見えるんです。

道子。（涙ぐみ、ハラ〳〵しながら。）私さうだつたかしら。若しさうだつたら母様御免なさい。きつと氣を注けますから。

民子。（氣を變へて。）私にさう見えたのかもしれませんよ。おまへ氣にすることはありません。何にしろ私には家の事でいろいろな氣苦勞があるもんだからね。

（成吉登場。）

成吉。（二人の樣子を見て少しいら〳〵し乍ら。）道子。僕は××川の岸に少し歩きにゆかうと思ふのだが、お前一緒に行かないかい。

道子。（花瓶の花をつくろひ乍ら。）はい。私は……

民子。（成吉に。）今日は道子さんには少し手傳つてもらひ度いことがあります。

成吉。（不機嫌に。）さうですか。（本をひろげる。）

民子。今晩少し御客樣があるんでね。道子さん。ではあのナフキンを折つておいて下さいな。

道子。はい。（隣室の食器棚よりナフキンを持ち來たり、丁寧に花の形に折る。）

民子。（成吉に辯解するやうに。）副牧師さんの歡迎會があるんでね。

成吉。ふむ。（本をめくり乍ら。）また演說やお祈りなんかあるんですね。

民子。（不機嫌に。）お前そんな風な言ひ方はしないやうにね。おまへが共の席に出ないのはまあいいけれど——それだつて無論出て下さるのが本當だと思ふし、又嬉しいのだけれど——それは仕方がないとして、只さう云ふ催しに對して、敬意を持つ丈けのことはして下さらなくつては。

成吉。（にが〳〵しさうに。）敬意は持つてゐますよ。だがよくあんなことをきまりきつて同じやうにあきないで出來るもんだとは思ひますね。

民子。それはお前。愛のつとめと云ふものは別段そんなに珍らしいものではありませんよ。だけどつゝましい禮儀と應待との中に神樣へのつとめと、人への愛があり、又規則正しい節度の中に樂しい催しの氣分も出るのですからね。

成吉。だがあんまり事務的だ。（椅子を持つて緣端にゆき、煙草に火をつけ乍ら庭を見る。）

民子。（帳簿に何か書き込み乍ら。）お前さう御言ひだけれど、すべて愛のつとめと云ふものはいくらか事務的なものですよ。

成吉。（煙草を吸ひ乍ら。）だがすべて生命と云ふものは凡そ事務的な感じとは一致しないものだ。事務的になればもう物の生命はなくなつてゐるのぢやないかしら。（本をめくつて見入る。）

民子。だけど此頃のおまへさんはあんまり家の空氣と離れすぎます。私達は小さい時からお前をさう云ふ風には育てゝ來なかつたのだからね。もつと信者の家庭で育つた人らしくしてもらへないものかしら。教會で洗禮をうけて、小さい時からずつと教會に通はせて來たのだから。

成吉。（少し憤るやうな表情をする。）さうです。僕はなにも知らない子供の時に教會へ行つて、凝つと話を聞いてゐなければならなかつたんです。それが僕にはどんなに退屈だつたでせう。僕は友達と無邪氣に遊び度いのに、いつも、いつも教會にゆかなくてはならないのがどんなに厭だつたらう。僕は土いぢりをしたり、木に登つて櫻ん坊をとつたり、又友達と雪合戰をして遊びたがつてゐる。それをあなたは無理に教會に連れて行つて、解りもしない聖書の言葉

を暗記させたり、御祈りの眞似をさせたりなさつたのだ。おかげで僕の少年時代は、まるで自由と、生命のない不自然なものにされてしまつた。一體子供にキリスト教を教へ込むと云ふのは、どうも間違ひのやうだ。

民子。（書き止めて、）お前。そんな亂暴なことを云つては困りますよ。キリスト教と子供とは私は特別に離すことの出來ない關係があるやうに思ひます。キリストはあんなに子供をお愛しなすつたのだし、又マリアが子供を抱いてゐらつしやる所はどんなに調和してゐるでせう。

成吉。それはキリストの教を信じてゐる人が其の教へを腹に持つてゐて、其の心で子供を育てるのは美しいでせう。だが其の教を子供に吹き込まうとするのは間違だと思ふ。キリストが子供が美しいとおつしやつたのも、子供が天眞で、無邪氣で作つたやうなところがないからの事だ。言ひかへれば、宗教の事などおかまひなしに、呑氣に遊んでゐるからだ。一體子供にキリスト教が解る筈がないからね。

民子。成吉。おつゝしみ。お前は少し傲慢です。私はお前がそんな哲學の書物などを讀むのは元

から賛成ではなかつたのだ。神様の心から段々離れさすやうな學問はわたしやいゝものとは思へません。

成吉。（いら〳〵して。）僕は哲學に身を捧げようと思つてゐるのです。少くとも今の僕にとつては哲學は唯一の眞理に忠實な學問だ。自分にとつては神聖なものだ。本當に生命の書だ。（しきりに煙草を吸ふ。）

民子。生命の書は聖書がある許りです。（煙草の煙を見て、眉をひそめ乍ら）一體私はお前が其の煙草を吹かすのも好きではないね。正直なところ、あまりいゝ趣味ではありませんよ。

成吉。（ぶり〳〵し乍ら。）放つておいて下さい。さう云ふことは僕の自由だ。僕はさう云ふ風なことにかれこれ言はれるのが一等不愉快だ。

民子。（少し氣色ばんで。）でも云ふべきことは云はなくつちや。

成吉。いや。あまり人の世話を燒かない方がいゝのです。

民子。でも母が自分の子の生ひ立ちに就いて、必要だと思ふ注意をするのは當り前なばかりでな

く、また務めです。

成吉。（いら〳〵し乍ら）お母さん僕はもう二十四になりました。もう僕を放して下さい。僕はもう一個の獨立した自由の人間です。

民子。（口元に微笑を含み乍ら）お前が本當にそうなる日を私は待ち望んでゐるのです。

成吉。（興奮して）僕はもう巢立ちしたんです。巢の外の強い嵐や、冒險がもう僕を惹き付けるんです。其處には無限の刺戟が誘うてゐるのだ。僕の翼のまだ弱かつた時、あなたは僕を見守り、また飛ぶことを教へて下すつた。それは本當に感謝してゐます。だがもう親鳥から離れるべき時が來ました。僕の天地はもう巢の內ではありません。曠野です。海です。

民子。（少し掩ひかぶせるやうに）私に云はせて貰へば、お前はまだ子供ですよ。それは頭だけは大人のつもりかも知れないが、色々なもの〻考へ方——世間といふもの〻理解、人樣に對する應對、その他の處世上のことでは、まだ〳〵決して一人前の獨立した人間とは云へませんよ。私は學問のことは解らないが、その他の方面に無限の私の世界——見方があります。其處に

一つの母親の學校があつて、そこで母が一番かしこいまた親切な教師です。それだけは私は、家庭の中で、母といふものに與へられた領分——權利といつたやうなものが、ゆるされなくてはならないと思ひます。

成吉。（立ち上り乍ら。）僕はもうあなたの領分からは、はみ出てゐるものと思つてゐて下さい。實際僕はこれまであまり家庭に屬き過ぎてゐました。そのためにあまりドメスチツクで、柔順で、覇氣がなくなり過ぎてゐる。僕はもつと不羈でありたい。

民子。だが聖書の中にも度々あるやうに、羊を番する者のつとめと云ふものもありますからね。

成吉。（あちこち歩く。）僕は羊にさせられすぎた。これからはもつと獅子にならなくつちやあ。

民子。獅子だつて？　あの荒々しい、粗暴な獸にかい。

成吉。そうです。女の手には少し馴らしにくい獸にね。（間。）僕は昨夜も、日記にそう書いたんです。「我々は何よりも先きに獸でなくてはならない。生まれ出たばかりの若々しい獸でなくてはならない。」とね。（少し演說口調で。）僕は先づ歷史と因襲から與へられた一切の價値意識

を捨てゝかゝらなくてはならない。そして此の天の下、地の上に赤裸かで、あらゆる生物と並んで立ち、白紙のやうな心ですべてのものを見直ほさなくてはならない。生命の内から湧き起る自然の聲に聽かなくてはならない。

民子。何よりも神様のみ聲に聽かなくてはね。神の道によつて生きるのが、一等義しいのだから―

成吉。（頭を抱へて）あゝ、いやだ。子供の時から幾度聞かされた言葉だらう。あまり暗誦さゝれたもんだから、もう新しい刺戟がちつとも、來なくなつてしまつた言葉だ。

民子。（詰責するやうに。）氣をおつけ。どんな立派な大學の學者だつて、聖書を尊敬してゐない人は少いのですよ。

成吉。僕も聖書は尊敬してゐるんです。

民子。（嚴しく）ではもつと云ひ方を氣をつけるがいゝ。お前のやうな口ぶりはお父さんに對しても失禮です。

成吉。（興奮して）僕はお父さんは深く尊敬してゐます。僕は他人が聖書を信じるのを妨げようと

するのではありません。その代はり同じ権利で自分の思想と、領分にも他人が入り込むことを拒むのです。それは當然なことです。僕はもう完全に、獨立したものとして取扱つていたゞきたいのです。

民子。お前そうおいひだが、私はまだそれは認められませんよ。私がそう認めるまでは私は何處までも母として云ふだけのことは云ひますから——

成吉。認めて下さい——何故ですか？

民子。何故つて、お前、まだ〳〵色々な——（突つ込むやうに。）第一お前獨立といふことには經濟的な根據がなくつちや。烏だつて巢立ちするには一人で餌を拾つて喰べる力がなくてはなりませんからね。

成吉。そうですか。（顏色を變へて、一寸沈默す。）尤です。それを云はれては一言もありません。

子。だからまあある時期が來るまでは家庭の中でのことはなるべく私の云ふことを立てるやうにして置いて貰ひたいのさ。

成吉。僕は何も云ひません。あなたのおつしやることは僕の痛い處に中つてゐますから。

民子。私は何もそれをかれこれ云ふのではありませんよ。或る時期まで子供の生計を支へるのは親の當然の義務です。殊に此の頃のやうに生計の問題から放たれて、長く勉強してゐるだけ、先きで有利な社會上の地位の得られるやうな時代にはね。

成吉。いや。僕は一日も早く一本立ちになりたく思つてゐるのです。

民子。なあに。澤山收穫れるためには、澤山蒔かなくてはなりませんからね。

成吉。（眉を顰める。）お母さん。僕はそういふ風におつしやられると苦しい氣がします、僕がパンの問題を親に任かせて、かうして勉強してゐるのは決してあなたのおつしやるやうな風に考へてやつてるのではありません。云はゞパンの問題については無頓着だつたのです。ほかに大切な問題が一杯あるものですから。僕はパンを親に負うてはゐますが、それだからと云つて、その問題だけはまあ別に氣にとめないで、自分の要求だけはしてもいゝと云つた風に呑氣に考へてゐた譯です。しかしかなり蟲のいゝ話です。其處を突つ込まれゝば、僕は口をつ

ぐむ外はありません。

民子。話がそんな風になることは私のつもりではなかつたんですよ。私が云はうとしたのはたゞお前さんがもつと私の家庭の中での――

成吉。（いら〳〵し乍ら）お母さんもう解りました。

民子。解つて貰へさへすればいゝけれどね。

（間）

（女中登場）

女中。奥様、今晩のお料理の方はあれでよろしいので御座いませうか。一寸御覧下さいませんでせうか。

民子。よろしい。すぐに。（立ち上る。）

（女中退場）

民子。（ドアの方に行き乍ら一寸振り返つて稍和睦的に。）一寸氣になるから、も一度云つて置きますが

ね。私が今云つたのは無論お前が經濟的に獨立するのを促した譯ではありませんよ。解つてるとは思ふが。何しろ家の中のことは母親に任せて貰ひたいのさ。

（民子退場）

（間）

成吉。（椅子から離れあちこち歩く）何だか不愉快になつてしまつた。

道子。（ナフキンを戸棚にをさめる）お氣になさらないで。（間）兄様。お願ひですからお母様にあまりおつしやらないやうに遊ばして下さいな。

成吉。（椅子にかゝる）うむ。別に云ふつもりでも無いんだが。云つたつて始まらないことも解つてるし。——どうもお母さんの口ぶりには變に人の反抗心を挑むやうなところがあるからね。（考へて）お前も隨分氣揃いことが多いのだらうが——

道子。（心苦しそうにしながら）それほどでもありませんわ。

成吉。ねえ。道子。さつきお母さんが何か云つたのかい。——僕が本をとりに行つた間にさ。

道子。（うつむく。）ええ。ちよいと。

成吉。どんなことを云つたかい。

道子。（口ごもつてゐる。）

成吉。僕に關係した事かい。

道子。……

成吉。（たゝみかけて。）僕の事だつたんだらう。

道子。兄様。どうぞお訊き遊ばさないで。（涙ぐむ。）

（間。）

成吉。あゝ。きくまいね。（間。）お前とにかく、あまり氣にしないがいゝよ。心を快活にして、自分の思ふ通りをもつと自由にやるがいゝのだ。やりにくい所もあるだらうがね。お父さんはあんなに義しくて、そして自由な人なんだし、そして僕は何んな場合でもお前の味方だからね。

道子。（涙ぐみながら、うなだれて）兄様解つてますわ。解つてますわ。

（間）

成吉。（氣を替へるやうに、椅子を縁端に持つて行き、元氣よく腰を下し、本を開いて）お前セザール、フランクといふ音樂家の事を知つてるかい？

道子。いゝえ。よく存じませんの。

成吉。此處に傳記が出てるんだがね。これが寫眞だよ。（本を示す）

道子。（側に寄つて、本をのぞき込みながら）寂しさうな方ですのね。質素な服を召して。お髭の勢かもしれませんけれど——

成吉。それに年老つてからの寫眞だらうからね。孤獨な音樂家だつたらしいのだよ。

道子。（しみ〴〵寫眞を眺めながら）私何だか私のお父様の事を思ひ出しますわ。

成吉。此人の弟子にシヤミナードと云ふ女のピアニストがあるね。

道子。そうですか。私何だかこんな方のお弟子に成りたく思ひますわ。

成吉。さうさなあ。日本にはお前の先生にしたいやうな良い音樂家がなくて不可ないねえ。外國へでも行けると好いんだが。フランスへでもね。小山さんところにセザール、フランクやシヤミナードの曲のも、良いレコードがパリーで造つたのが來たさうだから、今度松子さんと一緒に聽かうぢやないか。

道子。ええ。聽きたう御座いますわ。

成吉。お前本當に一生懸命にやつて御覽よ。きつとお前は良い音樂家に成れると思ふ。血は良いんだし、感情やムードも音樂的だし、僕は何うも可成プロミツシングな氣がするのだ。

道子。（うれしさうに顏を赤くしながら。）私出來るか知ら、……だけどやつて見ますわ。一生懸命に。

成吉。（元氣よく。）あゝおやりよ。本當にね。

（間。）

道子。（何か云はうとして止める。）

成吉。（煙草に火をつけながら、庭を見て。）鶯が鳴いてるね。

道子。（何か考へてゐたが耳を傾けて。）ほんとうに。（間。）よく鳴きますね。

成吉。西洋のナハテイガルと云ふのは夜鳴くんだそうだが、日本の鶯でも矢張り陰を好く傾向があるやうだ。僕が發見したんだがね。僕は高い山へ登る事が好きなのでよく山道で鶯を聞くのだが、何うも陰の處でよく鳴くやうだ。

道子。（何か考へながら。）あのアグネスに皇子が鶯の一杯ゐる園をやらうと約束する所は私好きで御座いますのよ。

成吉。そうだつたね。僕はずつと前高等學校の時に讀んだのでよく覺えてゐないが。

道子。（再び何か言ひかける。）

（女中登場。）

女中。小山さんのお嬢様がお見えになりました。

成吉。（煙草を捨て。）さうかい。何所に？

女中。奥様とあちらでお話しで御座います。貴方にねらつしやいましつて。奥様が。

成吉。ふむ。

（女中退場。）

成吉。（少しそわ〳〵しながら。）ヘツベルは僕は随分好きだ。殊にあの氣位が高くつて、幾らかワイルドな所がね。僕には可成ピツタリする所がある。

（間。）

成吉。（手持無沙汰になるのを避けるやうに、語をつゞけて。）ワイルドといふものは、それ自身いゝものでは無論あるまいが、充ち溢ふれた生命が表出を求める時、そしてそれが天眞なときには自然の結果として、そうなるものだからな。リフアインメントといふものは、多くの場合、作意的で、他人の思はくをはゞかり、そして生命の燃燒を缺いてゐる。（道子が默つて居り、且つ自分の會話が何處か意識的なのを感じて氣まり惡るそうに沈默す。）

（間。）

道子。（同じく少しアウクワードネスを感じ乍ら。）キリストなどはどういふので御座いませうね。

成吉。キリストなどはワイルドネスとリフアインメントとのよく調和した人と思ふが、併しやはり「野」の感じがその言動に一杯こもつてゐるからね。使徒などもそうだ。キリスト教も原始的聖書的にはどうしてもワイルドなものと云はなくてはなるまい。今のキリスト教が墮落して生氣を失つたのは、教會といふ建物、或は一つのゲゼルシヤフトの中に墮ちて、その野性を失つたからだと思ふ。（間。見えない位赤くなり乍ら。）では一寸あちらに行つて來るよ。——お前も來ないかい。

道子。後から參りますわ。少し——もつとかたづけてから。

成吉。そうかい。

（成吉退場。）

道子。（しばらく茫然とする。やがて溜息を吐き椅子に腰を下ろし、考へに沈む。）

（廊下を民子と女中と何か話しながら通るのがきこえる。）

道子。（身を起し、部屋をかたづけ初める。その間始終何か考へてゐるが、何か思ひ申つたやうにがつかりした樣子にて、くづれるやうに膝をつき、椅子に兩肱を置き、頭を支へ深い溜息を吐く。）

（廊下に足音と咳拂ひがきこえる。）

道子。（再びはつとして身をとり直ほす。）

（順作と民子登場。）

順作。（ニコ〳〵し乍ら。）うむ。やはり教會の用事だつたが。すべてが都合よく運んでゐる。小山さんは矢張り、中々しつかりしてゐる。立派な人間だ。

民子。（外套を脫がせ乍ら。）それにさばけてゐらして、物の話が手取早く捗りますのね。——松子さんが來てゐます。

順作。そうかい。——新しい會堂の方へも廻つて來たが、工事がずん〳〵進んでゐる。此の分なら復活祭には獻堂式が間違ひなく出來るだらう。

民子。何よりでございますね。催ほしといふものは、何でも樂しいもので御座いますけれど、此

度のは神様の家を築き上げてそれを祝ふ爲の祭りで御座いますものね。それに一つの煉瓦だつて、捧げられた清い財で出來て居るのですから。

順作。本當だ。私も心から嬉しい氣がする。工事を見て居たらすつかり嬉しくなつて、家に歸つてお前たちにも悦んで貰ひたくなつたのだ。それに晝餉はやはり皆と一つテーブルで食べたいからね。

民子。本當にね。では今日は御馳走を致しませう。

（民子退場。）

順作。（あたりを見まはして。）すつかり綺麗に片附いたね。（滿足さうに。）今夜の仕度だね。

道子。はい。副牧師さんの——

順作。今夜の歡迎會に丁度松子さんも來てゐし。あの獻堂式の歌を打ち合はせて見るといゝ。

道子。だつて何だか氣まりがわるう御座いますわ。初めての方の前で。

順作。なあに。これからは懇意にしなくてはならない方だし、他は内輪見たやうな人許りなんだ

から。――（道子の顔を見る。）お前どうかおしかい。

道子。いゝえ――少し氣分がわるいだけですの。だけど何でも御座いませんわ。

順作。そうかい。（凝つと道子の樣子を眺め、やがて、靜かにテーブルに向つて椅子に腰を卸ろし、そのまゝ暫らく凝つとしてゐる。）

道子。（兩手を膝に置き、うなだれたまゝ凝つとしてゐる。）

（間。）

順作。（靜かに振り向き。）道子。一寸お出で。

道子。はい。（父のテーブルの側に行き腰をかける。）

順作。（道子のかたくなつてゐるのを見て。）なあに。別に何でもないのだがね。改めて云ふやうなことではないのだが、一寸ふとしたことで感じた事があるから、話して見たいと思つたのさ。――心の靜けさ――平安といふことについてだがね。それは人間の靈魂に一番大切なものなのだ。他に何があつても、その靜けさがないときには、心は祝福された狀態にあるといふこと

はできないのだ。（考へ乍らポツリ〳〵と。）だから私たちは心をしづかに保つて、神様の祝福を宿すやうにしなくてはならない。だがその靜けさといふのは內面にも外面にも、出來事がないといふ意味ではない。それではつまらない。何故と云つて、眞面目に生きる人程そういふ出來事は多いのだから。だから本當に尊い靜けさといふのは心の內に大きな出來事があり乍らも保たれてゐるのでなくてはならない。神様はそういふ意味での平安な靈魂をお喜びになる。

道子。（父の顏は見ないが、行儀よく、注意深く、一心に聞いてゐる。）

順作。がそういふ心の靜けさを保つにはどうすればいゝであらうか？　それはやはり神様を信じて據りすがるより外にはない。——例へば人から冷めたく遇はれて、心がさびしく、或は不平を感じる時には神様に賴つて心を慰めなくてはならない。「責められるゝものは福なり」の幸ひを感じるやうでありたいものだ。

道子。（涙ぐむ。）

順作。いや。それはまだ一番高いところではあるまい。それはまだ一度他人を惡いものとして裁

いて置いてからでなくては保たれない平和だから。一等高いのは他人が虐げたといふやうな裁きを一度も心に感じないで、却つて其處にめぐみを感じられるやうな心境だらう。（間。）また何か自分の心に願ひがあつて、しかもその願ひが悪いものとは思へないのに、それがどうも滿たされないとき――そういふ時が私たちの一等苦しい時なのだが――そういふ時でも、それを忍び受けて、神様のめぐみを信じて息ふ心でありたいものだ。（道子の睫毛に涙が一杯たまる。）その願ひが適ふか、どうか、決められない時には實に不安なものだ。そういふ時に私たちの心は一番みだれる。だがその時にも神様に祈り、どのやうになつても神様のめぐみの御計畫の中にゐるのだと信じて、安らうてゐたいものだ。

道子。（膝の上に重ねてゐる手の甲の上に涙を落とす。）

順作。（道子の顔を見ずに。）がそれは中々すぐに出來ることではない。たゞそういふ心がけで絶えず努め、神様に祈りたいものだ。がいふまでもなくその願ひを捨てるのがいゝのではない。キリストの教へにはそういふことは決してない。私達の生活はその願ひに依つて始めて意味を持

つのだから。その願ひが良い純なものである限りはそれを何處迄も持ち續けるがいゝ。その願ひを生かし切るやうにするがいゝ。誰も其れを干渉する權利はないのだ。

道子。（微かにすゝり泣く。）

順作。（道子の白い薔薇の鬢のふるへるのをぢつと見ながら。）だがねえ。その願ひが適ふかかなはないかは神樣のみ旨にある事だ。其處に恐しい試みがある。願ひはかなつても、かなはなくても、その願ひで自分を生かし切るがいゝ。何んな場合にでも神樣の惠みを信じる事の出來る者は幸だ。

道子。お父樣！（父の膝に顏を埋める。）

順作。（道子の背中に優しく片手をのせて。）わしはお前の爲に祈る。お前に幸が多いやうに。お前も神樣にお祈りするがいゝ。試みが今お前の小さな靈魂の上に課せられたのだ。（目を閉ぢて默禱す。）幕。

第二幕

成吉の書齋。中央稍々左手に可成り大きな卓子。椅子數個。正面右手壁に接して大きな書棚。ぎつしりと洋書が詰まつてゐるが、哲學書が可成り多い。周圍の壁にいろ〳〵な額が掛けてある。正面左手の壁に一きは大きなボツチチエリの「春の比喩」が掛けてある　卓子の上に五、六册の書物。原稿用紙。其他文具がある。卓上電燈在り。其の横にアネモネの鉢。鉢は綺麗な模樣のついた紙で掩うてある。花の前にデカルトの肖像が小さな額に入れて、立てかけてある。左側に硝子窓。市街を越して、廣々とした郊外の景色を望む。窓の下にソファーあり。右側にドアとストーヴあり。（家は小高き臺地の上に立ち、程遠からぬところに、郊外の小さきステイションあり。）

（成吉机に向かつて書物を讀んでゐる。）

（他の部屋から多人數何か合誦する聲が聞えて來る。）

成吉。（一寸眉をひそめるが、又讀みつゞける。）

（女中登場。）

女中。奥様が一寸でよろしいから、あちらにいらつしやいますやうにつて。

成吉。（書物から目を放さないで。）僕は失禮致しますつて。

女中。（少し當惑したやうに。）あのちよいとだけ。御客様に挨拶だけして下さいましつて。

成吉。（うるさうに。）今夜は御免下さいつてさう云つてくれ。

女中。宅の御嬢様と小山様の御嬢様と只今歌を御打ち合はせになるんで御座いますつて。

成吉。（初めて後ろを振りむき。）失禮しますつて言つてくれゝばいゝのだ。

（女中退場。）

成吉。（書物を讀みかけるが、やがてパタリと書物を閉ぢ、少しいら〳〵したやうに立ち上り、部屋をあちこち歩く。「春の比喩」の前に立ち止まつてしばらく繪を眺め、やがて窓のそばにゆき、外を眺めゝあゝ美しい灯だ。（しばらく沈默。やがてソファーに腰をおろす。）

（此の時ピアノの音と、女のうたふ聲が聞えてくる。やがて止む。）

成吉。（起ち上り少し興奮して、部屋の中を歩きまはり、突然立ち止り、何か決心するやうに、机の前の椅子

に坐り、デカルトの肖像を意識的に凝つと眺めるやうにし、少し衒ふやうに。）コギトー、エルゴー、ズウム。ふむ。（本を開き、讀み入る。）

（松子登場。興奮して、少し上氣して赤くなつてゐる。成吉のそばに近づく。）

成吉。（氣がつかぬ風に、本を讀みつゞけてゐる。）

松子。成吉さん。

成吉。（振りむいて）一役すませてきたわけですね。

松子。（赤くなつて）あら。だつて仕方がなかつたんですもの。

成吉。（不機嫌さうに。）歡迎會——讃美歌——あのきまりきつた歌ひ手になるなんてつまらない。

松子。だつて伯母さんがいろ〳〵おつしやつて、斷わり切れなかつたんですわ。御氣にさはつて。

成吉。あまりいゝ氣持ではありませんね。僕がおよしなさいつて云つておいたのに。——まあ御掛けなさい。

松子。（腰をかける。）お厭だつたら御免なさい。

成吉。僕は一體あなたをあゝ云ふ集りへはあまり出させたくないのだ。いやに社會的になられては困るから。それも世間並みの社交的とちがつて、宗教と社交とが一緒にこんがらがつたのはたまらない。

松子。私にそんな風なところがあるとお思ひになつて。

成吉。今はなくても教會などにあまり出入りしてるとそういふ風になりますよ。

松子。だつて——では道子さんなんかどうですの。

成吉。道子ですか——彼奴は不思議な奴です。あれでチヤンと調和してゐるから。彼女（あれ）などはクリスチヤンの一等いゝ感じの出てゐる奴でせう。あれは元來あまりに非社交的な性質に出來すぎてゐるから。少しは人の集りに出る方がいゝ位でせう。併し貴女の場合は、道子とは違ひます。

松子。（少し不滿足そうに。）どうせ私なんかおてんばですわ。

成吉。そうです。貴方などは幾らかおてんばの方がいゝのです。それをキリスト教で不自然に矯

めるといけないのだ。そのまゝでいゝのだ。完全に美しいのだ。（松子の面を満足そうに眺めて。）僕だつてあなたがもてるのはいやな譯ぢやないんだが――

松子。（嬉しそうに。）あら嫌だ。（間。）だけど私だつて考へなくてはならないことは少しは考へましてよ。

成吉。そうです。本質的な、要處、要處にだけ神經が利けばいゝのだ。（間。）何でも自由なのがいゝ。思想でも行爲でも生きてゐるものは皆自由だ。其處に生命の美がある。（幾らか演說口調になる。）若しキリスト教がその自由をなみしようとするならば、それは生命に對する冒瀆である。

松子。（又初まつたといふ樣な顏を一寸するが。しかし嬉しそうに、又たのもしそうに、熱心に耳を傾けてゐる。）

成吉。今の僕はキリスト教よりも、ギリシヤの思想や藝術に惹き付けられる。ギリシヤ人は自然から與へられた生命を喜んで享受し、それを出來る限り生かし切らうとしたのだ。出來る限りより美しいもの、より大きいもの、を生み出さうとしたのだ。其處に健康と自由と生命と

が漲つてゐる。生命に對する感謝、美に對する讃仰、——堂々たる白晝の享樂がある。（時々無意ではあるが、一寸した身振りをする。）僕達にとつて最後の據り處は與へられた內部生命だ。その生命の自らなる發動だ。その意味に於て僕は自然主義だ。（段々興奮して。）彼の野草を萠えさせ羊を孕ますの自然力——その同じ力が僕達の內部にもある。その力こそ僕達の權威——神だ。（間。少し涙ぐみながら。）僕は考へると嚴肅な氣がする。生きるといふことは何といふ不思議だらう。（卓の上の書物を開いて。）ギリシヤの彫刻は實に美しい。（松子に書物を渡す。）

松子。（膝の上に書物を載せて頁をめくる。）

成吉。（指しながら。）いゝでせう。プラキシテレスのヘルメス。

松子。（頁をめくりながら感心したやうに。）いゝのね。

成吉。カラミスのアフロデイテ。

（女中登場。）

女中。只今お客樣方がお歸りでございます。

（紅茶と菓子の皿を小さな卓の上に置く。）

成吉。（松子の立ちかけてモジ〳〵してゐるのを見て。）いゝでせう。別に送らなくても。

松子。（腰を下ろす。）

（女中ストーブに石炭をつぎ退場。）

（二人沈黙。遠くで汽笛の音が聞える。）

成吉。（内に湧き起る何ものかの力に堪えられなくなつたやうに。）あゝ。人生。人生。（此の臺白は稚氣を帶び、且つ氣障にならぬやうに表出さるゝを要す。）

（極くかすかではあるが汽車の通る響きが聞える。）

成吉。（立ち上り、腕組みをして部屋を歩く。）

松子。（膝の上に立てた本の上に顎を載せ、うつとりとして何か空想してゐる。）

成吉。（ボッチチエリの額の前に立ち止り。）ねえ松子さん。

松子。（我に返り、成吉の顔を見る。）

成吉。貴女はどう思ひます。（何か云ひかけて話頭を反らし、額を眺め。）此のヴイナスの頭の上を飛んでゐるキューピツドがねらつてゐるのは此のマーキュリイの心臓でせうか。それとも此のマートルを蹈んで輪をつくつて舞つてゐる三人の處女の一人でせうか。

松子。さあ。（本を卓の上に置き、額の前に行き、成吉と並んで立ち給を眺める。）

成吉。僕は此の羽根のついた兜を被つた若い、逞ましい青年の方がふさはしいと思ふし、また僕が見た本にもそう書いてあるのだが、此の矢の方向ではどうも處女の胸のやうにしか見えないのだが——

松子。（一寸考へ、少し顔を赤らめ乍ら。）だけど、結局どちらでもいゝのぢやないか知ら。此のキューピツドは初めマーキュリイを覗つたにしても、次ぎには屹度アグライアを射るでせうから。

成吉。（微笑して。）なる程ね。此のユーフロジーヌもターリヤも逃れつこはあるまい。此のいたづらそうな童神奴は、あらゆる青春の心達を一つもあまさず射るのだらう。

（再び汽笛の音が稍長くきこえる。）

松子。（窓の側に行き外を眺める。）汽車が！　あの測候所の下の櫟林の側を。（見惚れて。）何ていゝ景色でせう。あの吐き出す水蒸氣がぽーツ〳〵とすぐに眞白にかたまるのがいかにも初春らしい。

成吉。（窓の側に倚り、並んで外を眺める。）ふむ。さむ〴〵として美しいね。

（間。）

成吉。ねえ。二人で何處かへ乘つて行きたいね。

松子。いゝわね。

成吉。あれから一度も遠くへは行かないんでしたね。——あの記念のトリップから。

松子。えゝ。

成吉。あんなに內緒で、あんなに樂しい旅つてあるだらうか。——たつた二時間の旅程ではあつたが。

松子。（追想しながら。）鴻の臺から船に乘つたのね。川甚までの堤は隨分寒くはあつたけれど——

成吉。僕のマントの中であなたが小さくなつて慄えてゐたつけ。

松子。あの時馬に騎つた立派な人に出遇ひましたつけね。丁寧にお辭儀して私たちの前を通つて行つたつけ。（少しおかしそうに。）——變なことを覺えてゐるものね。

成吉。あなたの指に蜜柑の黃ろい汁やすぢが一ぱいついてゐたつけ。

松子。あら。まあ。

成吉。此度どこかへ行かうぢやありませんか。

松子。本當にね。

成吉。信州へでも行つたらね。僕はあなたとあの雪のつもつた大きな山の皺が見にゆき度いのだ。

松子。（夢見るやうに。）あゝ。どんなにいゝでせう。

成吉。（何か決心したやうに、きつぱりと。）そして此度は一つ泊まつて歸るのだ。

松子。（眞赤になつて。）だつて。

成吉。（強く。）それだけの冒險はしなくつちやあ。――僕はあなたに眞面目に話したいことがあるのだが。

松子。（少しおづ〳〵し乍ら。）何ですの。

成吉。（眞面目に。）あなたは人間の肉體と云ふものについてどう云ふ風に考へてゐますか。

松子。どう云ふ風につて？（成吉の顏を一度見て、直ぐにうつむき。）私よく解りませんわ。

成吉。（少し固くなり乍ら。）僕は其の事について一度あなたに云つて置き度いと思つてゐるのだが、肉體と云ふものは少しも醜いものではない。さう云ふ風に思はせてきたのはキリスト教などの偏見からだ。僕なども小さい時からそう教へられて來たのだが、さう云ふ考へは實に此の尊い生命に對する冒瀆だ。（半ば演說口調になりながら、しかし一生懸命に。）我々の生命は肉體と精神との別個の二つの存在ではない。靈と肉とは一如なる生命の二つの顯現である。肉體を離れて精神と云ふやうなものはどこにも存在しない。一つの生命を內から直感すれば精神で在り、外から感官を通して知覺すれば肉體だ。つまり肉體は生命のシンボルだ。その何處に

も醜いものはない。戀は二つの生命の抱合である以上それは靈肉併せての抱合でなければならない。それでなくては本當に戀し合つたとはいへない。戀は一つの性が他の性と抱合して第三絶體者を創造せんとする要求だ。靈肉をひつさげて、靈肉に抱合し其の間水も洩らさぬやうにぴつたりとすきまなく一つのものとならなくてはならない。若し肉體の接觸を許さないならば、それは生命の半分での接觸と云はなければならない。其處にどうして全生命の法悦があらう。僕達は若し本當に戀に生きようと思ふならば、僕達の心と心とが結び付いてゐるやうに、肉體と肉體とも抱き合はなければうそだ。

松子。（心持ち顔色が蒼くなつて、かすかにふるへてゐる。）

成吉。僕の氣持は解るでせう。僕は僕達の戀愛を純粹無垢なもの、完全なもの、むしろ絶對なものにし度いのだ。僕は其の爲には僕達はどうしても一度肉體の交りをしなくてはならないと思ふのだ。

（ドアを叩く音が聞える。）

民子。（ドアの外にて。）はいつてもいゝのかい。

成吉。（一寸ドギマギするが直ぐに落ちついて。）えゝ。いゝのです。

（民子登場。二人の様子を見て、一瞬間ハッとして入口に立止まるが、直ぐに機嫌よく近づく。）

民子。お前とう〳〵出なかつたね。

成吉。（卓の方に歸り乍ら。）へえゝ。

民子。（なほソファーの上に腰かけて、少しぼんやりしてゐる松子を見て微笑しながら。）まあ今夜の處は代りに松子さんが二人分も勤めて下すつたのだから、あまり不平も云ひますまいよ。おかげで御客様にもお愛想が出來、宅の貧しいもてなしにも花が咲いたわけさ。なにしろ集りには美しい娘さんは缺いてはならないものなのだから。

成吉。（不愉快さうな顔をしながら。）そうですか。小山さんは？

民子。しよつちゆうにこ〳〵してゐらつしつたよ。誰れだつて、自分の娘が皆の注意の的のやうになるのは厭ではないからね。

松子。父はもうおいとましたのでせうか。

民子。えゝさつき。（成吉に。）今晩お前に逢はないで歸へるから、よろしくつて云つてゐらしつたよ。

成吉。さうですか。

松子。では私もおいとましませうかしら。

民子。まあよろしいぢや御座いませんか。ゆつくりしていらつしやいましな。お歸へりにはときに送らせますから。（松子がもじ〳〵してゐるのを見て。）御遠慮なさらないで——內輪見たやうなものぢやございませんか。

成吉。も少しゆつくりしたらいゝでせう。

民子。こちらにゐらつしやいまし。

松子。（卓のそばに行つて腰をおろす。）

民子。（松子に茶をついでやりながら。）此の節はお母様はいかゞでゐらつしやいますの。

松子。わりに元氣に致してゐます。

民子。それは結構でございますね。本當にお大切になさいますやうに。お臥み遊ばすやうなことはないのでございますか。

松子。やはり靜かにはしてゐなくてはならないのでございますが。でも園中の花は自分で受け持つてゐますし、父のやつてる蝶の研究の助手もしてゐますし、なか〳〵凝つとしてはゐませんの。

民子。では今朝いたゞいた花はお母様がおつくり遊ばしたので御座いますか。

松子。さうですの。今朝自分で剪つたんです。母は庭の仕事を本當に熱心に、たのしそうに致しますのよ。

民子。それはお母様がおやさしくて、細々と注意のゆき渡るお氣質だからで御座いますよ。花が育つのと、育たないのとで、その家の主婦の氣質がわかると申しますのは本當で御座いますね。

（幾分か媚びるやうに。）私なんか少しは物眞似をして花をつくつてゐますけれど、なか〳〵育ち

は致しません。——つまりあまり性質のよくない方なんで御座いませうね。

松子。（笑ひながら。）そんなことがあるものですか。

成吉。（氣揃さうにしながら。）あなたのお父さんの蝶の研究は隨分大したものだ。僕は先日見せてもらつて感心した。僕にはどうせ專門的なことは解らないんだが。あゝいふ純粹な、學術的な興味は實に尊いものだからね。何かのためにするのでなく、眞理のために、眞理を研究するといふ氣持は本當に無垢なものだ。その先入主のない對象に一致し切つた、ハンブルな心境は眞如に近い。僕は科學をやるのではないが、その學者的な態度をあなたのお父さんから、隨分教はつた。本當に有がたいと思つてゐる。

民子。神樣がお創りになつた動物の構造を研究して、その創造の巧みに驚くのは人間にとつて、一つのたのしい學びに相違ないでせう。たゞそのために思ひあがつて、不信心にさへならなければねえ。

成吉。博物學者が神を認めないからと云つてその學者が駄目なわけぢやあない。小山さんは神を

認めてゐられるが、それは彼の人の博物學から來てゐるのでもなし、またそのために學者としてのあの人が偉らくなるわけでもない。カントが云つてゐるやうに、信仰と學問とは別な根據に立たなくてはならない。

民子。（少し不服さうに。）だが博物學者には神樣を濟す人が少くないからね。ヘツケルなんていふ人は私どうも好きではありませんね。

成吉。（少し不愉快そうにするが、すぐに氣を變へて。）今度山へ登つた時にはお父さんに蝶をとつて來ませう。めづらしい類の奴が高山にはゐるからね。

松子。隨分悦ぶでせう。蝶で夢中なんですから。異種を一つでも見つけようものなら。大變なんですからね。

民子。お母さまはそんな仕事の助手がお出來になるなんて感心で御座いますわね。

松子。母は私なんかとちがつて綿密なたちですから。それに父の仕事を助けてゐるといふことが何より嬉しいのでせう。（間。）だけど母は蝶を殺すことは隨分いやなのでそれで苦しんでゐ

ますのよ。

民子。（微笑し乍ら。）だけどそんなことはそれ程氣にしなくてもかまはないことなのではないかしら。すべての生物は人間の爲に造られ、そしてそれを治める權能を人間に與へられてゐるのだから。

成吉。（急にむっとして。）僕はさう云ふ考へ方程厭なものはない。さう云ふ考へ方程非キリスト教的なものはない氣がする。僕は思ひ出しても不愉快な氣がするのだが、或る宣教師のうちへ遊びにいつたら、其宣教師の奥さんが——其人はいつも集りの時にオルガンを彈いてゐたのだが、——猫を大變可愛がつてゐて僕が話してゐた時其猫が庭から蛙をつかんで疊の上で散々いぢめてゐるので、僕が見兼ねて蛙を放して猫を追ひ出した處が、其奥さんはぷり〳〵し乍ら、反抗的に其猫を膝の上に抱き上げて撫で乍ら、其の猫がどんなに蛙をうまくつかまへるかと云ふことをさも〳〵得意さうに、一座の人に話して笑つてゐた。僕は其時實に不愉快だつた。其の奥さんが憎くてたまらなかつた。（いかにも憎々しさうに。）其の後ろには動物と人間と

はまるで違つた取り扱ひをする、さう云ふ種類の非キリスト教的思想が控へてゐるのを知つてゐたからだ。本當に教會のキリスト教、殊にアメリカ風なキリスト教程厭なものはない。

民子。（少し不機嫌に。）だけどそんな小さなことでお前のやうにぷり〳〵するのはあまり大袈裟ぢやありませんか。それ位のことでキリスト教と云ふものに反感を持つなんて少し馬鹿らしいぢやないの。そんなことよりもつと大切なことがいくらでもあると思ふ。それに聖書の中にだつてアブラハムが羊を殺す處だの、ペテロが魚をとる處だのあるんだし、ヨハネでだつていなごを食つてゐたんだし、エス樣だつて人間から追ひ出された惡鬼を豚にとりつかせなすつて何百と云ふ豚が海にころげ落ちて死ぬ處だつてあるぢやないの。

成吉。僕はトルストイのやうに菜食主義者でもないし、聖書の中に殺生が書いてあつても、それで聖書を非難する氣もないし、いや、それ處ではない、ギリシヤ人が奴隷を使つてゐてもあれ丈け美しいものを生み出す爲には許されてもいゝ位な氣がしてゐる。異教徒なんだが。しかしあゝ云ふ露骨に蟲のいゝ、いかにも空々しい考へ方は實に厭だ。僕はあの日のことを思

ひ出すと、たまらなく不愉快になるんだ。

民子。（氣を變へて。）あゝ蝶々と云へば、私昨日買物に行つてふと見附けたんで御座いますがね、私蝶の模様の附いた帶地を買つて參りましたの。おかあ樣は何でも蝶のついたものを集めてゐらつしやるつて申しますから。失禮ですけれど御母樣にさし上げ度いと思ひますの。

松子。あら。さう。母は隨分悦ぶでせう。

民子。何だか失禮ですけれど。でも御笑ひ草にね。（ベルを押し乍ら少し御世辭笑ひをして。）御母樣から、いつもいろ〳〵と戴いて許りゐまして。

成吉。（椅子より立ち上がり、部屋を少し歩く。）

松子。どう致しまして。

民子。あなたの御うちはどうしてあんなに皆さんがいゝ方なので御座いませうね。主人といつも話すので御座いますよ。御宅のやうな立派な御家庭とこんなに親しく出來ると云ふことは本當に名譽な位だつて。

（女中登場。）

民子。あの昨日の帶地を持つてきておくれ。

（女中退場。）

民子。あなたなんか本當にふつくらとして、いかにも伸び〳〵していらして、本當に青ちのよさが現はれておますわね。（松子の顏を樂しさうに見乍ら。）何ていゝおぐしでせう。

松子。（赤くなり乍ら。）あら。厭ですよ。叔母さん。そんなにまじ〳〵と御覽なすつて。

民子。（少ししんみりして。）本當にあなた位の頃は樂しい時で御座いますわね。目の前にひろがる世界が希望と夢と又秘密と怖れと——心を慄はせるやうなものに充ちて見える時で御座いますね。私達はもう人生の大部分を知つてしまつた。そして殘されておる部分はあまり面白いものではなささうだと云ふことがもう見えておる——幸福と云ふやうなものまでがもう人生のつとめと云つた風な氣持から離れることは出來なくなりかけておる——

（女中帶地を持ちて登場。）

民子。（松子にひろげて示し乍ら。）御覧遊ばせ。一寸珍らしい柄で御座いませう。

松子。（のぞきこむで。）本當に。いゝ柄ね。

（女中一寸立つて見て、すぐに退場。）

民子。御母様に御氣に召すかしら。

松子。それはもう。だけど少し派手ではないかしら。

民子。そんなとが御座います者ですか。あんなに御若くつていらつしやいますのに。ねえ。成吉。

成吉。（傍に寄り、のぞきこみ乍ら。）さあ。どうですかね。僕なんかには解らない。

民子。（少し冗談のやうに。）成吉はあれでなか〳〵目が利くんで御座いますよ。

松子。（笑ひながら。）さうで御座いますか。

民子。殿方が御めかしやなのは私好きではないけれど、成吉のやうに自分はあんなにぶつきら棒で居て、そのくせ女の着物のことなどかなり氣がつくと云ふのは結構ですわね。

成吉。（少し氣まり惡そうに。）僕なんかそんなことはすつかり駄目なんだ。考へて見たことだつて

ありやしない。

民子。實際自分が氣のきいた羽織の一つも着かへても、一向感じのないやうな夫は餘り味がなさすぎますからね。（も一つの帶地を廣げながら。）家庭の樂しさなんてものはそんな處にあるのだから。松子さんこれ如何です。

松子。（手に取つて。）まあ。いゝわね。（少し上氣したやうに眺めて居る。）

民子。御氣に召しまして？　あなたにと思つてついでに取つて置きましたのよ。

松子。あたしに？（心から嬉しさうに。）ほんとう。（帶地を胸のあたりに抱くやうにしながら。）まあ嬉しい。

民子。（にこ〳〵しながら。）失禮ですけれどね。成吉や。お前どうお思ひだい。

成吉。（少し赤くなりながら。）僕はお母さんの〻方は好きだけれど。そいつは餘りいゝとは思はないね。

民子。おや。どうしてだらうね。色合だつて柄だつて、松子さんにぴつたりしてるぢやあないの。

此の帶を結んで春の庭に立つたら、松子さんはお前の好きな女王のやうに見えるだらうと私は思ふのだよ。

成吉。后（きさき）ならいゝが、これぢやあ孔雀のやうに見えさうだ。この御殿櫻はどうも少しけばゝしい。この模樣化の仕方は餘りいゝ趣味ぢやあない。僕は華麗と云ふ感じはちつとも嫌ぢやないが、殊に松子さんにはそういふ感じがフイールドだとは思ふが、こいつはどうも少し俗つぽい氣がする。

松子。そんなことはありませんわ。ねえ。おばさん。あたしすつかり氣に入つちやつたわ。

成吉。（松子に）こんなのが氣に入るやうぢやあ少し心細いね。

松子。いゝことよ。私は好きなんだから。やつぱり女の方が目がきくわ。

成吉。ふむ。

民子。（笑ひながら。）おや〳〵、やかましいことになつて來た。だが私は松子さんの方に贊成して置きませうね。こんな事にまで男に御鉢をとられては女の世界はなくなつてしまうから。（二

人を見比べながら、少しふざけたやうに。）だがお前さん達がそうやつて着物の柄のいひ合ひなどして居る處を見るのは、私にとつて餘り悪い氣持ぢやありませんね。（まじめな實感になつて。）早くそんなところを毎日見られるやうになれたらねえ。

松子。（眞赤になつてうつむく。）

民子。（からかふやうに松子を見ながら。）成吉はあれで家庭を持つたらきつと優しい主人になりますよ。

成吉。（急に不愉快そうな顔をして沈默す。）

民子。（成吉の顔を見ながら。）あんまり怒りつぽいのがキズではあるが。だが馴らされた獅子は始めから優しい羊よりも女にとつて興味が多いだらう。

成吉。（立ち上り部屋をあちこち歩く。）

民子。（帶地を卷いて。）では失禮ですけれど、持つてお歸り下さいましね。

松子。どうも有りがたう。

民子。今夜はすつかり嬉しい氣持になつちやつた。今年の春は本當に樂しい春にしたいものだ。

（汽笛の音が聞える。間）

（女中登場。）

女中。（民子に。）旦那樣が御呼びでいらつしやいます。

民子。はい。すぐ。

（女中退場。）

民子。（立ち上りながら。）今夜は御ゆつくりなさいましよ。（成吉の方を見ながら。）今夜のやうな晩に不機嫌になるものは少しどうかして居る。（冗談のやうに。）何といつたところで、若い人たちの世界だ。又あちらに行つて面倒な相談ごとでもしませうか。

（民子上機嫌にて退場。）

（間）

松子。どうなすつて？　そんなに不愉快そうに——！

成吉。（はげしく。）不愉快ぢやありませんか。

松子。だつて——

成吉。（尚ぁちこち歩き乍ら。）僕達は他人にとりもつて貰ふ必要はないんだ。また他人のもくろんだ計畫の上で結びつけられるんぢやあないんだ。僕達の完全な自由で自ら選んで、自分の運命を賭けて戀するんだ。いやに、とりもつやうな風に仕向けられると馬鹿にされたやうな氣がする。

松子。だつて。そんな風にとらなくちやならないか知ら——

成吉。ふむ。あなたは嬉しかつたんだらう。

松子。まあ。

成吉。（卓の側にかへる。）貴女はもつと神聖な氣持になつて貰ひたいもんだ。よく女の子が自分がおもちやにしてゐる澤山な雛人形の中から、一對を選んで夫婦をこしらへる遊びを悦ぶもんだ。そういふ本能は母になつても殘つてるんだらう。そういふ本能は悪いもんぢやあるまい。

だが僕達をそういふ眼で見られちやあ堪らない。僕は嚴肅なんだ。生命がけなんだ。

松子。それやああたしだつて——

成吉。それだけならまだいゝんだが、母の氣持のなかにはある打算——とまでは云はなくてもある處世上の意識がある。これは全然いけないものだ。僕等の戀を侮辱するのだ。

松子。私そんなことはちつとも思はなくてよ。伯母さんはたゞ御自分が愛していらつしやる二人を結びつけたいと思つてらつしやるんですわ。

成吉。あなたがそんな穿鑿をしないのはいゝ。そんなことに氣がつくやうぢや却つて困る。だが僕はそうは行かない。僕は僕達の戀の敵と闘ふことや、僕達の戀の冒瀆者を防ぐこともしなくちやならない。また假令母のある不純な意識に氣がついたにしろ、貴女の方では境遇上只それを超越してさへゐればいゝのだ。僕を選んだことは貴女にとつては物質的には貧乏鬪だからね。——そんな顏をなさらなくてもいゝ。本當なんだから。だが僕は氣にしないではゐられない。僕は貴女への戀に少しでも物質を聯想することは堪えられないんだ。僕はそのた

めにはあのミンナ、フオン、バルンヘルムに出る青年士官がミンナから離れようとしたやうに、貴女から離れたい氣さへすることがあるんだ。

松子。いやですよ。成吉さん。

成吉。だが自分を潔くするために、自分が心に疚ましくもないのに戀を捨てることは馬鹿げてゐるからさうはしない。だがその點を刺戟されると僕の神經はピリ〳〵するんだ。僕は一層の事貴女が貧乏人の娘ならいゝと思ふんだ。

松子。貧乏ではないかも知れないが、それよりももつと惡いお馬鹿さんぢやありませんか。（少しすねるやうに。）私にひけ目がある方がお望みなんでしたら——

成吉。何です。……いや馬鹿かも知れないぞ。——少くとも氣位が高いとは云へないね。今日のやうなことでは。誇りといふものがない女は——

松子。あんまりだわ。あんまりだわ。

成吉。そうぢやないか。（自分の語勢に捲き込まれ乍ら。）僕は雌馬を選んであてがはれる種馬ぢやな

いんだ。

松子。成吉さん！

成吉。（誇張的に。）桂庵だ。牧師の妻が桂庵の女主人だ。

松子。（厳しく。）いやです！　幾ら何だつて——そんな下品な言葉をお使ひなすつて！

成吉。……

松子。（詰責するやうに。）御自分のお母さんに！

成吉。（急に涙ぐみ乍ら、松子の手を握り。）僕はね。松子さん。本當に一生懸命なんだ。戀と云ふ字を考へて見たゞけでも嚴肅になるんだ。僕は僕の戀を祭壇に祭つて禮拜したい氣さへしてゐるんだ。戀は僕の宗教なんだ。だから絶體の神聖を保ちたいんだ。だから一寸でも人が輕い氣持ちで僕達の間を見ると堪へられない程不愉快になるんだ。僕はお母さんが僕達の戀にいくら好意を持つてゐるからと云つてそれだけでいゝ氣になるにはあまりに戀を重んじてゐるんだ。僕は何人にも指一本ふれさせない積りなんだ。

松子。（感動して、涙ぐみ乍ら。）解つてよ。成吉さん。

成吉。（のぼせたやうに。）僕の生活はあなたの爲の生活なんだ。あなたに捧げられた生活なのだ。丁度西洋の封建時代の大名が自分が所有してゐる領地を自分から進んで一度君主に獻上して改めて君主から其の領土を授けられて治めたやうに、僕は僕のライフと思ふよりもあなたに捧げたライフだと思ふ方がより充實した生命感を得るのだ。僕の生きてゐるのはあなたのライフなのだ。僕の情熱も、憧憬も、研究も亦人生に於ける男子の功業も、皆あなた無くしては考へられないんだ。（しみ〴〵して。）僕は此間僕の研究の一番根本的な計畫を立てゝ、先づギリシヤ哲學を研究する爲めにギリシヤ語を勉強したいと思つて、ギリシヤ語の單語を暗記する爲めに一つの帳面を作つた。そしてその帳面の表紙に僕はかう書いたんだ。「汝は彼女と彼女の子とを養はざるべからず。」とね。

松子。（成吉の手を握りしめて。）成吉さん。

成吉。僕はもう僕達の生計の事まで考へずにはゐられないんだ。あの山の奥に住む獸が雌と子供

とを養ふ爲に、山や、谷やをうろつき廻はつて、食をあさり求めてくるのは何と云ふ勇ましい、又可憐な、眞實な愛情だらう。僕はあゝ云ふ風にあなたの爲に衣を求め、食を求めたいんだ。今日其の事でお母さんと衝突したんだ。お母さんは僕が獨立の生計を維持することが出來ないのに、獨立した人間としての資格を要求することは許されないと云つた。僕は僕の痛い處に觸れてゐるから默つてゐた。しかし隨分しやくだつた。僕はきつと今に獨立して見せるつもりだ。

松子。（急に不安さうになり乍ら）だけどそんなことにそれ程むきにならなくつてもいゝと思ふわ。その爲に色々なことが起つては私心配になりますわ。あなたとおかあさんとが、あんまり變におなんなすつては私本當に困るんですもの。

成吉。だが僕はどうもそれが氣になるんだ。母が或るもくろみから——それは意識的ではないにしても——私達を結びつけようと思つてゐることに氣がつけば、つく丈け、僕は獨立して、無論貴女の家からも全然助けを借りないで、あなたを養つてゆき度いのだ。たゞ一つの小

さな巣――さうだ巣だ。僕は巣と云ふ方がぴつたりするんだ。

松子。（夢見るやうに。）小さな、温かい巣だわね。そして同時に私たちの御殿だわね。

成吉。そうだお宮だ。神聖な――そこには生命の火が奥深く點されてゐる――そしてまた城だ。抜くべからざる――其の中で僕達が自分の夢と幸福とを敵から守るのだ。（堪えられなくなったやうに立ち上り、部屋を歩く。）八雲立つ……出雲、八重垣……妻ごめに……

松子。（たのもしそうに成吉の歩みを目で追ひながら。）あなたには素盞嗚命のやうなところがあつてよ。私前からさう思つてゐたんだけれど――勇ましい處や、氣位の高い處や、そしてかなり亂暴なところや――

成吉。（樂しそうに笑つて。）ふむ。貴女は稻田姫に似てゐるつて云ひたくなる處だね。（松子の顔を大膽そうに見詰めながら。）矢つ張り姫といふ感じだ。――少くとも侍女といふ感じぢやない。

松子。（嬉しさうに。）さう？　姫としては少しお轉婆ですわね。（何か考へながら。）道子さんは何といふ感じでせうね。――天の使かしら。

成吉。さうさな。(考へて。)まあ。尼だな。

松子。(何か胸を打たれたやうに暗い顔をする。)

成吉。(考へながら。)カソリツクの尼だね……グレコのかく女のやうな、……眞當に清い、寂しい感じのする奴だ。

松子。眞當にね。私道子さんのやうな清い感じのする人は知らなくつてよ。親切で、靜かで、品がよくつて、私心から好きですのよ、……此頃何だか淋しさうにしてゐらつしやるんだけれど……

成吉。さうですか。

松子。時々話してゐても變な事がありましてよ。あんな愼み深い方ですから、目立つ樣にはなさらないけれど。

成吉。(思案しながら。)ふむ。

(間。)

松子。成吉さん。道子さんはあなたを思つてゐらつしやるのですよ。

成吉。（眞面目に）僕もさうではないかと思つてゐるのだが。

松子。きつとさうですよ、……私大分前から氣が附きかけてはゐたのですけれど。今ではもう明瞭（はつきり）と解るのです。私何うしたらいゝか知ら。

成吉。僕もそれを氣にしてゐるのだ。（間。）矢つ張り眞理に忠實でなくてはならない。いろ〳〵考へたんだが。

松子。道子さんが可哀さうなんですもの。それに道子さんとあなたとはずつと小さい時分から一緒に暮してゐらしたんですのに、私が後から這入つて來て——

成吉。そんな事は關係はありませんよ。

松子。だけど私何だか道子さんの幸福を奪（と）つて仕舞つたやうな氣がするんですもの。

成吉。さういふ風に考へてはいけません。さういふわけではないんだから。いくら結果がさうなつたからと言つて。

松子。だつてあなたは道子さんを愛してゐらしたのでせう――私とお知り合ひになる迄は。

成吉。それは愛してゐた。今だつて愛してゐる。だがそれは兄弟としての愛だつた。僕達は始めは眞當の兄妹だと思つてゐたのだ。兄妹で無い事が解つてから少しは氣持が變りはしたけれど、決して道子に戀を感じた事は無かつた。(間。)道子の心持に薄々氣が附いてから、僕の心が少し動きかけてゐた事はまるで無かつたとは言へないが。(考へ乍ら。)僕はその氣持を戀といふ名で考へて見た事は一度も無かつた。それに貴女と逢つてから、その氣持が戀でなかつた事は益々はつきりしたのだ。だから僕は道子を裏切つたといふ氣にはなれない。道子の心を弄んだとは云へない筈だ。

(不安そうに考へてゐる。)

(間。)

松子。だけど道子さんはあんなにお偉いんですもの。私なんか道子さんよりあなたに愛されるなんて變な氣がしますわ。私なんか道子さんの事を思へば氣がひけますわ

成吉。それは別問題だ。僕は貴女と道子とを比べて偉い方を選んだわけではない。戀は選擇ではない。運命だ。又どちらが偉いなんて決められるものではない。それに僕は道子よりも貴女を愛してゐるといふ譯ではない。元來愛の性質が違ふのだ。僕は本當に道子を愛してゐる。

松子。だけど私が貴男と知合になつた事は道子さんにとつては何んなに打撃だつたでせう。それを思ふと私の地位が恐ろしくなりますわ。

成吉。その恐ろしさに堪へなくてはならないんだ。貴女の氣持は解る。だが同情の爲に眞理を曲げてはいけない。それは本當に姑息な事だ。

松子。（何か思ひ出したやうに。）私道子さんの事を思ふと本當に堪らない氣がしますわ。

成吉。（強く。）負はせるべき運命は道子に負はせなくつてはならない。でなくては道子をみくびつた話だ。さういふ遠慮をされては道子は決して喜ぶやうな奴ぢやない。僕は道子を知つてゐる。苦しむのは隨分苦しむだらうが。

松子。私道子さんは何うして生きて行けるだらうかと思ますわ。私が道子さんだつたとした

ら——

成吉。運命だ。どうしてもその運命にぶつかつて自分を生かし切らなくてはならないんだ。恐ろしいのは道子ばかりではない。貴女も僕も恐ろしいんだ。一つの小さな魂を殺すやうな立場に立つんだ。立たなくてはならないんだ。

松子。（青ざめて。）あゝ殺すんだわ。殺すんだわ。

成吉。しつかりなさい。松子さん。僕達は何處までも戀に生きなくちやならないんですぞ。どんな困難に出逢つても。どんな犧牲を造つても——あなたは僕達の戀の爲には何ものも怖れないで僕についで來るでせうね。

松子。（決心したやうに默つてうなづく。）

成吉。（松子を抱いて。）二人は一つのものだ。二人して一つのライフを生きるのだ。（接吻する。）

（ドアを輕く叩く音。二人離れる。）

（女中登場。）

女中。（松子に。）お宅からお迎ひにまゐつてゐられます。

松子。さうですか。直ぐに。

（女中退場。）

松子。では今晩はもう歸りますわ。

成吉。（淋しそうに。）さうですか。も少しいゝでせう。

松子。（卓の上の置時計を見ながら。）でもおそくなりますから。

成吉。（同じく時計を見ながら。）さうですね。ではまた。

松子。では。さようなら。

成吉。（松子を抱いて接吻し。）さようなら。

松子。（ドアの方に行く。）

成吉。松子さん。

松子。（振り返る。）

成吉。（ドアの方に行き、少し小聲にて。）明日午後僕は小石川の植物園に行くんだが、貴女もいらっしやい。

松子。（一寸考へて。）えゝ。行きますわ。

成吉。では一時迄に待つてゐますよ。

松子。えゝ。きつと。さようなら。

（松子退場。）

成吉。（其儘ドアの傍に少時ぼんやりして立つてゐる。やがて何か考へながら室をあちこち歩き、終に窓の側に行き、窓を開き、夜氣を呼吸し、外を眺め、やがてソファーの上に坐り、考へに沈む。）

（道子登場。）

成吉。（氣がつかないで考へつづけてゐる。）

道子。（入口に立つたまゝ一瞬間成吉を眺め、靜かに。）兄樣。

成吉。（道子の方を向き。）あゝ。すつかり濟んだのかい。

道子。（成吉の方に近寄りながら。）やつと片附きましたの。

成吉。厄介だね。何かあれば何時でもお前の面倒になるのだから。まあ掛けないかい。

道子。いゝえさうでもありませんわ。（成吉の側に並んで腰かける。）

（間。）

成吉。副牧師つてどんな人だい。

道子。眞面目そうな口數の少ない方でしてよ。

（間。）

成吉。歌をおさらへしたんだつてね。

道子。えゝ。

（間。）

道子。私今晩は本當に歌なんか歌ひたくはありませんでしたのよ。集りの間中ぼんやりしてばかりゐましたの。後を片附けてゐる間も物を考へてばかりゐましたのよ。

成吉。氣になる事のある時に、つとめて何かしなくてはならないのは苦しいもんだね。

（間。稍長き汽笛の聲。汽車の轟く音が聞える。）

成吉。（耳を傾けながら。）急行列車だね。

（間。）

道子。兄様。

成吉。何だ。

道子。（涙ぐみ。）私苦しくつて、苦しくつて——

成吉。（不安さうに沈默す。）

道子。私何したらいゝのでせう。私解りませんの。だけどもう此の儘では堪らないんですもの。私もう云つてしまはなくつちや。お母様はあゝおつしやつたんだけれど、私はもう——

成吉。……

道子。兄様！（急に咽び泣く。）私は……私は……

成吉。道子。道子。どうしたのだ。

道子。兄様は……御存じの癖して。……兄様は……

成吉。（眼を閉ぢる。）

道子。兄様！　私の幸福はあなたでした。もうずつと〳〵前から……私はあなたで生きてゐました。あなたを思つてゐました！

成吉。（涙ぐみ。）解つてゐた。解つてゐた。

道子。（一生懸命に。）私今日まで黙つて來ました。だけど私此の頃何だか不安で、不安で、凝つとしてはゐられない氣がするんですもの。一度だけ打ちあけて置かなくては。……私はつきりとさせて置きたいんです。

成吉。默つてゐても僕にはわかつてゐた。

道子。承けて下すつて、承けて下すつて……私の愛を——

成吉。道子。僕は感謝するよ。——嬉しいよ。僕なんか本當に駄目な人間なんだのに。

道子。（嘆願するやうに。）私もうあなたの無い生活つて考へられませんのよ。

成吉。僕はもつたいない。僕はお前のそんな愛を承ける値打はないよ。

道子。駄目なのは私ですわ。私なんか本當にあなたと同じ屋根の下に住んでゐるだけの値打もないんですわ。それだのにこんなことを――だけど私の心だけは――神様にさゝげてゐるのと同じやうに清いんですわ。

成吉。（感動して。）お前は本當に清い。清い。僕は本當にお前に對してはハンブルな氣持なんだ。

道子。私、それこそ、あなたの履の紐でも結びたう御座いますわ。

成吉。お前の心は僕にはあまり過ぎてゐて、不安になるよ。

道子。（やゝ落ちついて。）私あなたと兄妹でないことを知つたときにはどんなにがつかりしたでせう。だけど（赤くなつて。）今ではそれを感謝したうございますわ。

成吉。……

道子。兄様。私どう思つてゐたらいゝんでせう。

成吉。何だ。

道子。あなたのお心持を――

成吉。（いら〳〵し乍ら。）僕はお前を心から愛してゐる。

道子。それはよう〳〵解つてゐるんですけれど。（燃えるやうな眼付で成吉の顔をじつと見つめ。）妹としてぢせうか。處女（むすめ）としてぢせうか。

（ドアを輕く叩く音。民子登場。）

民子。（一瞬間入口に立つて二人を見比べ道子に。）御父様が御用ですつて。

道子。（少しドギマギし乍ら。）はい。

（道子退場。）

（間。）

民子。（テーブルの側の椅子に腰をかけ。）成吉。一寸。

成吉。何ですか。（テーブルにかへる。）

民子。お前に一度云つて置きたいと思つてゐたんだがね。道子のことなんだがね。（聲を落して。）
今道子が何か云つたのかい。
成吉。（堅くなつて、眉をひそめる。）
民子。お前打ちとけておくれよ——大概わかつてはゐるのだが。
成吉。お母さんそんなことは訊くものぢやありませんよ。
民子。でも私にとつては随分大切なことゝ關係してゐるのだから……氣をつけておくれよ。
成吉。……
民子。あの子には堅くなつてゝ下さいよ。
成吉。（不愉快さうに。）もうおつしやらないで下さい。わかつてゐますから。
民子。でもお前云ふべきことは云はなくつちやあ。おくれてはいけないんだから。それに私の幸福にもつながつて居ることなんだから。
成吉。お母さんは立ち入るべきことゝ、立ち入つてはいけないことゝをも少し考へて下さいませ

んか。

民子。それがね。成吉。一度選ぶことを過ると一生の運命を決定してしまふのだから。そしてそれを本當に選ぶと云ふことは中々出來るものではないんですよ。若い人にはね。

成吉。おつしやる心持は解りましたから。どうぞ打つちやつて置いて下さいませんか。

民子。くれ〴〵も間違ひの無い様にね——なあに私はお前の心は解つてるんだが、つまり同情を起し過ぎてはいけないつて云ふことなのさ。お前の氣質はそこが危いのだから。

成吉。（不機嫌に。）解りました。

民子。いゝかい。成吉や。自分の幸福を守らなくてはいけませんよ。自分の幸福をね。

成吉。（いら〳〵しながら。）よして下さいませんか。

民子。道子には今朝云つておいたばかりなのに。（獨語のやうに。）私の計畫を臺無しにされては耐らない。も一度嚴しく言つて置かなくちや。

成吉。お母さん！　僕はあなたに云つておきたいのですが。道子のことですが、あなたのやり方

は僕はいけないと思ひます。

民子。（不機嫌に。）どうして？　私としてはこれでせい一ぱいなんだが。

成吉。道子の自由をもつと尊重してやつて下さい。少くとも心の内の一番大切な問題についてだけは——道子はあんなに内氣なんですから。

民子。あれで随分剛情なところがあるんだよ。お前には解らないだらうが。

成吉。解つて居ます。その點が道子の實にいゝところなんです。

民子。お前には解らないだらうが、あの子はあれでやりいゝ人間ではないんですよ。私にとつてはかなり忍耐が要るんですよ。

成吉。（反抗的に。）それや道子の方だつてね。

民子。（腹立たしさうに。）よしておくれ。私大ていの事ではお前には氣を悪くはしないんだけれど。あの子の事でだけは本當に不愉快になるんだから。（涙ぐみながら。）私にとつてどんなに長い間負擔だつたか知れはしないのに。

成吉。お母さん。（少し云ひ澁り乍ら。）變なことをいつまでも根に持つのはおよしなさい。

民子。（青くなつて。）何ですつて？

成吉。お氣にさはつたら御免なさい。

民子。あゝ。いやだ。家中のものが私にそむくんだもの。

成吉。そう云ふわけではありませんよ。

（順作登場。二人の樣子を見て、一寸心を打たれるが、軈て靜かに立つてゐる。）

民子。（順作の入つて來たのを見て、ます〳〵訴へるやうに。）いゝえ。さうです。私の言ふことは重んじられないんです。あゝ。いやだ。この小さな家の中での私の自由でさへ、もう保つて居ることが出來なくなるのだらうか。

成吉。そんなに興奮なさらないで下さい。僕は結局お母さんと同じ選び方をしなくてはならないんです。然し動機が違つてゐる。だからその動機をごつちやにされて了ふのが實に不愉快だつたんです。その選び方は僕にとつては實に苦しいんだから。

民子。（のぼせたやうに。）私今晩は本當に淋しかつた。お前私にもつと優しくして下さらなくつては。まあよく考へて見て頂戴。

成吉。（興奮して。）お母さん。さう云ふ風におつしやつては僕は不服ですよ。それぢやあ如何にも僕があなたをひどくしたやうになつてしまふ。だが僕は僕として當然なことを云つた氣がしてゐます。

民子。おまへさうお云ひだけれども私の云つたことだつて私や、ちつとも無理なやうには思ひませんよ。

成吉。そこですよ。お母さん。あなたがあんまり立ち入りなさるから——

民子。だつて御前——私御父さんに聞いて戴きます。おまへは少し傲慢です。

成吉。（反抗心を露骨に示し乍ら。）何です。つまらない。

順作。御愼しみ！　二人とも、もつと穩かに話すがいゝ。（椅子に腰をかける。）

民子。（涙ぐみ乍ら、訴へるやうに。）あんまりです。成吉は此の頃ちつとも私の云ふことをきいてく

れないんですもの。

成吉。（不服さうに沈默す。）

民子。こんな處をお目に掛けてすみませんけれど……あなたから一度成吉におつしやつて下さいませんか。

順作。まあ心を落ち着けるがいゝ。

民子。私大抵のことなら心を亂しはしないんですけれど。

成吉。お父さん。僕だつていゝ氣持ぢやないんですが仕方がなかつたんです。僕はお母さんだからと云つて眞理を枉げ度くはないんです。

民子。ぢやあ私の云つた事は間違ばかりなのでせうか。（順作に。）聞いて下さいまし。實は私が成吉に——

順作。わしは裁きたくはない。母親と子供が互に訴へ合ふのを聞くのは本當に淋しい氣持だ。

二人。（沈默。）

順作。實際なか〳〵解るものではないのだ。どつちが正しいか云ふことは。何が正しいかといふことさへ、とても私達には解らないのだのに。どつちが正しいかを決めることで、不和になつた二人を和らがせようとするのは賢いことではないらしい。そんなことは私なんかよりもつと〳〵偉い裁き手でなくつちや出來るものでないと思ふ。

民子。おつしやる御心持は解りますけれど、大凡何が正しいかと云ふ事が決められなくちや困りはしないかしら。

順作。それは各々自分の心で考へて見るのがいゝのではないかと思ふ。神に祈つてだね——わしなんかはさうしてゐる。心を落ち着けて何が正しいのか知らせて下さいまし。と祈るやうな氣持で考へてゐる時に、つまり聖書にある聖靈の示しと云ふ風なもので、間違ひの少ないことが解るやうな氣がする。それだつて斷言は出來ないが。（考へて。）一體爭ひ合つた二人が本當に和らぎ合はうとするのだつたら、どつちが正しいかと云ふ事は考へないで、兩方が神樣の前にハンブルになつて怨し合はなくつちや出來ないのではないかしら。其の上でお互の心

が靜かになつて、まあ云つてみれば、聖靈が宿るのにふさはしい程に清くなつた時に、何が正しいかと云ふ事は解るのではないかと思ふ。

成吉。（考へ乍ら。）それはさうかも知れませんね。

順作。わしはやつぱりさう思ふね。心の清き者は福なり。神を見る事を得べければなり、と云つてあるが腹を立てゝゐる心では神は見えないだらうし、善惡も解らないだらう。何故と云つて、何が善いか惡いかと云ふ事は神の道で決まるのだから。それは色々な人がいろ〳〵な標準を立てゝはゐるが。

成吉。（感動したやうに。）さう云ふ考へ方には恐らく深い根據があるでせう——僕は違つた考へ方を持つてはゐるが。

民子。（やゝ落ちついて。）まあ私もよく考へて見ませう。成吉だつて私の心持を解つてくれない筈がありやうがないんですから。少しも惡い氣持で云つてるのではないんですもの。

順作。人の氣持と云ふものは、どんなに愛し合つてゐる者同志でも、キツカケで變な風に外れて

行く事があるものだ。

民子。本當にみんな物の解つてゐる人許りだのに。うまく行かないつて筈はありませんわね。

（女中登場。）

女中。あの御嬢様が奥様に一寸いらして下さいましつて。

民子。（一寸ハッとした様子で。）私に？（順作の顔をうかゞひ乍ら。）道子がかい。

女中。はい。お話しなさり度い事が御ありになるんで御座いますつて。

民子。道子はどうしてゐるの。

女中。御部屋で何か考へ込むでゐらつしやいました。

民子。（順作の顔と女中の顔とを等分に見比べ乍ら。）さうかい。

順作。行つておいで。またあとで話せばいゝから。

民子。では一寸。

（民子と女中退場。）

（間。）

順作。（靜かに。）成吉。わしはお前に一度話したいと思つてゐたんだがね、わしは他人の事を彼是言ふのは好きでは無いし、又さういふことはすべきでは無いと思つてゐるのだが、まあお前とわしとの間で、もつと氣樂な氣持で、それ丈の事はお前が許して呉れるものと思つて話して見たいと思ふのだが。

成吉。お父さんおつしやつて下さい。遠慮なさらないで。

順作。實は今家の中で起りかけてゐる出來事に就いてなんだが。

成吉。（急に眞面目に、堅くなつて、父の顏を見る。）

順作。わしはその出來事に就て、自分が差し出る事は控へたいと思つてゐる。一つの出來事といふものに就いてはわしは謙遜に、それに對したい。一つの出來事が生じるといふ事は嚴肅な事なんだから。それにはその出來事が生じる因、わしの考へでは、神樣の御旨といふものがある筈だと思ふから。けれどもそれだからと云つて、その出來事を成り行きに任せて放つて

置くといふ事は善い事では無いと思ふのだ。自分が其の出來事に關係してゐる限り、自分が其の出來事に對して働きかけないわけには行かないし、又色々な對人關係の義務を含んでゐる、殊に其の事が自分の親近な者の間に起つてゐる時には尚更さうだ。だからわしはその出來事に就ては、神樣のみ旨に待つハンブルな氣持を失はないで、一方では、其の出來事の中に居る自分の務めを果たして、正しい、智慧のある仕方で、その出來事が結ぶべき果を結ぶやうに祈り度いと思つてゐる。

成吉。おつしやる事は僕にも解る氣がします。お父さんのお言葉はそのまゝでは僕にはぴつたりしませんけれど、そして僕はもつと自分本位な能動的な考へを持つてゐますが。だからお父さんの仰る事は僕はちつとも不謙遜だとは思ひません。寧ろ遠慮なさり過ぎると思ふ位です。

順作。わしは思ふのだ。一つの出來事が起つた時に、人が努めなければならない事は、出來るだけ人の運命を傷けないやうにする事、併しそれだからと言つて、姑息な解決をしないで、受けるべき運命は忍び受ける事、そして皆が和らぎ合つてこの出來事の仕末をつける事、併し

それだからといつて各人が自分の本當の心の聲を曲げない事――まあかういふ事だと思ふ。わしはさういふ心懸けで此の出來事に對したいと思つてゐるのだ。それに就いてはお前は何うお思ひだ。

成吉。お父さんのおつしやる事は僕も本當の事だと思ひます。

順作。わしはお前がさういふ氣持でゐて呉れさへすれば安心な氣がする。それが一番大切な事なんだから。細かい事はわしは立ち入らうとは思はない。各人が自分で決めなければならない事なんだから。

成吉。僕はお母さんがさういふ氣持になつて下すつたらと思ひます。あんまり人の事を世話をおやきになり過ぎるものだから。

順作。民子にはハンブルで無い處があるやうだ。だがわしらにそれを審く程の資格は無いんだし、又同情を以て見てやりたいと思ふ。人には色々な氣質といふものがあるのだから、それは誰でも中々打克ち難いものなんだ。一方家庭の内での母親としてのケーヤーといふものも、尊

いものだし、また自然な本能なんだから。その本能が智慧で謹み深くされないのがあれの到らない處なんだらうが。

成吉。僕にも少しくお母さんに對して謙遜でないところがあるかも知れません。お父さん。けれど道子へのお母さんの遣り方は何うも不可ないと僕は思ふのですが。

順作。（考へながら。）それだ。わしもそれに就てはかなり心配してゐるのだ。（間。心持青ざめて、獨白の如く。）一つの出來事の原因といふものは深い處にあるものだ。

成吉。（同情したやうに父を見る。）お父さん、僕はお母さんがいけないと思ひます。（少し赤くなりながら。）僕は解つてゐるんです。

順作。うむ。（考へながら。）矢張りわしに罪——過失があつた事は免れない。わしは不調和といふものに歸したいのだが、——いや、矢張り深い處ではこれで調和してゐるのだらう。

成吉。でもお父さんは一番本當な解決をなさつたんだと思ひます。それにお父さんのお遇ひになつた試みは本當にどんな聖人にだつて恐しいものだつたんですから。僕は人間として自然だ

――當然だとしか思へないんです。あなたゞからこそ、それをそんなに何時までもお苦しみなさるんだけれど。

順作。いや。矢張りわしが弱かつた。わしは自分が心の底まで潔白だつたとは神樣の前に云ひ切る事は出來ない。（默想する。）

成吉。御免なさい。お父さん。とう〳〵餘計な事に觸れてしまつて。

順作。（考へながら。）恐ろしいものだ。

（間。）

順作。成吉。わしはも一つ云つて置きたい事がある。こんなことはなるべく觸れたくないのだが、――殊に親子の間では――だがやはり一度だけ、云つて置きたい。あまり大切なことだから――純潔と云ふことに就いてだが――

成吉。（堅くなり、沈默す。）

順作。（靜かに。）實はわしはお前が大學の雜誌にかいて居るエツセイを讀んだのだが。

成吉。（少し赤くなりながら）あれですか。隨分未熟なものです。それに充分に精緻ではありません。ですが、本氣で書いたことはたしかです。

順作。中々いゝものだ。お前の眞面目さが充分に出て居て、わしは嬉しく思つた。だがあの中の體の交りに就いてのお前の考へはわしのと反對だ。わしが云ひたいのは其のことだが。

成吉。（少し興奮しながら。）僕はどうしてもあゝ云ふ風に考へるんです。あの點は、あのエツセイの中でも、僕は殊に力を入れた點で、今の僕にとつてはかなり重要なことなんです。

順作。それだ。お前の考へ方は本質的で、隨分深いところにふれて居ると思ふが、際どいところで錯誤があるやうだ。わしの考へでは、體の交りはやはり本當の愛を汚すものだ。本當に美しい戀をしようと思ふものは、純潔を保たなくてはいけない。

成吉。僕は本當に戀し合つてる男女の體の交りは純潔だと思ひます。寧ろそれ位まじりけのない、純一無雜な融合の狀態はないと思ひます。

順作。それが實は非常にいけない狀態なのだ。お前がそう思ふのは、お前が清いからだが——何

といつても經驗がまだ足りない。

成吉。どうも僕には解りません。然し僕は僕の體驗で物を知つて行きたいのです。

順作。そうする外はないのだ。（考へて）だが醜いことを經驗した後でなくては、其の醜さからはなれることが出來ないと云ふのは、何と云ふ悲しむべきことだらう！　わしはお前に警めたい。お前の思想がもつと熟すまでは、あの思想を實行することは見合せるがいゝ。少くともあの考へ方には充分に正確でないところがあるから。

成吉。それは僕も認めます。ですが、お父さん、僕はもつと自然といふものを尊びたいのです。內に湧く力と云ふものを。其の燃えるやうな力がなかつたら、愛はどんなに生命なきものとなるでせう。生命と生命とが、燃えついて、一つとなる瞬間——其絶頂が愛の究極だと思ふのです。

順作。いや。ほんとうは愛の究極はもつと靜かな淨められた處にあるのだ。それは感性的なものでなく、純粹に心靈の內にあるのだ。

成吉。僕は肉と靈とを離して考へることは出來ないと思ふのです。

順作。その點に就いても、お前の思索にはまだ隙間があるやうに思ふ。

成吉。（少し焦々し乍ら。）お父さん。僕は幼い乍らも自分の生活は自分自身の思索で導きたいと思ひます。ほんとうに自分のものである思想で、自ら選んで。

順作。ふむ。（考へる。）

成吉。（肩をそびやかすやうにし乍ら。）僕は何よりも自己に忠實でありたいんです。お父さんのお考へを充分に尊敬してはゐるのですが。

順作。あゝ。矢張りお前の思ふやうにするがいゝ。眞理がお前の眼に展けて行くのに頼る外は無い。だがわしはお前が純潔であることを望んでゐることをよく覺えてゐて呉れ。わしはお前に干渉する氣はないのだ。たゞ此の問題に就いては何處までも、よく考へて、愼しみ深い態度を取つて呉れ。恐ろしいことゝ、つながつてゐるのだから。

成吉。（考へ乍ら沈默す。）

（女中あわてゝ登場。）

女中。いらして下さい。お嬢さまが！

成吉。道子が？　どうしたのだ。

女中。急に眞青になつてお倒れなさつたんです。奥様とお話し遊ばしてゐらしたのですが。

順作。（はつとするが、落着いて。）大丈夫だ、腦貧血だから。

成吉。靜かに寢させて置くんだ。そして葡萄酒を！

（成吉と女中と急ぎ退場。）

順作。（後ろから。）枕を低くするのだよ。（間。しばらく默想して後、椅子から離れ、跪き、椅子に兩肱を置き頭を支へ默禱す。）

幕

第三幕

舞臺、第一幕に同じ。第二幕より三週間後。晴れたる午後。道子の書齋の窓の側の連翹が憂鬱な、黃色な花を一杯つけてゐる。

順作。（一人机に向つて聖書を讀んでゐる。やがて聖書を閉ぢ、立上がり、緣端に出で庭を眺める。）（道子の部屋よりピアノの音が聞える。曲はシューベルトのグレエチヘン、アム、シュピンラーデである。）

順作。又あれを彈いてゐるな。（道子の部屋の窓の方を見乍ら、小さい聲で。）淋しいのだ。（考へに沈む。）

（民子登場。）

民子。（卓子の上に紅茶を置き。）いゝ御天氣で御座いますね。

順作。（何か考へ乍ら。）あゝ。

民子。もう本當に春ですのね。芝生があんなに萌えて來ました——御茶を召し上がれな。

順作。（卓子にかへる。何か考へ乍ら。）成吉はゐるかい。

民子。いゝえ、今朝出掛けてまだ歸りません。

順作。（紅茶をのみ乍ら。）ふむ。

民子。成吉は此頃何だか落ち着いてゐないやうで御座いますよ。何だかそは〳〵してゐるやうです。

順作。さうか。

（間。ピアノの音がパッタリと止む。）

民子。私あなたに申しておき度いと思つてたんで御座いますがね。道子の事なのですが、此頃益々變で御座いますよ。ふさぎ込んでゐるかと思へばいら〳〵したりして。

順作。わしも氣はついてゐるが成る可く觸れないで放つておく方がいゝよ。あんな時には色々な事があるものなのだから。

民子。私も成る可くふれない様にはしてゐるんで御座いますよ。此間の様な事もありましたしね。

順作。あゝ。それがいゝ。

民子。（少し不服さうに。）だけども少し自分を抑へる事が出來さうなものだと思ひますがね。此頃の人は考へ方が違ふんだらうが……

順作。道子はよく自分を抑へる方だと思ふのだが。成吉はさうではないが。

民子。處が此頃は違ふんで御座いますよ。道子は此頃變に自制心がなくなつてやり難くいんですよ。

順作。ふむ。（考へ乍ら。）心が亂れてるんだらう。

民子。まつたく亂れてゐますよ。御父様から少しおつしやつて戴けないものかしら。それに成吉だつても少し落ちついてくれなくつちや。（獨語のやうに。）凝つとしてゐても運命は自分のものだのに。

順作。（眞面目に。）民子、いゝかい。注意することがあればわしからするから、お前は放つておく方がいゝよ。さうでないと却つてまづくなるから。

民子。えゝ。私もさう致しますよ。私の生活に關係して來ない限りは。

（間。）

（女中登場。）

女中。只今教會から御使が御見えになつて、旦那樣に直ぐにいらして下さいましつて。

順作。よし。直ぐにまゐりますつて。

女中。それからさつき小山のお孃樣がお見えになりました。

民子。そうかい。

女中。道子樣のお部屋にゐらつしやいます。

（女中退場。）

順作。（立ち上がり。）ぢやあ行つてくるよ。

民子。何にしろ此頃は御忙がしう御座いますね。

順作。あゝ。獻堂式がすむでしまうまではね。

（順作退場。民子順作を送つて退場。舞臺暫らく空虚。道子と松子と話し乍ら右手庭に登場。）

松子。本當にいゝお天氣ですのね。（連翹の花を見て。）よく咲きましたね。

道子。えゝ。（同じく花を眺めて。）窓から手が屆きましてよ。

（二人芝生のまはりの路を並んで歩く。）

松子。（園中を見廻しながら。）隨分良く手入れがしてありますのね。あなたがなさるんですの？

道子。母が致しますのを手傳つてゐますの。あなたのお宅で戴いたのを植ゑたりしてゐる中に、だん〳〵殖えて來て、此頃では手が屆かない位ですのよ。（努めて快活にしながら。）でも矢つ張り氣持のクサ〳〵する時など、庭に出て花の世話をするのは私好きですわ。

松子。母もよくさう申しますわ。私なんか少し面倒くさくて閉口だけれど。母がお前は手入れをするのは嫌ひで只見るのが好きなんだらうつて笑ひますのよ。（間。）母がね。隨分あなたを好いてゐましてよ。若し願へるものなら、あなたにしよつちう傍に居て貰つたらと言つてゐましてよ。

道子。あら。私なんか。

松子。だつて隨分似てゐらつしやるんですもの。あなたと母とは。氣質がね、母は何だか私が便りにならないつて冗談に申しますのよ。……あんなに弱いもんですから。

道子。（何か考へながら。）あなたのお母さんは本當に私を可愛がつて下さいますわ。

（二人少時默つて園を歩く。）

松子。（立止まりフレームの中をのぞき。）何て可愛いベコニアでせう。

道子。（一緒にかゞみ。）これはめづらしい類なので、母が大事にしてゐますの。

（二人立上り庭を歩く。）

松子。（空を眺め。）本當に春らしくなつた。

（二人園を一廻りして、道子の部屋の前に來る。）

松子。（連翹の花のそばの小さなベンチに腰をかける。）いらつしやいな。

道子。（並んで腰をかける。）

（間。）

道子。松子さん。私あなたとかうして、ベンチに腰掛けて話してゐると、あの頃のやうな氣がしましてよ——あの日白の學校にゐた頃のやうな……

松子。ほんたうにね。

道子。あの學校の庭にも此花が咲いてゐましたわね。矢張りベンチの傍に。（しみ〴〵と。）あなた覺えてゐらして？　あなたと一生姉妹のやうに仲好くしようと言つて誓つたりした時の事を。

松子。えゝ。よく覺えてゐますわ。まだ小さかつたわね。あれは若葉の時分でしてよ。新しいフランネルに着更へた日だつたから。二人でブランコをして遊んでゐたら、成吉さんが一高の制服を着て、白い旗を持つて早稲田と試合があるので、これから應援に行くんだと言つて一寸お寄りなすつたんでしたわ。あとで二人でベンチに並んで腰掛けていろいろな空想のやうな事を話し合ひましたね。

道子。そのあとで二人で指切りをして、誓つたんでしたね。

松子。それから早稲田の運動場の見える××寮の庭へ行つて、見ましたね。すると波のやうに白と赤との澤山の旗が空にひるがへつて、時々鯨波の聲が聞えてゐましたね。

道子。（夢見るやうに。）あの日は成吉さんの學校の方が一點違ひで負けたんでしたね。（間。訴へるやうに。）松子さん私此頃淋しくて仕方がありませんのよ。

松子。（急に暗い顏になる。）

道子。私何うしたらいゝのか解らないんですもの。

松子。（青くなりながら。）何うして？

道子。（涙ぐみ。）はつきりと決められないんですもの。

（民子エプロンをかけて部屋に登場。）

民子。道子さん。一寸いらして下さいな。すぐ濟むんだから。

道子。はい。（庭から部屋に上る。）

民子。（松子に。）では一寸。

（民子と道子と退場。）

松子。（ベンチに残つたまゝ考へに沈む。やがて立上り。）私どうしたらいゝのかしら。（庭を少し歩き、再びベンチに腰を下し考へ込む。）

（成吉門より庭に登場。松子を見るや興奮したるさまにて側にはせ寄る。）

成吉。此處にゐたんですか。僕は公園中を探し廻つてゐたんだ。

松子。都合が悪くて餘り遲れたもんだから、こちらに來て見ましたの。もう歸つてゐらつしやるかと思つて。

成吉。（急に四邊を見廻はしもしないで松子を接吻す。）

松子。（おびえたやうに成吉を拒み、四邊を見廻し。）あゝ。

成吉。何です。僕を待ちぼけにさせて置いて。

松子。（心配さうに。）私何うしたらいゝんでせう。

成吉。（松子の顔を見る。）何うしたと言ふんです。

松子。だつて道子さんが――私どうしたらいゝんだらう……今道子さんとこゝで話してゐましたのよ。

成吉。（突然今までとまるで變つて硬い表情になる。がやがて前より一層情熱的になつて。）何です。今になつて。

松子。私恐ろしいわ。

成吉。僕達はもう覺悟しませう。どうせ其の瞬間は來るのだ。

松子。あゝ。私とても耐らないわ。

成吉。それは前から解つて居たんではありませんか。もう二人で何十遍繰り返したことか知れない。だが結局かうなるより仕方がなかつたんだ。

松子。でもあまり可哀想で……さつき道子さんと此のベンチで、昔し女學校の時分に姉妹の約束をしたころのことなど話しましたのよ。あの時分から今までのことがずつと思ひ出されて、私ほんとに耐らない氣がしましたわ。私が奪つてしまつたんですもの。道子さんの幸福

を。

成吉。（考へながら。）僕だつて耐らないんだ。（決然として。）矢つ張り運命の意志だ。

松子。道子さんはどうなさるかしら。自分の地位がはつきり知れたら。

成吉。（強く。）松子さん。もう覚悟しませう。道子には僕から今日はつきりと云つてしまひませう。僕はもう僕達の戀を他人にはゞかつて居るのには耐へられなくなつた。僕達のは白日の戀だ。何ものをも恐れる必要はない。始めから僕は公けの氣持だつたのだ。

松子。だつて貴方はあんまり人目に立つことをおかまひなさらないんですもの。

成吉。僕達はちつとも悪い事をして居るんぢやないんだ。僕は誇りたい位に思つて居るんだ。天地の間に咲き出た華だ。僕が人目に立つやうにするとすれば、其の美を人に見せたいからだ。人が僕らの戀を祝してくれてもいゝ位に僕は思つてるんだから。

松子。だつて、だつて道子さんは祝すやうな氣になれるものですか。呪ひたくなるでせう。きつと。あゝ。

成吉。いや。ほんたうは道子にも祝して貰はなくてはならないのだ。僕はそこを踏みこたへなくてはならない。僕にとつても一つの大きな試みだ。

松子。成吉さん。道子さんは永い間あなたを思つてゐらしつたんですよ。はじめは私に御自分の幸福を聞いて貰ひたい位に思つて居らしたんですよ。それをはつきりとはおつしやらなかつたけれど。あなたの心は自分のものだと思つて居らしたんですよ。

成吉。（目をつぶる。）

松子。それだのに私が來てからは……

成吉。あゝ。僕は道子に對してまるで無罪だと云ふことを良心に對して恥ぢる。だがそれだからと云つて僕が貴女とかうなつた事はどうしても自然だとしか思へないんだ。僕は決して道子の心を弄びはしなかつたが、それを積極的に否定しないで承認して居た時があつた。然かしその事の爲に僕の戀を少しでも間違つたものとは思へない。僕は何者を買しても戀のためには突進するのだ。戀は僕にとつて實在なんだ。そのためには道子の涙でもふみにじつて進むの

だ。（熱狂的に。）松子さん。あなたは今になつて卑怯になつてはいけませんぞ。僕の戀人らしく勇氣を持つて居て下さい。戀のためにはむしろ傲岸な位に。

松子。（額に手をあてゝ。）あゝ。あたし氣が遠くなりますわ。

成吉。（松子をじつと見て居たが、突然松子を抱いて。）松子さん。僕達は早く思ひ切つて濟ましてしまひませう。一番高い絶頂を！　それをすまさないからこんなにふらつくんだ。腰がきまらないんだ。

松子。（成吉の腕の中にて。）私もう——

成吉。僕は今日のあなたを見てどうしてもそう思ふ。僕達は背水の陣を布きませう。もう決して逃げ出せないやうに——夫婦のかためのかたちの式をすませませう。

松子。（成吉に抱きついて。）だつて私——

成吉。（強く。）覺悟をなさい。靈肉を以つて靈肉と抱合しなくては本當の戀ではありません。僕達の愛を肉の上に證據づけませう。そうすればあなたにもきつと覺悟が決まるのだから。

松子。……

成吉。貴女は嫌なんですか。あれ程僕が言つたのに。今になつて。

松子。（愈々成吉にしがみつき、歎願する如き目つきにて、成吉の顔を見る。）

成吉。（ます〳〵強く抱きしめて。）いゝんですね。

松子。（見えない位うなづく。）

成吉。（突然涙を一杯目にためて。）松子さん！

松子。（成吉の胸に顔をうづめる。）

成吉。あの記念の森の奥で。綠の草のかげで。

（民子忙しさうに部屋に登場。二人を見て、急に顔を赤くし、あはてゝ退場。）

松子。（眞赤になり、成吉の腕より脫れんとす。）

成吉。（興奮しながら。）かまひません。かまひません。（ます〳〵抱きしめる。）

松子。あれ。お放し遊ばして！

成吉。（燃えるやうに松子を接吻す。）

松子。（辛うじて成吉の腕より離れ、眞赤になつて。）あゝ。私もう。（門の方に行く。）

成吉。（追ひすがりながら。）お待ちなさい。一寸！

松子。（喘ぎながら。）今日は……私もう、今日は失禮致しますわ。

（松子興奮して退場。）

成吉。（一瞬間茫然として佇立す。聽て再び興奮した樣子で庭を歩く。）さうだ！　もう決つた。……處女が一番尊いものを許したのだ。（少し狂氣じみて、樹の幹を抱き、情熱の遣り場が無いやうに。）春だ！　春だ！（再び一瞬間茫然とする。やがて意識的になり、少し落ちつき、ベンチに行きて、腰をかけ、腕組みをする。）僕はもう子供ぢやないんだ。羞恥といふ感情は今の僕にとつてはあまりにフエミニンだ。（吐き出すやうに。）やらう。どこまでも積極的に。（間。）だが——（考へ込む。次第に反省的な表情になり、遂いに心配さうな樣子にまでかはる。）

（道子考へ乍ら部屋に登場。成吉を見ると著ざめて一瞬間立ち止まる。やがて胸の動悸のするのを靜め

ようと努力する様子にて、下駄を穿き、庭に下り、ベンチの側に寄る。）

成吉。（同じく蒼ざめてベンチから立ち上りかける。）

道子。兄さん。

成吉。（再び腰を下ろし、心を支へるやうに、足を踏みしめる。）

道子。決めて下さい。はつきりとさせて——

成吉。……

道子。おつしやつて下さい。……本當の事を！

成吉。道子！

道子。（眞青になり成吉の面をみつめる。）

成吉。（きつぱりと。）僕は松子さんを思つてゐる。

道子。あゝ。（土の上に膝をつく。）

成吉。道子。ゆるしてくれ。僕ははつきり云ふのが恐かつたのだ。

道子。（ベンチにうつ伏して肩を波打たせてゐる。）

成吉。どうしても一度ははつきりさせねばならないんだ。眞實は枉げられない。松子さんとはもう一番深い處まで許し合つてゐる。

道子。（すゝり泣く。）

成吉。僕は嘘は云へない。自分とお前とを僞はるよりはお前に恐ろしい眞實を背負はす方を選ぶ。僕はお前を戀してゐない。

道子。（はげしく泣く。その聲は人の聲よりも、小さな獸の聲に似てゐる。）

成吉。僕はお前を愛してゐる。心の底から。滴く〳〵、誰よりも、たれよりも忠實に。だがその愛は兄妹としての愛だ。兄としての友愛だ。

道子。（泣きつゞける。）

成吉。（興奮して涙聲になつて。）僕は本當に愛して、愛してゐるのだ。誰がお前を愛しないでゐられやう。お前のやうな處女はゐない。僕は自慢して歩いてゐるんだ……だが小さい時から

一緒に暮らして來た勢か、性の秘密な感じがお前に對しては薄い。もつと親しい感じの方が勝つてしまつたのだ。それに——

道子。（眞蒼になつて倒れかゝる。）

成吉。（道子を抱き。）しつかりしろ。道子！

道子。（成吉の腕の中で。）兄さん！

成吉。持ちこたへてくれ！

道子。だつて……私はだつて……兄さんは私を思つてゝ下さるのかと思つてたんです。

成吉。（泣き乍ら。）許してくれ。許してくれ。

道子。兄様のお口からうかゞつたことは一度も無かつたけれど——

成吉。僕が悪い。僕が悪い。

道子。夢のやうな時もあつたんです。ほんの一寸の間だつたけれど……思ひちがひしてたんです。

成吉。いや。僕がわるかつた。僕はお前の心に起つてゐる氣持を知つてゐ乍ら、それを敢へて否定しようとはしなかつた。お前の心を默認してゐた。

道子。(泣き乍ら)それだけ——只それだけだつたんでせうか。

成吉。道子。僕はお前の心に身を任せてゐた時はあつた。だが決してお前の心を享樂してゐたんぢやあない。

道子。兄樣！　止して下さい。

成吉。聞いてくれ。道子。お前が僕の心の內に讀んでゐる意味を、僕が否定しようとしなかつたのは、僕の心にもお前に對して同じやうな心が起りかけてゐたからだつたのだ。だが僕はそれを戀といふ名でまだ自分に承認する程にならない中に松子さんと知つたのだ。そして其の時僕の心ははつきりと決まつたのだ。お前への心持は戀ではなかつたことが解つたのだ。

道子。でも私には、私には……

成吉。お前に對して兄妹としてゞない或る感じがあつたとすれば、それは違つた性に對して起る

男性としての一般的な感じにすぎなかつたのだ。

道子。でも私にはそれが大きな〳〵意味だつたんですわ。

成吉。（蒼ざめて。）あゝ。それに僕のイリュージョンもあつた。僕は戀のイデアを求めてゐたから。對象をはつきりと捉まなくても——

道子。（狂ふやうに泣き乍ら。）あゝ。何てみじめな——あゝ。

成吉。許して呉れ。許して呉れ。僕はお前を傷つけた。僕の過ちだ。

道子。（泣き續ける。）

成吉。僕は嘘は言へない。今怖ろしい事をいはなければ、二重にお前を傷つけるのだ。僕はもう松子さんと離れる事は出來ない。堅い約束を——

道子。（取り亂して。）あゝ止して下さい。今私の前であの人の名を……

成吉。だが道子——

道子。兄様！　もう解りました。どうぞあちらへおいで遊ばして。あちらへ。あゝ何てみじめな

成吉。（痙攣的に。）許して呉れ。許して呉れ。償ふから。僕はきつと償ふから。

道子。（全く取り亂れて。）あゝひどいわ。ひどいわ。

（民子登場。）

道子。（顏色を變へて。）成吉。一寸おいで。

成吉。（振り向きもしないで道子に。）僕は、僕は償へばすむと思ふのぢやあない。だが僕として——

民子。（烈しく。）成吉。直ぐにおいで。お父さんが呼んでいらつしやるんだから。

成吉。（はげしく。）待つて下さい。

道子。（泣き乍ら。）おいで遊ばして。あちらへ。

成吉。でもお前。

民子。（鋭く。）直ぐにいらつしやいつて言へば。

成吉。今は大事なことなんだから。

道子。あちらへ！　私一人で、私一人で考へたいんですから。

成吉。（しばらく道子を凝視して立つてゐるが、決心したやうに。）道子。しつかり、しつかりしてゐて呉れ。

（成吉と民子退場。）

道子。（狂ふやうに泣く。）

（民子引き返して登場。）

民子。（道子の側へゆき。）道子さん。そんなに取り亂さないで。

道子。（泣き續ける。）

民子。ねえ。道子さん。も少し落ち着いて下さらなくては。わたしは責めはしないけれど。

道子。（ます〳〵聲を立てゝ泣く。）

民子。わたしや大抵解つてはゐる。お前さんも苦しいだらうが。（持てあましたやうに。）あんまりそれぢやあ。

道子。母様。今日丈けは……あたしの氣持に浸らせて……あゝ私――どうぞあちらへ。

民子。（少し不機嫌さうに。）それではお前……お前さんらしくない。

道子。（反抗的に。）うつちやつといて下さい。あたしや一人で。

民子。私は立ち入りはしませんよ。お前さんのやり方は私がお願ひして置いたやうではないけれど、わたしやそれも何ともいひ度くはない。だけどあんまり目立つて變だから。

道子。母様！　あちらへ。――後生ですから。

民子。（もてあましたやうに、優しく。）いゝかい。道子さん。心を靜かにしてお呉れ。お前さんは愼ましいんだから。では又あとでね。（退場し乍ら。）何しろあんまり目立つては困るんだから。

（民子退場。）

道子。（一人になると、全く自制心を失ひたる樣にて、一層烈しく泣く。）

（松子蒼ざめて門より庭に登場。）

松子。（道子を見るとハツとして一瞬間立ち止まる。やがて走せ寄つて道子を抱く。）道子さん。道子さん。

道子。（泣き續ける。）

松子。許して下さい。許して下さい。

道子。あちらへ。松子さん。どうぞ一人で……

松子。許して下さい。私が惡るかつたんです。私が奪つてしまつたんです。

道子。（烈しく頭を振つて。）いゝえ。いゝえ。

松子。あなたを傷つけてしまつたんです。私がはいり込んで來て。私やどんなに氣にしてゐたでせう。すまない〳〵といつも思つてゐました。だけどこんなになつてしまつたんです。あんまり怖くて、あなたに今日迄得いはなかつたんです。あゝ私、すまなくて、すまなくて。

道子。いゝえ、違ひます。違ひます。あなたがわるいのぢやなくつてよ。だけど松子さん。私今あなたを見るのはたまらないんです。

松子。許して下さい。道子さん。あなたはどんなに私を憎むでゐらつしやるでせう。あなたの一番の御友達なのに。こんな目に合はせて——

道子。もうおつしやらないで。

松子。私もう成吉さんとはお別れしますから。もうお二人の處にはまゐりませんから。

道子。(嚴しく。)松子さん。止して下さい。私を二重に苦しめるのは。あたしがそれを悦ぶとおぼし召して。

松子。だつて。あたしやすまなくて怖しくて。もうとてもこのまゝではゐられませんわ。私があなたをお苦しめした償ひにこれからは——

道子。いけません。いけません。

松子。(泣き乍ら。)許して下さいね。許して下さいね。

道子。あなたが悪るいのぢやありません。私が、私が不幸なんです。

松子。でも私が來なかつたらあなたは幸福だつたんですわ。本當に此の上もなく幸福だつたんですわ。それだのに——

道子。松子さん。もうおつしやらないで。だけど今日はどうぞ歸へつて下さいな。私あなたを見

るのはあんまり怖しいから。私に自信がないから。

松子。（啜り泣き乍ら。）えゝ。歸りますわ。そしてもう二度と——

道子。いけません。いけません。

松子。つぐのつて——わたしきつとつぐのつて見せますわ。

（松子よろめくやうに門より退場。）

道子。（追ひかけて。）いけません。……あゝ松子さん。（くづ折れる。そのまゝ泣き乍ら、地にひざまづき。）神様。神様。

幕

第四幕

舞臺前場に同じ。

部屋は幕や花や青葉の枝等にて美しく装飾してある。前場より二週間後の晴れたる午後。民子は机に向ひ忙がしさうに書類を調べ乍ら、何か帳面に書き込んでゐる。信者の婦人及び四人の少女同じく急がしさうに献堂式の準備の手傳ひをしてゐる。

信者の婦人。（菓子を紙に包み乍ら。）だからさ。手早くして下さいよ。まだ教會の方に仕度が澤山あるんだから。（菓子の包みを盆に載せ。新らしく菓子を包む。）

第一の少女。（金絲に花や玉や蠟燭等をくつつけ乍ら。）はい。もう大てい出來ましてよ。

第二の少女。隨分綺麗ですわね。

信者の婦人。（外を眺め乍ら。）あゝ。いゝ時候だ。明日の献堂式もきつとお天氣でせう。（何か考へ乍ら。）ねえ、奥様。ほんたうに其の日は來るもので御座いますわね。辛棒して待つてゐさへすら。

れば。新らしい會堂を建てると云ふ計畫はもう十年も前からだつたんでしたが。

民子。ほんたうにね。だから「常に信じ、常に望む」と云ふことが私達には大事なんですね。恵みの日はきつと與へられるんだから。

第三の少女。（急がしく手を動かし乍ら。）小母さんはそんなに長く教會に出ておらつしやるんですの。

信者の婦人。えゝ。始めて教會が出來た頃からですよ。もう十五年にもなるでせう。

第四の少女。さうですか。

信者の婦人。（感じたやうに。）其間には色々な人が教會に出入りしましたよ。そんて色々なことがありました。本當に今度新らしい立派な會堂が出來上つたことは私には、だから、どんなに嬉しいことでせう。誰だつて嬉しいでせうが。（間。）ほんたうに先生には長い間お世話になつたものだ。

民子。（同感したやうに。）私も隨分色々なことが思出されますよ。主人もどんなにか感じが深いでせう。

（副牧師の妻書付を持ちて急がしさうに登場。）

副牧師の妻。明日のプログラムですが。（指さし乍ら。）これはどうして置きませう。

民子。さうですね。（當惑したやうに。）まあ抜きにして置いて下さい。どうも道子が少し加減が悪いもんですから。

副牧師の妻。はい。

（副牧師の妻退場。）

信者の婦人。お嬢さんは御不快でおらつしやいますか。

民子。えゝ。ちよいと。だけどなんでもないんです。

第一の少女。松子さんと獻堂式の歌をお唱ひになるのではないんで御座いますか。

民子。えゝ。其の筈だつたんですが。

第二の少女。皆それを隨分樂しみにしてゐるんですのに。

民子。えゝ。成るべく致させますよ。大したことではないんですから。でもね……大抵出來

たやうですね。

信者の婦人。はい。やつと。（立上り。）御無理を遊ばさない方が宜しう御座いますよ。ではこれから會堂の方へ仕度の手傳ひに參りませう。（二人の少女に。）も少し手傳つて下さいな。

第三の少女。はい。これで宜しう御座いませうか。

信者の婦人。きれいに出來ました。どうも御手數さま。

民子。どうも有難う御座いました。私も後から參りますから。

信者の婦人。ではお先きに。

（信者の婦人菓子の包みを載せた盆を持ちて退場。）

二人の少女達。では後程。

（少女達飾りを持ちて續いて退場。）

民子。御苦勞様でした。

（民子見送つて退場。舞臺暫らく空虛。成吉憂欝な、神經質な表情にて、門より庭に登場。）

成吉。（考へ乍ら部屋の前まで來たり、急に立止り道子の部屋の窓の方を眺め。）やつぱり閉ぢ込んでゐるのだ。このいゝ天氣に窓も締め切つて。まるで喪に籠つてでもゐるやうに。（溜息を吐き、ベンチに腰を卸し、考へる。悲しさうな表情になる。）病氣にならなければいゝが。ピアノもぱつたり彈かなくなつて了つた。俺は可愛い、小鳥を殺して了ふのだらうか。（考へに沈む。やがて頭を振つて。）いや弱くなつてはいけない。眞理と同情とを一緒にしてはいけない。（間。）だが俺に罪が無いと云へるだらうか——少くとも過失が。（考へに沈む。やがて決心したやうに立上る。）いや、償ひの爲にでも眞理を枉げてはならないぞ。償ひは別の仕方に依らなければならない。

（庭をあちこち歩く。）

（女中急がしさうに部屋に登場。机の上の書附の束をとり、退場せんとす。）

成吉。とき。

女中。はい。

成吉。道子はどうしてゐる。

女中。氣分がお悪いと云つてお臥つてゐらつしやいます。

成吉。ふむ。（考へて。）道子の部屋へ行つてね。僕が行つてもいゝかつて聽いて來て呉れ。話さなくてはならないことがあるんだからと云つて。だが無理にと云ふのではないがつてね。

女中。はい。

（女中退場。）

（間。）

成吉。（不安さうに、あちこち歩き乍ら。）俺に會ひたくないと云ふのも氣持は解る。だが俺としては俺の氣持を、眞心を、もつとよく話して置かなくちや。（間。）それにしても松子さんはどうしたと云ふんだ。あれからちつとも姿を見せないなんて。もしかすると……（立ち止まる。暗い顏になる。）ありさうなことだ。確かりしなくちやならないぞ。（猶あちこち歩き續ける。）

（女中登場。）

成吉。（突然立ち止る。）

女中。あのお嬢様はどうぞ失禮させて下さいましと仰いますの。

成吉。さうか。（堅くなる。）

（女中退場。）

成吉。（突つ立つた儘暫く沈默して後。）仕方がない。俺は俺のすべきことをする外はない。俺の幸福に、——生命に忠實にならなくてはならない。（焦々し乍ら屋部に上る。）もう離れることは出來ないぞ。俺達の戀が今になつて崩れたらそれこそ俺は破産だ。彼女を弱くさせてはならないぞ。本心に背いて。（考へて。）今が一番大事な時だ。（決然として。）さうだ。やつてしまはう！もう後退が出來ないやうに。

（成吉與奮して退場。やがて順作副牧師と話し乍ら登場。）

順作。さうです。だから聖餐の後でね。

副牧師。はい。先生の說教の直ぐ後續けるんですね。

順作。（椅子に坐り、頷く。）

副牧師。（傍に立つた儘。）順序は豫め定めて置きませうか。

順作。いや。やはり隨意にしませう。なるべく自然な方がいゝから。

副牧師。小山さんの演說はどうしませう。信者を代表してと云ふ意味なんですが。

順作。やはり別にしない方がいゝでせう。小山さんは特別に貢獻があつたけれども。一體今度の會堂が出來るのにこんなに長く掛つたのは、信者の少額の寄附を集めたからだつたんです。少數の豐かな人から、金を集めれば直ぐに出來たんだけれども。信者が純粹の喜捨の心で捧げたものばかりを集めて造つた譯です。一枚の瓦でも清い感謝の印と云ふ風にしたかつたのでね。

副牧師。ではさう致しませう。では急ぎますから。

順作。さうですか。どうぞ宜しく。

（副牧師退場。）

順作。（靜かに坐つて考へる。やがて手を膝の上に組み眼を閉ぢる。）

（間。）

（民子興奮した顔付にて登場。）

民子。困つてしまう。明日は献堂式だと云ふのに家中が斯んなでは。（順作の傍に倚る。立つたまま。）

道子はまるで死人のやうな顔をして碌に物も云はないし、成吉は狂人染みてゐる。

順作。（心を静かにしようと努め乍ら。）どうしたのだ。お掛け。

民子。だつて困るぢやありませんか。（腰をかける。）道子は部屋に閉ぢ籠つたきり出て來ないし、私が行つても、ろくにものも言はないんですもの。今朝からは食事にも出て來ないんです。さつき私が松子さんと一緒にうたふ歌のことで行つて見たら、眞蒼な顔をして寢てゐるんです。

順作。明日の歌は止してもいゝのだ。

民子。だつて。（急に立ち上がり。）それはいゝとして成吉は大變なことをやりかけてゐますよ。

順作。どうしたのだ。

民子。（聲を低くして、しかし烈しく。）松子さんと體の交りをしようとしてゐますよ。

順作。（心を落ちつけようと努め乍ら。）ふむ。

民子。此の間ふと二人の秘密な所を見たんです。そして其の事を聞いてしまつたんです。

順作。さうか。

民子。それからこつち成吉の態度が變ですから、私がそれとなく誡めて置いたんですが、あゝ云ふ性分ですから、まるで私の云ふ事など駄目なんです。今日は朝から妙だと思つてゐたんですが、さつき狂人じみた眼つきをして松子さんの處に出掛けて行きましたから、私が少し嚴しく云つたんですの。だつて大變な事なんですから。

順作。（少し興奮して。）うむ。

民子。あなた。成吉は隨分露骨な返事をしましたよ。あなたとめて下さらなくつちやあ、結婚する迄に間違ひがあつては大變ですから。

順作。（考へ乍ら。）それはいけない。わしも一度云つて置いたのだが。

民子。早くとめて下さい。今出掛けてゐるんですから。取り返しがつかなくなりますから。

順作。（考へて。）うむ。とにかく成吉をよこして呉れ。

民子。嚴しくして下さいよ。怖ろしいことになるんですから。

（民子急ぎ退場。）

順作。（少し落ち着かぬ樣子にて、立ち上がり、ドアの方を見る。數瞬間の後、再び腰を下ろし、机に向ひ、目を閉ぢる。）

（成吉登場。）

成吉。（興奮した樣子にて父の側に寄り。）御用ですか。

順作。あゝ。（成吉の顏を見る。）おかけ。

成吉。（腰を掛け、いら〳〵した不安な樣子にて、帽子をつかむだ儘。）外出しかけてゐるんですが。

順作。成吉。わしは率直に云ふが、今お前は怖ろしいことをしかけてゐるのだ。

成吉。（急に硬くなり、沈默す。）

順作。も少し待て。お前の考へがもつと熟すまで。それは怖ろしい事なんだから。

成吉。お父さん。僕は今一生懸命なんです。僕としては必死の努力をしてゐるんです。

順作。解つてゐる氣だ。だがわしは止めないではゐられない。お前の動機が眞面目な事を知つてゐるから尙更らだ。

成吉。お父さん。僕を信じて下さいますなら、どうぞうつちやつといて下さい。僕の行爲は僕が責任を立派に負ふ氣ですから。

順作。わしはお前の誠實を信じてゐる。わしは其の點を心配してゐるのではないのだ。だが、お前の智慧はまだ十分に熟してゐるとは思へない。

成吉。（いら〳〵して。）無論さうでせう。けれど僕の智慧は物事にぶつかつて僕が磨いて行かなくては。

順作。成吉。純潔と云ふものはどんなに美くしい德だらう。殊に青春にとつて、それは實に寶石よりも尊いのだ。それを失つて、何處に青春の誇りがあらう。お前は自ら進んでそれを捨て

ようとするのだ。

成吉。（熱心に。）僕はどうもぴつたりしません。僕の今敢へてしようとしてゐる事は、僕はどう反省して見ても醜いものとは思へないのです。むしろ淨い、淨い氣がするのです。僕はもう子供のイノセンスは失ひました。僕はもう童貞と云ふ價を拂つても、もつと高い生命を握み度い。

順作。一度失つたら、二度はかへらない。お前はきつと後悔するんだから。

成吉。僕は後悔しても、僕が善と信じてしたのだつたら、僕にとつては外に選ぶ途はなかつたのだと思ひます。

順作。戀愛にとつて、純潔と云ふものがどんなに大切なものだかお前に僻つたら。肉の交りの醜さ又それが戀愛に及ぼす毒のやうな損害をお前はまだ知らないのだ。わしはそれを知つてゐる。それは悲しむべき經驗だ。だからその苦がい經驗をお前に防ぎ度いのだ。

成吉。お父さんのおつしやることは僕にはどうもよく呑み込めません。それはこれ迄の囚はれた

考へ方ではないでせうか。僕はコンベンションの殻を破つて、いき〳〵と自由に生きたいんです。

順作。いや。わしは囚はれてゐないつもりだ。わしの恥づべき經驗と、苦い後悔の實感から云ふのだ。

成吉。（もどかしさうに。）僕は戀愛が肉の上に證券を持つてゐることが、頼もしくてならないんです。肉交に依つて、戀愛は實在の根まで達するのではないでせうか。靈肉の法悦、愛の絶頂——僕は其のクライマツクスに打衝つて戰きたいんです。

順作。成吉違ふのだ。其處に惡魔が狡猾な係蹄を企んでゐるのだ。それに引掛つたものは仕方が無い。其處から起上る道はあらう。然しわしは父として、隣人として、それをお前に警めないではゐられないのだ。

成吉。僕を勇ましく試らして下さい。僕は自分でその係蹄がどんなものだか知りたいのです。僕はもう生命の冒險を欲し、又それを必要とする程に生長したんです。

順作。（思はず前に乘り出して。）成吉。お前はまだ怖ろしいことを知らない。人間が冒險を必要とし、又それに堪へ得るやうになる時は恐らく一生來ないのだ。人間の弱さ——あゝわしは今はそれを知つて來た。お前の心はまだ碎けてゐない。（強く。）お前は神の前に傲慢だ。

成吉。（興奮して立上り。）お父さん。僕は僕として考へ拔いたんです。僕は僕の生命に忠實だと思つてゐるんです。幼い乍らも、僕の思索に謙虛だと思つてゐるんです。僕としては今の決心をするには努力と鞭韃とが寧ろ必要だつたんです。

順作。（苦しさうに。）わしは云ふが、お前は肉交に依つて、お前自身の戀愛を裏切るのだ。戀人を殺すのだ。

成吉。（反抗心を示して。）僕はさう云ふ考へは言葉のおどかしぢやあないかと思ひます。少くとも、もつと哲學的に說明される必要があると思ひます。お父さんが僕の智性が滿足するやうに、充分に學問的に話して下されば、別ですが。

順作。（成吉の顏を泌々と見て。）わしは哲學的思索には充分に練れてゐない。わしは違つた方法で、

眞理を知つて行きたいと思つてゐるのだから。實際わしは眞理を知る方法として、お前ほど哲學に賴ることは出來ないのだ。又學問的な表現法もわしはあまりぴつたりしなくなつてゐる。わしはもつと違つた仕方で、心から心に語る道を選びたくなつてゐる。眞理は啓示に依つて、人間に明らかになるものだと思ふし、云ひ表はし方は譬へばキリストや其の使徒達のやうに比喩に依りたく思つてゐる。

成吉。お父さんのお考はあまり聖書的、そしてあまりオルソドツクスだと思ひます。僕は正直な處オルソドツクスの基督教にはあき〳〵してるんです。小さい時から繰り返し、くり返し聞かされて。

順作。（眼を閉ぢて。）わしは一個の平凡な牧師だ。わしは豫言的なことは云ひたくないが、お前が今それ程賴つてゐるものに賴れなくなる時が來るかも知れない。今自分を支へてゐるやうに見えるものが、役に立たなくなる時が——其の時お前が小さい時から聞き馴れて、何の感じもなくなつてゐる聖書の言葉が、驚く程、生き〳〵とお前の心に響いて來る時がないとは

云へない。其の時お母さんに連れられて、眠り〳〵會堂で聞いた物語の斷片がお前にとつてどんなに尊いものであつたかと云ふことを感じる時がないとは云へない。オルソドツクスの信仰がお前の心の荒野を救ふ時が。（間。）わしはお前の生活に強ひて立入らうとするのではないのだ。

成吉。お父さん、僕を行かせて下さい。僕は僕が立てゝ來た生活が破產しないやうにする爲に、必要なのでなかつたら、貴方の誡めに從ふでせう。然し僕にとつては僕の生活の戰の背水の陣なのです。僕は考へ拔いたんです。僕は本當に幾晩も睡らなかつたんです。（涙ぐんで。）僕は生活の戰士のやうな悲壯な誇りさへ感じてゐるのです。

順作。（暫く默想して。）わしはお前に命令することは出來ない。お前にはお前の人生の步みが與へられてゐるのだらう。お前の思ふやうにするがいゝ。

（間。）

成吉。（決心したやうに帽子を摑む。）僕は行きます。

順作。（頷く。）

（成吉興奮して退場。）

順作。（立つたまゝ。）他人の運命を傷けてからでなくては心が碎かれないと云ふことは何と云ふ痛ましいことだらう。（間。靜かに椅子に坐り手を組み合せ、眼を閉ぢ。）神様幼き者をお守り下さい。（默禱す。）

（民子鍵の束を持ちて登場。）

民子。（順作の傍に近寄り乍ら。）いくら何だつてあんまり逆上せ過ぎてゐる。成吉はどうでしたの。私を見ると物も云はないで興奮して出て行つて了ひましたが。（腰を掛ける。）

順作。（靜かに。）矢張り成吉には自分の道を選ばせる外はない。

民子。（一瞬間沈默して順作の顏を見てゐたが。）ではおつしやることも聽かないで行つて了つたんですか。

順作。（頷いて。）わしは强ひて命令することは出來なかつたのだ。

民子。だつて貴方、大變ぢやありませんか。どう遊ばすおつもりです。

順作。矢張り成行に委せて、祈る外はないと思ふ。

民子。でも事柄がほかとは違ひます。人樣の娘を——それに小山さんのお嬢さんを！　後でどんなに困ることになるでせう。

順作。（沈默。）

民子。牧師の息子と信者の娘とが。明日は獻堂式だと云ふ日に。貴方はどうしてやつてお了ひになつたんです。

順作。わしは一生懸命止めたのだ。云ふべきことは皆云つて誡めたのだ。わしに許されてゐる範圍では。だが成吉は聽かなかつた。

民子。もつと嚴格に、父としての威嚴を以つて何故お止めにならなかつたのです。

順作。わしに許されてゐる限りの嚴しさで止め、人間が人間に立入つてもいゝ限りは立入つて誡めたのだ。だが命令することは出來なかつた。

民子。でも父として自分の子に罪を犯させ、他人の娘を傷つけさせると云ふことは正しいことでせうか。それを止めることが出來ないで、父の務を果したと云へるのでせうか。私はこの場合無理にでも止めなくてはならないと思ひます。

順作。わしも實に心配してゐる。だが成吉は自分の行爲を自分で選ぶ自由を持つてゐるのだ。その自由があるからこそ責任が生じる。そして成吉は立派にそれを負ふと云つた。

民子。（反抗的に。）だつて貴方には人間として、父としてより外に牧師としての義務が有るではありませんか。神様から授けられてゐる務めが。自分が守ることを託されてゐる靈魂が今惡魔に誘はれかけてゐる、それを救ふことが出來ないで自分の務を果したと云へるでせうか。

順作。わしは惡魔を指し示したのだ。然し成吉はそれを見なかつた。わしは自分の力と德との足りないことを恥ぢる。自分が自分の仕事を果すことが出來ないことを神に謝する。だが成吉に強ひることは出來なかつたのだ。

民子。事柄に依つては、強ひても罪から守つてやるのが愛ではないでせうか。魂が地獄に墮ちる

のを防いでやる爲には。後では分る時が來るのですから、そして止めて貰つたことを感謝するのですから。

順作。一つの靈魂に强ひることは神樣だつてなさらないのだ。若しその自由がなかつたらどうして罪の責任があるだらう。その自由の神聖丈はどんな場合でも保たなくてはならない。

民子。だつて結果を考へて御覽なさい。ほんとにどんな怖ろしいことになるでせう。

順作。（考へて。）本當に怖ろしい。だが攝理と云ふものはそれよりもまだ深いものだ。事件がどうなつて行くかと云ふことはどうして、私達に分らう。それは神樣にだけ分つてゐるのだ。成吉の生涯の軌道がどう云ふ形で、どう云ふ風に描かれてゐるかと云ふことは、全く神の御旨に存することだ。わし達が指一本でも觸れることは出來ない。わしは自分の務を等閑にすることを恐れるが、自分が立入ることも愼みたい。たゞわしは深い處では安心してゐることの出來る丈の信仰を惠まれてゐる。

民子。私は安心してはゐられません。このことがどんな性質のことかと云ふことを考へれば考へ

る程。それにこのことが周圍に惹き起す波動のことも考へない譯には參りません。小山さんがお知りになつたらどんなに立腹なさるでせう。教會の人達の評判はどうでせう。私達は公人です。私達の社會の中での地位と云ふものも考へなくては。

順作。さう云ふことの思ひ煩らひは今の場合小さなことだ。そのことなら餘り心配しなくてもいい。

民子。それに自由と云つてもかう云ふ問題はその親達にも立入る權利が許されなくてはならない氣がします。だつて親達の運命に直接にかゝつて來るんですから。それに對つて親達が自分を守ることは許されないことでせうか。でなくては親達の生活はどんなに脅やかされるでせう。

順作。（考へて）お前の心配するのは尤もだ。又お前の云ふことも恐らく道理があるだらう。戀愛と結婚との問題は實に深くてわしにもよく分つてゐるとは云へない。一體にわしにはいろいろなことが分らぬことばかりなのだ。だが戀愛の問題は矢張り本人同志の自由を認めねばな

るまいと思ふ。成吉たちの遣り方がわし達の運命に關係を持つて來ると云ふのは尤もだが、それは一般に一人の人間の行爲は他の人間の運命に懸つて來るので、其處に人類全體としての、神に對する連帶責任と云ふ深い觀念が生じて來るのだらう。だがそれは個人の自由と、從つて責任と觀念の基礎の上に置かれなくてはならない問題なのだらう。お前の云ふ通り成吉は自分の戀愛の自由と云ふことの外に、自分の周圍の人々に及ぼす波動に就いて考へなければならない義務があるだらう。だが今の成吉はそれに氣が付かないのだ。大抵の人がそれに氣が付くのにはある年齡と、社會生活の經驗が要るのだから。又そう云ふことは卑近な、社會的の意味で考へられるのでは、一番常識的なものになつて了ふのだから。さう云ふ意味でなら、深く考へない、世間並みの人達が一番それを氣に掛けるものなのだから。

民子　さうおつしやると何だか私がさう云ふ人達の一人のやうに聞えます。それは私は深く考へると云ふ方ではないのでせう。

順作。いやわしはさう云ふ意味で云つたのではない。

民子。さう云ふ思想上の理想的な問題を突き詰めて考へて、其處から行爲を導くのでなくても、日々起つて來る家庭の内の出來事や、教會に屬してゐる人達の間に起つて來る出來事に就いて、心を勞して、皆の間に平和が保てるやうに、其の日〳〵が喜びと感謝で暮せるやうに氣を配つてゐるのは、つまらないことなんでせうか。若しさうだつたら、かうして毎日氣忙しく、方々に氣を使つて働いてゐるのは、何と云ふ甲斐のないことでせう。（涙ぐんで。）ほんとうに何一つ自分の思ふ通りになりもしないのに。

順作。誤解しないやうに、民子。お前のしてゐることはどんなに立派なことだらう。私達がどれ程お前に負うてゐるか。

民子。私ほんたうに時々嫌になつて了ひます。斯うしてアクセクして年とつてゆく。そして、何一つこれ丈は自分の世界だと云ふものはないんですもの。計畫することは皆下に穴を掘るものが出來て、頽れて了ふんですもの。

順作。自分の世界と云ふものは本當は誰にも無いのだよ。自分の心の中に寺を建てゝ生きる——

それ丈が自分のものと云へるのだ。

民子。ほんたうに寂しい氣がする。自分の家庭も、自分の息子も、自分のものではない。自分の夫も——貴方道子はあまりひどう御座いますよ。いくら何だつて。あまり目に立つことは私堪らないんですから。

順作。も少し氣を落ち付けるがいゝ。お前は少し氣が立つてゐる。

民子。(焦々して。)お願ひですから、もつと嚴しくして下さいませんか。もつと權威を以つて臨んで下さらなくちや。各々(めいく)が勝手になつて了ふんですもの。も少し自信をもつて——

順作。民子。實際わしは自信を持つてゐない——さう云ふものには賴れなくなつてゐるのだ。

民子。あなたはあまり氣が弱いと思ひます。成吉だつてそれだからあんなに放縱になつて了つたんです。道子は道子で。ほんたうに困つて了ふ。少くとも道子に丈はもつと嚴しくして下さい。

順作。(民子の顏を見る。)お前はさう云ふがね。わしは大切な所では嚴しくしてゐるのだ。普通の

東洋風の家庭的な意味での嚴しさと云ふものになら、迚もわしの堪へ得るところではない。

民子。あなたはどうして道子にあんなにお甘いんです。私の眼には餘ります。これまで私は隨分辛棒して來たつもりです。だけどあんまり片手落な氣がします。私はあなたの義しさを信じられなくなりさうです。

順作。（眼を閉ぢて、默ってゐる。）

民子。私は道子のことでは成る可く申し上げまいと思つてゐました。けれども今日はもう堪らない氣がするんです。あの子のことで私はどんなに長い間苦んで來たでせう。

順作。わしは道子の不正を道子への傾愛の爲に見逃すやうなことはしないやうにして來たつもりだ。片手落とお前が云ふのはどうもわしには分らない。わしが道子に嚴しくないやうに見えるとしたら、あれをあまり可哀さうに思ふせいなんだらう。

民子。あなたは私の氣持には同情して下さらないんです。道子のことと云へばいつでも私が抑へられて來たんです。だから道子があなたの愛に賴り恃んで私の云ふことを聽かなくなつたん

です。こんなことは云ひたくありませんが、家の中では父親があんまり甘過ぎると母親はやり難いのです。お父さんが嚴格なのを、お母さんが庇ふやうでなくては。それに家ではあべこべなんです。あなたが餘り甘いもんですから、私が嚴しくしなくてはならなくなるんです。だつてさうしなくてはやつて行けないぢやありませんか。そして道子によくないことがあるとき私が叱ると私の眼を遁れてそつとあなたに訴へに行くやうになつて了つたんです。するとあなたが道子のよくないことをお咎めにならないで、甘くなさるんです。

順作。いや。さう云ふ譯ではない。道子にわしは義しさを扞げはしない。わしがあれにしつこく云はないのは、あれの心が大變感じ易くて、一寸の暗示でも隨分きつく應へるのを知つてゐるからだ。

民子。でも私には隨分頑固なんです。そして心を閉ぢて了ふんです。

順作。それはこちらで開いてやるやうにしなくては。あれは小さい、弱いものなんだから。

民子。(涙ぐんで。)あゝ嫌だ。私が酷い人間のやうな立場になつて了ふんだ。私が一番忍耐してゐ

るのに。申しますが、道子は私にとつて長い間隨分重荷だつたんです。

順作。分つてゐる。わしはお前にどんなに感謝してゐるだらう。

民子。（啜り泣き乍ら）あゝ私は何て惨めなんだらう。あの子のお母さんではあんなに死ぬ程の苦しみをして來たのに。

順作。……

民子。御免なさい。私は云ひたくはなかつたんですけれど……だつて。

順作。どうぞ別々に考へて呉れ。道子の知つたことではないんだから。

民子。（なほ啜り泣き乍ら）だつて私は思ひ出すんです。あんなに段々似て來るんですもの。あれを毎日家の中で見てゐなくてはならないのは私には辛いんです。

順作。（苦しそうに。）お前の氣持はよく解つてゐる。わしはその事で幾度鞭打たれても　それを避けようとは思はない。お前にはどれ程か忍耐が要るだらう。だが道子に對してその怒りを移すのはどうぞ抑へてくれ。

民子。いゝえ。道子に私が快く思はないのは道子の私へのやり方が氣に要らないからです。あなたや雪子さんへの不平を道子に酬いるやうな卑怯なことは私は致しません。道子と一緒に暮らすのがつらいのは本當ですけれど。……わたしはそうとられるのが一等苦しいんです。

順作。わしが邪推をしたのなら悪かつた。（間）わしはわしがした過ちについては少しでも自分を見逃がさうとは思つてゐない。十三年此の方毎日その償ひと淨めとを忘れたことはない。幾度でも思ひ出してわしを責めてくれてもいゝ。その度毎にわしは愼み深くしたいと思つてゐる。だが彼の子にはお願ひだからやさしくしてやつてくれ。あんなにデリケートな娘なんだから。

民子。（もどかしそうに。）私にはそうぢやないんです。

順作。道子にいけない所はあらう。殊に此の頃は亂れてしまつてゐるやうだ。だがお前も知つてる通り、彼女は今實に苦しい試みに遇つてゐるんだから。

民子。私の立場も少しは考へて下さらなくちや。私はこれ以上彼の子によくすることができるで

せうか。本當に、私は考へるとたまらなくなるんです。私だつて道子を可愛想に思ひます。だけど道子が成吉にあゝなつてくれたことは、私にとつては隨分困ることだつたんです。今度成吉があんな極端なことを考へるやうになつたのも、元は道子にあるんです。

順作。だがそれは道子の勢とは云へないだらう。

民子。無論道子が企んでしたことではありません。でもそれだからと云つて私たちが困るのは同じぢやありませんか。ねえ。よく考へて下さいまし。道子を家に置いたことはどんなに家の調和のためによくないことだつたでせう。

順作。（急に暗い顏になる。）

民子。私はあなたのお氣に背いても今日はお願ひしようと決心したんです。どうぞ道子を家から出して下さいまし。無論道子が困らないやうにしてやつて。その方法は幾らもあるでせう。誰が善いの惡いのといふやうなことは考へないでも、少くとも今のまゝで行くのは賢くないことはわかり切つてゐるのですから。

順作。そんなことを急に云ひ出したつて。——

民子。いゝえ。これまで長い間考へてゐたことなんです。幾度も云ひ出しかけては、忍耐して來たんです。當初から私は屹度結果がよくないと思つて進まなかつたんです。あなたのお心を傷けまいと思つて同意したんです。私は忍べる丈は忍びました。だけどこんなになつて來てはもう私の力には餘るんです。

順作。もつと靜かに考へて呉れ。興奮してる時には誇張して考へるもんだ。

民子。一人の子供を預つて育て上げると云ふことが、どれ程のことだつたか考へて下さいまし。殊にあの方の子供を！　それに幼い時は兎も角、今となつては、道子はあの方の生きた思ひ出です。道子のすることは一々私にあの方のことを思ひ出させるんです。それが私にとつてどんなに苦しいでせう。私が忘れたい、忘れたいと思つてゐる昔の記憶がしつこく生き返つて來るんです。それが私の心の靜けさの爲にも、家の平和の爲にも、どんなによくない結果に成るかと云ふことは分つて下さるでせう。

順作。どうして分らないでゐられよう。そのことではわしはどんなにお前に感謝してゐるだらう。いつも濟まなく思つてゐる。わしはそのことでお前が負つてゐる十字架がどれ程の重さかと云ふことは充分に知つてゐる心算だ。又そのとでお前はどれ程祝福されてゐるだらう。わしからは云ひ難いが、どうかその十字架を負ひ續けて呉れないか。

民子。（急に再び啜り泣き乍ら。）止して下さいまし。私にばかり重荷を負はせるのは。餘りに重たう御座います。あなたはどうしてそうなんでせう。一家の平和を傷けてまでどうして道子を預つて置かねばならないのでせう。さう云ふ賢くないことをどうして續けて行かなければならないんでせう。私は疑ひたくなります。あなたは道子によつてあの方の思ひ出を樂しまうとなさるんです。

順作。民子。何を云ふのだ。わしが道子の世話をする動機は誓つて無私のものだ。わしは清い人間ではないが、このこと丈は神の前にも恥ぢない。（涙ぐんで。）わしは死んだ友人や、雪子さんへの償ひをしたいのだ。

民子。それはあの子を今日まで育てゝ來たことでもう充分ぢやありませんか。あなたのお心はそれで輕くなるでせう。だけど私は……あのことで一等苦んだ私は。

順作。民子。落付いて呉れ。そしてもつとよく考へて見ようぢやないか。明日は獻堂式なんだ。

民子。（はげしく啜り泣き乍ら。）あゝ嫌だ。こんな心で獻堂式を迎へるなんて。

（女中登場。）

女中。（はつとして、少しおづ〳〵し乍ら。）御婦人方がお見えになりました。奥様にお目に掛つて、お祝が申し上げたいと仰つてゐらつしやいます。

民子。（涙を隱して。）私の部屋にお通し申して置いてお呉れ。直ぐに行きますから。

（女中退場。）

順作。落付いてお呉れよ。獻堂式が濟んでからよく考へて今のことは決めよう。

民子。（立上つて。）こんな時にだつて、教會の務や世間の交際（つきあひ）のことで、心遣ひすることを止めることが出來ないのか知ら。

（民子一寸身繕ひし乍ら退場。）

順作。（その儘凝と考へてゐる。やがて椅子より離れ跪く。突然道子の部屋よりフューネラル、マーチが切れぎれに聞えて來る。）神樣私の家庭をお守り下さい。贖く者をお助け下さい。私の罪をお宥し下さい。私の造つた過失――さう云ふことを許して頂けますなら――過失の酬ひがこんなに長く續くのは餘りに怖しう御座います。どうぞ償はせて下さいまし。いや償ふことは出來ません。どうぞひたすらお救し下さいまし。斯んな亂れた有樣で捧げる會堂をあなたはお受け下さるで御座いませうか。たゞ僕の捧げまする眞心をお容れ下さいませ。若し御心に適ひませぬならば、明日の獻堂式は中止させて下さいまし。（殆ど聞えない位に啜り泣く。）

（ピアノの音ぱつたりと止む。）

順作。（その儘默つて祈り續ける。）

（間。）

（道子。死人の如く蒼ざめて登場。順作の容子を見て入口に立ち止まる。）

順作。（静かに立上り、椅子に腰を卸し、眼くばせして道子を招く。）

道子。（傍に依り椅子に腰を卸す、伏目になる。）

（間。）

道子。（顔を擧げ涙を一杯溜めて。）お父様。（口籠る。）

順作。（優しく。）何でも云ふがいゝ。

道子。お父様。人と人とが約束したと云ふ時には、口に出して云つた時でなくては、さうとは云へないものなんでせうか。

順作。（考へて。）言葉に現さなかつた時でも、二人が心と心とで認め合つてゐる時には、約束したものと云はなくてはなるまい。寧ろその方が大切なことなんだらう。

道子。（泣き乍ら。）では私は兄さんに裏切られたんです。私は兄さんと心と心を認め合つてゐました。口へ出してさうと云つたことは一度もなかつたけれど。それだのに……それだのに兄さんは松子さんの方を……私は悔しくて、悔しくて。

順作。……

道子。お父様。私は幸福でした。夢みてゐました。それが一度に消えて了ふんです。あたしどうしたらいゝのでせう。

（啜り泣く。）

順作。（道子の肩に優しく手を置いて。）お父さんはよく分つてゐる。

道子。私もう生きてゆく氣がしないんです。眞暗なんです。

順作。道子、忍耐おし。お前は今怖ろしい試みに遭つてゐるのだ。

道子。あゝ。私もう駄目なんでせうか。諦めなければならないんでせうか。

順作。諦めなくてはなるまい——地に屬いた戀の限りでは。

道子。いゝえ。私駄目です。そんなことは出來ません。兄さんは私に歸らなければなりません。心と心との約束を守らなくては。

順作。道子、耐へ抜いて呉れ。お前に課せられた運命を受けて呉れ。

道子。お父様、私を救つて下さい。兄さんを私に取返して下さい。私の幸福をも一度前のやうに

順作。（暗然として涙ぐみ、眼を閉ぢてゐる。）

道子。お父様、お願ひです。お願ひです。

順作。道子、お前の運がつたないのだ。人は凡てのことを願ふことが出來るが、許されたものしか受けることは出來ないのだ。その幸福はお前には許されなかつたのだ。

道子。だつて兄さんは約束をお破りになるんです。心と心との許し合つた誓を。

順作。それが神の前に本當の約束であつたかどうかどうして分らう。わしは成吉にそのことをたゞして見たが、成吉の氣持はお前の思つてゐたのとは違つてゐたらしい。假令本當の約束であつてもその人間同志の約束はもつと大きい者の前には道を讓らなければならない。何故と云つて元來人は誓ふことは出來ないのだから。成吉に過失はある。成吉はお前にお詫しなければならない。償はなくてはならない。だがその約束を破るとは、許さなくてはならない。

道子。だつて松子さんはもう私たちには會はないと仰つたんです。私に兄さんの愛を奪つたことを泣いてお詫びなすつて、もう二度と私の家に來ないと誓つてお歸へりになつたんです。それきりお見えにならないんです。いくら兄さんが松子さんを思つても、松子さんがその愛を受けなかつたら。

順作。松子さんもさう云ふ誓は破らなければならない。そして本心の願ひに從はなければならない。道子、わしはどんなにお前が可哀さうだらう。でもわしはお前に義しいことを云はねばならない。お前にはそれは酷る筈だ。わしの云ふことを靜かによく聽いて呉れ。わしは今から二十年前お前と同じ試みに遭つたのだ。（間。）わしはお前のお母さんを思つたのだ。

道子。（何者かに打たれたもの〻如く、身をすくめて、耳を凝と傾けてゐる。）

順作。お前のお母さんが丁度お前と同じ年位な頃だつた。わしがまだ大學にゐた頃だつたが、ふとした事から其頃ミツション、スクールを出たばかりのお前のお母さんと知合になり、段々親しくなつたのだ。私達は一緒に散歩したり、わしが獨逸語を教へてあげたりして、どんなに幸福

だつたらう。それから二年許りは夢のやうな日が續いた。私達は戀と云ふ言葉は一度も使はなかつた。又さう云ふ物語に就いても、餘り話さなかつた。然し心と心とは何物かを感じ合つて、幸福であつた。が其の幸福は長く續かなかつた。其頃音樂學校を出たばかりのお前のお父さんが私達の間に這入つて來てから私達の間は違つて來た。それからのわしは苦しい日ばかりだつた。お前に想像がつくだらう。お前のお母さんの心はわしの一番親しい友達のものになつて了つたのだ。わしはどんなに苦しんだらう。嫉妬と絶望とでわしは死を願つた。が神樣の惠みで——わしは本當にさう思つてゐる。その試みを正しく通過することが出來た。わしはお前のお母さんを潔く友達に渡した。そして二人の幸福を祈つた。わしを裏切つた戀人と、わしの幸福を奪つた親友を祝福した。わしは其時から神の愛を感じ出した。そして大學を中途で止して神學校に行くやうになつたのだ。

道子。だつて私のお父さんは其の時どう遊ばしたんで御座いませうか。私はその心持が分りません。自分の一番のお友達の幸福を奪つてその友達が捧げる祝福を其まゝ受けてゐることが出來

るものでせうか。

順作。いや、お前のお父さんは其れを拒んだ。そしてお前のお母さんと別れやうとした。が其の時、わしは思ひ出す度に尊い氣持と涙とを感じずにはゐられない。わしとお前のお父さんとはどんなに眞心と愛とを以つて、しかも堂々として、正しく行動したらう。わしは友達の同情と義俠心とを感謝を以つて謝絶し、お前のお父さんはわしへの心苦しさに堪へて、男らしく其の幸福を受けて呉れた。私達は一番正しく、一番強く、其の事件を解決したのだ。そしてわしは二人の傍から離れはしたが、私達の友情はお前のお父さんの死ぬ日まで完全につゞいた。

道子。（うなだれて凝と考へに沈んでゐる。）

順作。其後わしは民子と結婚したが、お前のお父さんが亡くなられて、寡婦となつたお前のお母さんは、まだ乳を飲んでゐたお前を伴れて、大變困つてゐられたので、わしが世話をして上げることになつたのだ。（間。）わしは又怖しい試みに會つた。わしは恥かしい。それに勝つ

ことが出來なかつた。私は清いお前のお母さんをどんなに惱ましたらう。又そのことで民子をどんなに苦しめたらう。わしが一番怖しい罪を犯さないで濟んだのは、わしの純潔のためではなくて、お前のお母さんが清かつた爲——攝理の爲——お前のお母さんの餘りに早い死の爲であつた。葬式はわしが引き受けてしたが、わしはお前のお父さんとお母さんとの墓の前で心からわしの罪をお詫びした。そしてお前をわしの家に引き取つて育てたのだ。

道子。（膝の上に涙を落す。）

順作。其の時の後悔が今もまだ新らしくわしの胸を刺す。その過失の酬いは今もまだ續いてゐる。

道子。（小さく啜り泣く。）

順作。聽いて呉れ、道子。わしはお前と成吉とが結びつくことを心窃かに願つてゐた。今もわしはどんなにさうさせたいだらう。併しさうさせてはならないのだ。今眞理を枉げて姑息なことをして置けば、永い後悔が殘るのだ。三人の一生の運命が狂ふのだ。成吉は松子さんに行かなくてはならない。そしてお前は寂しさを忍び受けなくてはならない。

道子。（泣き乍ら。）だつてあたしは……あたしはどうして生きて行くのでせう。

順作。神様が力を與へて下さる。屹度生きてゆく道が見つかる。今迄よりもつと深い道が。

道子。（父の胸に縋り。）お父様。

順作。（道子を靜かに抱き緊め。）強く生きて呉れ。人生はまだ〳〵廣く、無限なのだ。

（成吉眞蒼になつて先きに出て行つた時とは別人の如く悄然として登場。）

成吉。（道子のゐるのを見てはつとするが、其の儘棒の如く突立つて唇を痙攣つてゐる。）

道子。（順作より離れ、心持身をすくめて顫へてゐる。）

順作。（成吉の容子を見て。）どうしたのだ。

成吉。（一寸躊躇するが、決心したやうに。）松子さんが死ぬと云ふのです。僕は分らなくなりました。僕はお父さんの所へ來るより外なかつたんです。

道子。（小さな叫聲を立てる。）

順作。（成吉に。）落付いて。どう云ふ譯で。

成吉。松子さんはどうしても僕に會つて呉れないのです。女中が手紙をくれました。僕はそれを見て驚いて是非會はうと思つたけれど、どうしても會はないのです。僕は堪らなかつたけれども、仕方がないから歸つて來たんです。お父さんの所へ——松子さんは僕が道子に行くやうにつて、自分は永久に二人から離れると云ふのです。お父さん、僕はどうしていゝか分らないんです。どうか止めて下さい。どうして止めたらいゝでせう。僕はつく〴〵僕の無力を感じました。兎に角お父さんに會つてと思つて——

順作。(眼を閉ぢて聞いてゐる。)

成吉。(訴へるやうに。)どうしたらいゝでせう。兎に角止めなくては。僕は踏み込んで會ふことは出來ないし、松子さんのお父さんや、お母さんに話すのは今は好まないし、松子さんの心を尊重したいので——

(此時自動車の門前に來たりて止まる音きこゆ。)

順作。矢張り眞直に、公けに行る方がいゝ。もう此の上は松子さんのお父さんや、お母さんにも

話す方がいゝ。松子さんは自分の本心の聲に從はなければならない。姑息な義俠心を起さないやうに私達でさせなくては。

道子。（泣き乍ら。）お父様、どうぞ松子さんを止めて下さい。兄さんは松子さんにいらつしやるべきです。私に許されないものは諦めます。與へられる淋しさは受取ります。どうぞ松子さんが私の爲にさう云ふ考へを起して下さらないやうに話して下さいまし。私のお願ひですから。

成吉。（涙を一杯眼に溜めて。）道子、僕は……

順作。（涙ぐんで。）正しく解決しようね。正しく。運命を畏れて。わしらはこれから皆で小山さんの宅へ行かう。そして松子さんにも、小山さん夫婦にも話さう。皆で一緒に祈つて、正しくこの出來事を解決しよう。神様がきつと助けて下さるだらう。

（民子興奮して登場。順作の傍に行き、何か囁き急ぎ退場。）

順作。（靜かに。）小山さん夫婦が松子さんを連れて見えたのだ。松子さんはお前に手紙を渡した後で、親達に打明けたのだ。小山さんは私と同じやうに考へて、直ぐに松子さんを連れて來

たのだ。本當に小山さんらしい遣り方だ。此上は皆謙遜に、正直に考へて決めよう。(間。)だがこれはお前達三人で解決すべきことだ。わし等は相談はして貰ひたいが、立入りたくはない。本當によく考へて決めて呉れ。わしはあちらに行つて、松子さんによく話して小山さん達とも相談しよう。

(順作靜かに退場。)

(間。)

成吉。道子、僕はどう云つていゝかわからない。……僕を許して呉れ。僕はお前を傷つけた。

道子。(泣き乍ら。)兄さん、もうそれは仰らないで。

成吉。いや、僕はお前の心を弄んだと云つてもいゝ。僕は今はつきりと感じられる。僕がお前にしたことがどれ丈怖しいことだつたかと云ふことが。でも道子、信じて呉れ。僕はお前を本當に愛してゐるのだ。僕の眞心は——

道子。兄さん、分つてゐますわ。

成吉。本當にお前はどんなに苦しいだらう。僕はそれを思ふと——

道子。（手で拒絶する容子をし乍ら。）もう仰らないで。私もう決心してゐます。私がどうすべきかと云ふことははつきり分りました。お願ひです。どうぞ松子さんと結婚して下さい。

成吉。あゝ。

道子。どうぞ私に構はないで下さい。本心を枉げないで下さい。今となつてはそれが私の一番のお願ひです。

成吉。僕等だけ幸福になつて。僕はお前があんまり可哀さうで——

道子。いゝえ、私の運がつたなかつたんです。私に許されないものを夢みてゐたんです。いつかう云ふ日が來なければならない筈だつたんです。私は耐へて行きますわ。きつと耐へて。

成吉。どうぞ耐へて呉れ。僕からは云ひ難いが。でもさう云ふより外ないのだ。僕がどんなことを今云つたにしても、結局僕が擇ばなくてはならない道は一つだ。（間。）だが道子、あまり

僕を蟲がいゝと思つては呉れな。——斯う云ふとも願へるものなら。……許して呉れ。

（道子の足元に跪かうとする。）

道子。（それを制して。）いゝえ、兄さん、分つてゐます。私はもうあなたを惡くは思つてゐません。それは惡く思つた時もありました。世界が眞暗に見えた時もありました。神様も、愛も、信仰も皆無くなつたやうな氣がした時もありました。だけど今はもう大丈夫です。明るい、高い氣持が歸つて來ました。神様のおらつしやることが信じられて來ました。（涙ぐみ。）淋しい、けれども強い、そして限りない氣持が——

成吉。（涙ぐみ。）一生……一生かゝつて償はせて呉れ。

道子。いゝえ、あなたが惡いのではありません。あなたよりももつと大きいものゝ意志があなたを支配したんです。神様の御旨が。

（順作松子と共に登場。）

成吉。松子さん！

松子。（一歩前に出るがそのまゝ立ちすくむ。）

道子。（松子へ突き進み。）心配しないで下さい。心配しないで。私はもう決心したんですから。ちつとも悪くは思つておないんですから。

松子。（泣き乍ら。）勘忍して下さい、勘忍して……

道子。いゝえ、松子さん。あなたが悪かつたんぢやありませんわ。あなたの自由にもならなかつたんですわ。

松子。あなたに濟まなくて、濟まなくて。

道子。（松子の手を優しく握り。）あなたの氣持はよく分つてますわ。あなたがどんなに心を苦めて下さつたか、私を可哀さうに思つて、どんなことを考へて下さつたか、皆よく分つておますわ。でもお願ひですから、私を可哀さうに思つて、本心に背かないで下さいまし。私はそれを望みはしません。それは却つて私を二重に苦しめるんですから。

松子。あゝ私はどんなにあなたをお苦しめしたでせう。あなたの幸福を奪つて了ふんです。あな

たは私の一番好きな、一番敬つてゐる御友達だのに。

道子。もう仰らないで。そう仰ると私苦しくなりますわ。あなたがもう私の家に來ないと仰つた時、私はそれをいいことにして、兄さんを私に取返さうとしてゐたんです。何て卑しい心でせう。でももうはつきりと分りました。松子さん、私の一生の御願ひです。兄さんと結婚して下さい。

松子。……

道子。松子さん、決心して下さい。私の眞心を信じて下さい。あなたの幸福を受けて下さい。どうぞ私に約束して下さい。兄さんと結婚なさることを。

松子。あんまり恐ろしう……御座いますわ。

道子。私の眞心を受けて下さい。いゝえ、私があなたに上げるんぢやありませんわ。神樣があなたにその幸福をお授けになるんです。

松子。でも私は……

成吉。松子さん、受けませう。潔く。道子の眞心を無にしますまい。私達が今拒むことは道子の眞心を殺すことです。もつと怖ろしい運命の狂ひを生むことです。

松子。（蒼ざめて顫へてゐる。）

道子。（殆ど宗教的な熱情を以つて。）約束して下すつて、約束して。

松子。（頷く。）

（間。）

順作。（三人の對話の間少し離れて靜かに立ち、始終默禱してゐたが。）わしはどんなに安心したらう。有難いことだ。出來事は正しく解決され、御旨は成つた。道子の苦しさは無論のこと、成吉も松子さんも苦しかつたらう。三人とも勇者だ。わしは褒めるぞ。わしは神樣に感謝したい。

成吉。（感動に堪へないやうに道子を抱いて。）道子、僕に誓はせて呉れ、今こそ僕はお前の兄として、新しい友愛でお前に對したい。一生涯變らぬ眞心で！　僕を信じて呉れ。

道子。（優しく抱かれたまゝ。）信じ上げます。妹として、一生妹として可愛がつて下さいまし。

（成吉より離れ、松子に。）私の姉様になつて下さい。

松子。（涙を一杯溜め、然し羞かしさうに。）えゝ。さうなれますやうに。

順作。（半ば祈る如く、半ば獨語の如く。）愛と友情とが元に歸るやうに！（三人に向ひ。）今度のことで三人の結合が前よりもつと確かになるやうにして呉れ。きつとさうなるだらう。わしはそれを信じる。一つの義しさ——十字架に依つて結びつかつたものゝ愛は一番固いのだから。

（民子登場。）

民子。（皆の樣子を見て安心したやうに。）小山さん御夫婦が成吉と松子さんに話したいと云つて居られます。

（松子と成吉退場。）

順作。（民子に。）安心するがいゝ。皆和ぎ合うて正しく解決して呉れた。

（間。）

民子。道子さん、私どんなに安心したでせう。お前さんはどんなにか淋しいでせう。本當によく

決心して呉れました。家の平和を保つて呉れました。（涙ぐんで。）私しつこくは云ひません、許して頂戴。私お前さんに到らぬことが多かつたわね。

道子。いゝえ、お母様、隨分心配をお掛けして。

民子。私こんな性分だもんだから。それに詰らないことを考へたりして。でもこれからは——

道子。分つてますわ。お母様。

（女中登場。）

女中。日曜學校の先生様方が、子供さん達を澤山つれてお見えになりました。

（民子と女中と退場。）

（間。）

順作。（靜かに机に向ひ、腰を卸し。）道子。

道子。（父の傍に行き、腰を掛ける。）

順作。お前は本當によく決心して呉れたね。さつきからの光景は何と云ふ尊い、感動すべきもの

だつたらう。わしは一生涯決して忘れないだらう。お前はどんなに優しく、立派に見えたらう。

道子。私不思議に決心が出來たんですわ。自分でも思ひ掛けない、清い氣持が湧いて出たんです。今朝からの暗い〳〵谷のやうな心から、どうしてあんなに美しい感じが出たのか知ら。あゝ矢張り私の力では御座いませんわ。(涙ぐんで。)お父様、あなたのお力が私を支配したんですわ。

順作。(同じく涙ぐみ。)神様の惠みが支配したのだ。私達が濁つた心からでも、いつも捧げてゐる祈りや、爭ひ合ふ口でいつも唱へる聖書の文句や、さう云ふ神様に屬したものゝ空氣がこの部屋に充ちてゐる。その空氣が見えない内に皆を支配するのだ。あゝ。わしは知つた。わしの毎日してゐることが無駄でないと云ふことを。わしのしてゐることが、どんなに權威なく、平凡であつても、少くともそれが神様に屬いてゐる以上無力なものではないのだ。よく昔から尊い書物には、この書を寫すものは——唱へた丈でも神の祝福を受けるであらうと書いてあるが、あれは本當だ。わしはこれ迄幾度疑つたらう。わしのしてゐることがどんなに

無駄で、力がないかと云ふことを。だがもう疑ふまい。わしは無力でも、わしの仕事の値を信じやう。わしはそのことをわしに信じさせてくれたお前に、わしのこの眼で、この生きた證據を見さして呉れたお前にどう云つて感謝していゝか分らない氣がする。

道子。お父様にそんなに思つて頂くなんて本當に勿體ないますわ。（急に不安さうに。）だけどこれから先き、どうして生きて行つたらいゝか知ら。

順作。今日の恵まれた心を失はぬやうに心掛ければいゝのだ。

道子。だつてお父様、私は弱い、弱いんですもの。

順作。心配する事はない。お前が今日負つた十字架の酬いで、お前はきつと祝福されるだらう。お前の生涯に一つの區劃（くぎり）をつける紀念碑のやうに、その十字架はお前の思ひ出の中にしつかりと建つだらう。これからのお前の生涯はきつと見違へる程深くなるだらう。お前の心の弱くなる時、躓く時はあるだらう。だが其時今日の思ひ出がきつとお前を力づけ、起き上らせるだらう。お前の靈魂の本當の生活は今日から始まつたと云つてもいゝのだ。

道子。私神様の愛と云ふものが、何だかやつと分り出したやうな氣がするのです。

順作。心の內の大事なものが碎かれた時、一番神様の愛が分るのだ。處女の清い！〳〵戀、それをお前は失つたのだ。いや道子お聽き、お前の戀は決して死んだのではないのだぞ。この地に屬いた戀は失はれた。併し天に屬いた戀は永久にお前の靈魂の中に生きてゐるのだ。其處では戀はもう感性的なものを要求しないのだ。お前はあのベアトリチエの事を知つてゐるね。ダンテにとつてベアトリチエは天なるもののイデア、德の華、善の君だつた。ベアトリチエは早く死に、ダンテは只思ひ出にのみ生きたのだ。戀は美しい。だが戀の思ひ出は猶美しい。其處にはもう濁りの影さへもなくて、只淸さと美とのみが支配するのだ。（道子の母の肖像を指さし。）あれを御覽。お前のお母さんが亡くなられてから、十三年の間わしは繪姿を眺めて來た。わしの心は段々淨まつて、あの肖像はわしにとつてもはや聖母と同じになつたのだ。わしの心が汚れた時あの繪姿を見ると不思議な淨めを受けるのだ。お前のお母さんが生きてゐられた時には、わしはあんなに汚れた心で對してゐたのに。

道子。（母の肖像をしみ〴〵と見乍ら。）お父さんの生きていらしたやうに私も生きて行きますわ。私の思ひ出を守つて。どんなに寂しくても、堪へ忍んで。

順作。淋しく強く生きて呉れ。そして偉い、偉い人間になつて呉れ。お前に殘された人生の領土はまだ廣いのだ。（間。）お前は音樂をやるのだらう。

道子。（熱心に。）やりたう御座いますわ。今となつてはどうしてもやらねばならないと思ひます。これ迄は私の天分を疑つてゐました。だけどもう躊躇してはゐられません。私は音樂に生きたう御座います。やり抜きたう御座います。

順作。やるがいゝ、お前のお父さんの遺志を繼いで。お前は一流の藝術家の血を受けてゐるのだ。お前の趣味や、氣稟も音樂に適してゐる。

道子。一生懸命やつて見ますわ。私の愛を、涙を音樂の中に溶かしたい。（涙ぐんで。）私の思ひ出が清く、清くなつた時に、それを音樂に生かしたう思ひます。

順作。さうだ。その心掛でやるがいゝ。音樂はお前を立派に生かすだらう。お前には未來が約束

されてゐる氣がする。

道子　（急にこみあげて。）お父様、私はお父様と同じ道を歩くんで御座いますよ。さう思ふことは私どんなに嬉しいでせう。いつ迄もお父様と仰がして下さいましね。本當の娘として。

順作。（涙を制して。）わしを信じてゐるがいゝ。

（小山夫人登場。）

小山夫人。（靜かに道子の傍に行き、感動を抑へんとする容子にて。）道子さん、私今何にも云へません。それにくどく云ふことは今は相應（ふさは）しくないでせう。只私どんなにあなたをいとしく思つてゐるか、どんなに感謝してゐるか、それ丈知つて頂きたいのです。

道子。奥様、有難う御座います。

小山夫人。（制し切れなくなつて涙を漾し乍ら。）私あなたを一口丈褒めたいのです。大袈裟だと思はないで下さいまし。私には今あなたがマリアのやうに見えるのです。

道子。（赧くなつて。）あんまり過ぎて……怖しくなりますわ。あたしのするのが當り前のことを、

皆さんに勧まされて、やつとした丈なんですのに。

小山夫人。（一寸躊躇するが思ひ切つて。）私今の場合かう云ふ申出をするのが相應しいかどうかとは思ひますが、何だか私云つて了ひたいのです。あなたは四、五年西洋へ行つて音樂を勉強なさるお氣は御座いませんの。私の實家の姪が前から佛蘭西にゐるのですが、いゝお友達がなくて寂しがつてゐますし、日本のいゝ娘さんと一緒に暮らさせて置きたいと思ふのですが、若しあなたがおよろしかつたら、あちらに行つてやつて下さいませんか。ピアノの稽古を少し見て遣て頂いて、御自由に勉強して貰つていゝのです。立入り過ぎましたら御免下さいまし。私あなたが此のまゝこちらに居らつしやいますのは、あんまり苦し過ぎると思うのです。さうして頂けば私大變嬉いのですが。

道子。（俛首れて眞赤になつて聞いてゐる。）

小山夫人。（一歩前に進み。）道子さん、私の無躾な申出を悪くとらないで下さいまし。私が之迄どんなにあなたを好いてゐたか、きつと分つてゝ下さるでせう。私の無私な動機を信じて下さ

いまし。こんなことは云ふのも好みませんが、此の申出はあなたの犠牲に對する償ひと云ふ意味では誓つてないのです。

道子。（涙ぐみ。）奥様、御心はよく分つてゐますわ。私あなたをどんなに信じ上げてゐるでせう

小山夫人。私の申出を快く受けて下さいましな。

道子。願つてもないことなんですけれど。（父の顔を見乍ら。）私どう御返事申し上げたらいゝのか知ら。

順作。お受けしたらいゝだらう。さう云ふことにこだはるには、今私達は皆あまり美しく打ち溶けてゐるのだ。

小山夫人。（優しく道子の傍に寄り。）道子さん、受けて下さるでせう。押付けがましいやうだけれど。

道子。（決心したやうに。）喜んでお受け致しますわ。

小山夫人。どんなに嬉しいでせう。御承知下さいましたら、私その内あちらに參ることになつてゐますから、其時御一緒に參れば丁度いゝと思ひます。多分五月には出發することになるで

せう。

（電燈がともる。女中登場。）

女中。あの奥様が皆様と御一緒に御夕飯を差し上げたいと仰つてゐらつしやいます。どうぞあちらへ。

（女中退場。）

小山夫人。では失禮致します。

（小山夫人退場。）

（間。）

道子。（椅子より離れ、母の肖像の前まで行き、立止まり、眺め入る。）

（少女達の歌ふ聲きこゆ。）

少女達。（舞臺の後ろにて。）

あめつちの主よ　みさかえのため
たてしみとのを　さきはひたまへ

まづしきもの〻　さ〻げしこ〻ろ
あつめてこ〻に　このいへなりぬ

ふかきかなしみ　負ひたる子らの
いこひのやどと　もちひたまひね

（間。）

順作。（靜かに椅子より離れ、道子の傍に行き肖像の前に並んで立つ。）

（間。）

道子。御父様、明日は歌ひますわ。心から献堂式を祝して、御父様の爲に歌ひますわ。（間。）そして私は……（辛うじて涙を抑へ。）私は佛蘭西へ行く船の出るのを待ちますわ。

順作。（靜かに頷く。）人生は深い。お前の生涯はまだ〳〵海のやうなものだ。（默禱する如く眼を閉ぢる。數秒間沈默。）

幕

（千九百二十年二月明石に於て起稿、千九百二十一年七月大森に於て脫稿。）

七夕祭

七夕祭

（一幕喜劇）

——妹に贈る——

倉田百三

人物　長者
　　娘
　　乳母
　　小姓
　　殿様
　　彦星
　　織姫
　　其の他、侍女、番頭、丁稚等

第一場

處　或る地方の大名の城下なる長者の館

時　陰暦七月七日の夜

第一場

娘の部屋、床の柱に萩、桔梗等秋草を一杯挿した花籠が懸けてある。床に七夕の繪の描いた軸物が掛つてゐる。衣桁に菊の花の裾模様のついた着物が掛けてある。庭に七夕祭の色々な色紙（いろがみ）の短册、色紙（しきし）、紙雛等をつけたる笹を立て、棚を飾り秋の初物の野菜、果物、草花、赤飯等を供へてある。廻廊下、縁先に美しい燈籠が吊るしてある。

館の娘、床の側、花籠の下の文机に坐つてゐる。机の上に硯箱と短册が置いてある。その側に乳母膝の上に繪本をひろげてゐる。少し下つて侍女二人手に短册を持つて何か歌を考へ乍ら語りゐる。

乳母　（話を續け乍ら）左樣で御座います。もうすつかり秋らしくなりました。

侍女の一　七草もぼつ〳〵咲き出しました。薄ももう穗に出て居ります。

侍女の二　淺茅の花は今盛りで御座います。

乳母　空が冴えて天漢がだん〳〵はつきりと見えるやうになりました。

娘　あゝ、だんだん露が繁くなるんだね。そしてあの雁が鳴くやうに。妾秋になると寂しくつて仕方がない。この三年程は。

乳母　（しんみりして）あのことが御座いましてからね、紅葉狩の——

娘　妾こんな氣持で又紅葉の頃になるのは、本當に堪らない。

乳母　（いとしさうに娘を見ながら）本當にお察し申しますわ、だけど御辛棒遊ばして待つてねらつしやいまし。今にきつといゝ日が來るんで御座いますから。

娘　妾待つて待つてもうがつかりして了つてよ。

乳母　今年の紅葉の頃までにはその日が來るかも知れませんわ。

娘　だつて乳母や、戰はいつ濟むか解らないではないの。それに若しかお怪我でも遊ばしたら。

乳母　そんな事があるもので御座いますか。御心配なさいますな。きつと勇ましいお手柄をお立てになつて、殿様と御一緒に凱旋なさいますよ。

娘　さうだといゝが。妾心配で。あの方は初陣なんだから。それに夷は却々強いと云ふからね。

乳母　大丈夫で御座いますよ。殿様にはあんなに選抜の立派な旗本の兵士がついて居るんでございますから。

娘　でもねえ。（考へ込む。）

（間。）

乳母　（氣を變へて）そんなに御案じ遊ばすよりも、早く逢瀬の日が來るやうに織姫さまにお願ひ遊ばせ。折角の七夕祭を皆で樂しくお祝ひ申さうでは御座いませんか。織姫さまにあやかる爲に。

侍女達　それが宜しう御座いますわ。

乳母　お嬢様、あなたのお好きな歌でもお詠み遊ばしてお聽かせ下さいましな、

娘　さうね。だけどお前達も詠んでお見せよ。

乳母　わたくしで御座いますか。詠みませう。腰折でも。（侍女達に）あなた達もね。

侍女の一　はい。詠みませう。下手乍らも。

侍女の二　常々お嬢様にお習ひしてゐるんで御座いますから。（三人默つて歌を考へる。）

（間。）

侍女の一　（短册に歌を書く。）出來まして御座います。

娘　さうかい。讀んで御覽。

（乳母と侍女の二、考へごとを止めて耳を傾ける。）

侍女の一　（讀む。）牽牛（ひこぼし）と織女（たなばたつめ）と今夜逢（こよひ）ふ天の河門（かはと）に波立つな勤（ゆめ）。（笑ひ乍ら）如何で御座います。

乳母　よく出來ましたね。

侍女の二　いゝけれどあまり月並みではないか知ら。

娘　（短冊をとつて眺め乍ら）妾いゝと思ひますよ。月並みなやうだけど素直でいゝ。

（再び沈默して皆歌を考へる。）

侍女の二　出來ました。（短冊に歌を書く。）

（三人耳を傾ける。）

侍女の二　（讀む。）玉葛絶えぬものからさ宿らくは年の渡に唯だ一夜のみ。わたしのは如何で御座いませう。

侍女の一　いゝのね、あなたのは才氣があつてうまいのね。

乳母　（口吟み乍ら）上の句がよう御座いますね。

娘　さうね。妾かう云ふ歌も好きだわ。だけど「さ宿らくは」のあたりがあまり云ひ廻しに凝り過ぎてゐる。も少し素直な方がいゝかも知れないね。

乳母　（突然）わたしのもお聽き下さいまし。（短冊に書く。）天の河川門に立ちて吾が戀ひし君來ますなり紐解き待たむ。如何で御座います。

（皆默つてゐる。）

乳母　（侍女の二に）あなたどう思つて。

侍女の二　（笑ひ乍ら）さあ。どうですか知ら。

乳母　（侍女の一に）あなたは。

侍女の一　（袖で口を覆ひ乍ら）わたしにはわかりませんわ。

乳母　わたしはよく出來た氣なんだけれど。（娘に）お嬢さま如何で御座いませう。

娘　（少し顏を赤くしながら）いゝ歌ですよ。ほんとうに一筋な氣持が出てゐて。

乳母　左樣で御座いますか。お氣に召しまして飛んだ手柄を致しましたね。だけど（笑ひ乍ら）若い人達の前で讀むには少し無躾なかも知れませんね。

（侍女達笑ふ。）

乳母　さあ今度はお嬢さまの番で御座いますよ。

侍女達　どうぞお聽かせなされて。

娘　（静かに短册に書く、急に淋しさうにしながら）乳母や、讀んでお呉れ。

乳母　（讀む。）戀しげく月日長きものを逢ふべかる夕だに君が來まさざるらむ。

（一同しんみりとして沈默。）

侍女の二　（短册をとつて眺めながら）寂しいお歌で御座いますこと。

侍女の一　ほんとに（短册を覗き込みながら口吟むやうに）……君が來まさざるらむ。

乳母　今にいらつしやいますよ。お嬢樣。此間待人の占を致しました時にも、一七日の內には「待人必らず來る。」と云ふ卦だつたのでは御座いませんか。

娘　だつて乳母や。その一七日は丁度今日でおしまひではないの。

乳母　今夜お越しになるかも知れません。子の刻の鐘がなりますまでには。

娘　そんなにまやかし事ばかり云つてお呉れでない。妾を慰めやうと思つて云つてお呉れなんだらうけれど。迎もお越しになりはしないよ。秋が過ぎても、春になつても、あゝ妾なんだかもういつ迄も歸つてはいらつしやらないやうな氣がするんだもの。

乳母　（當惑したやうに）そんなことがあるもので御座いますか。お嬢様、私達の思ひ丈でも。（氣を變へるやうに）この短冊を笹に結んで置きませう。お嬢様の切ないお心が織姫さまの御心に通じたら、きつと逢瀬の日を惠んで下さいませう。同じ悲しい思ひを知り抜いてゐらつしやる天の女神様に。（立つて棚の傍にゆき笹に短冊を結びつける。）

（侍女達同じく短冊を結びつける。）

娘　（凝つと淋しさうに見てゐたが）妾は織姫さまがお羨ましくつてよ。一年に一度はお會ひになることがお出來になるんだもの。それに何萬年の昔から幾度も幾度も深いお契りをお結び遊ばしたんだもの。妾などはいつお目にかゝれるか解らない。それにほんの只一目お眼もじしたきりなんだもの。

乳母　（座に歸つて、氣の毒さうに娘を見ながら）ほんとうにあの紅葉狩の時、假初めに一寸一言二言お話しになつたきりで御座いますのね。

娘　妾は話をしなかつたのだわ。

乳母　私がお取次致しましたので御座いますからね。

娘　ほんとうに何んと云ふ果敢ないことだらう。

乳母　だつてその假初のお目もじから目出度いお縁が結ばれて了つたんでは御座いませんか。あの紅葉狩の日から目出度い日取が決まるまでの間のことは、本當に夢のやうで御座いますわ。私女の一念と申すものがどんなに強いものか、つくづく感心致しました。迚も叶ひさうにもない夢のやうな願ひがたう〳〵成就したんですもの。

娘　（少し羞かしさうにしながら）乳母やには本當にお世話になつたわね。

乳母　いゝえ、私などの力では御座いませんわ。旦那樣の世に知れ渡つてゐるお德の爲、その旦那さまがお眼にお入れ遊ばしても、痛くない程のあなたさまへの御寵愛のおかげ、いゝえ、それよりも矢張りお孃樣の御一念のお強かつた爲で御座いますわ。私結納が取交されて祝言のお日取が決つた時には、本當に嬉しくて嬉しくて泣きたう御座いましたわ。

娘　あゝ妾、その日をどんなに待つてゐたらう。それだのにその日が一七日の先に迫つた矢先に、急に戰(いくさ)が始まるなんて。

乳母　御尤もで御座いますわ。せめて祝言を濟ませたあとならとお思ひになりますのは。だけどお嬢樣、もの事は餘り滿ち足りすぎると魔がさすと申しますよ。少しは缺けた所があるのは反つて結構で御座いますよ。別れてゐていとしい人を待つと云ふ心も床しいもので御座いますもの。

娘　（悲しさうに）待つ身になつたら迚もさうは思へなくてよ。妾心配で。それに若しか御心變りでも遊ばしたら。

乳母　（笑を含んで）飛んでもない。そんなことがあるもので御座いますか。だつて乳母や、殿樣のお腰元達の中にはきれいな方が澤山ゐらつしやるのだもの。

娘　（笑ひながら）大丈夫で御座いますよ。腰元衆がどんなに美しくつても、お嬢樣と較べれば、函の中の玉と簪(かんざし)の玉とほど違ひますわ。御城下でいつち古いいつち名の高い長者

の箱入娘のあなた様、旦那様が遠くの國々からお仕入れになるいつち美しいお召物を召して、いつちお念入りに御化粧遊ばしてお越しになつたあの紅葉狩の、只一刻のお目もじがあのお小姓様のお目にどんなに寫つたか私にはちやんと解つて居りますわ。深い窓の下でお嬢様がお詠みになるお歌の事でも、今頃はきつと陣屋の幕の中で鏃を磨ぎながらお思ひになつてゐらつしやるでございませう。

娘　ほんとうにさうだつたら矢文でも射つてよこして下さりさうなものだのに。

乳母　お便りがないのは、あの方がお勇ましい方だからで御座いますよ。大切な初陣を立派に勤めたいと思つていらつしやるからで御座いますよ。御安心遊ばせ。お嬢様は赤い赤い愛情の細紐をあの方の首に掛けてあの方をくゝつておしまひになりました。あの方はもうあなた様を御離れになる事は出來ません。

娘　どうだか。

（間。丁稚登場。燈籠に灯をともして靜かに退場。長者丁稚に反物を澤山持たせて登場。）

長者　皆なにをしておいでだ、滅入り込んで。

乳母　皆で七夕のお歌を詠んだりして居りましたが、お嬢様は寂しいお歌をお詠みになつたりして、お氣持がおひき立ち遊ばさないんで御座います。

長者　（娘の顏を見る。）

娘　あたし淋しくつて。つまらなくつて……

長者　鬱ぎ込んではいけませんぞ。この樂しい祭りの夜に。（見廻して）暗くて陰氣臭いではないか。（侍女達に）もつと灯をともすがよい。

（侍女達退場し、すぐに大きな蠟燭を點した銀の燭臺を手毎に持ちて引返し登場。程よき所に置く。）

それでいゝ。みなたのしく祭を祝ひませうぞ。

乳母　左樣でございますとも。皆で樂しく今宵をすごしませう。

娘　あたし氣が沈んで。あたし浮々した氣にはなれないわ。一人でじつと考へて居る方がいゝわ。

長者　織姫様の爲に一年に一度の樂しい夜をお祝ひしておあげ申さないかい。

娘　（駄々をこねるやうに）織姫様には樂しい夜でもあたしにはよけいに寂しい夜で御座いますわ。あゝ織姫様は今夜どんなに睦じく彦星様とお語らひ遊ばすのだらう。それだのにあたしは……

長者　娘、それはそなたの我儘ですぞ。そなたには目出度い目出度い日が約束されて居るのではありませんか。わしは今日奥方様の御殿に御挨拶に廻つて來たが、奥方様はそなたを果報者だとおつしやつてお出でだつた。腰元衆はそなたを羨ましがつて妬んでゐるほどでありましたぞ。奥方様の御話では、腰元衆の中にはあのお小姓様に想ひをかけて居たものは數多かつたのださうだ。それが町人の娘のそなたのものになつたのではありませんか。

娘　でも一度もお言葉をお交しする事さへも出來ないなんて。

長者　いまに思ふだけ語り合はれる時が來るのではありませんか。

乳母　（娘の氣を引立てるために戯談のやうに）その時はどんな睦言でもたんとお交はしなさるがよろしう御座いますわ。私たちはひつこんでゐますから。

娘　いやですよ。乳母や。

（侍女達笑ふ。）

長者　つまらないことは言はないで、まあこの美しい反物を見るがいゝ。

（丁稚反物を擔げる。）

侍女達　（驚きの眼を瞠り）まあなんて綺麗な織物で御座いませう。

長者　これは遠い海の向ふの國から苦心をして仕入れたばかりの反物の荷を開くと直ぐ、いつちよささうなのを選んで置いたのだ。

乳母　なんていゝ模様で御座いませう。これでお嬢様、お打掛をおつくり遊ばしたら。

侍女の一　きつとよくお似合ひで御座いますわ。

（丁稚次々に反物を擔げて見せる。）

長者　娘、そなたはどうお思ひだ。この唐草模様の錦地で被布をこしらへてはどうだらう。

娘　（氣のなささうに）さあ。

乳母　（もう一つの反物を手にとつて擴げて）何んて美しい。お嬢様この燃えたつやうな紅葉の模様の縮緬でお羽織をおこしらへ遊ばしませな。（反物を娘の肩のところへ持つてゆき乍ら）こんなによくお似合ひで御座いますわ。

娘　（不機嫌さうに）之を着て、紅葉狩へでも行けとお云ひなのかい。そして一體誰に見て貰ふの。

乳母　（少し狼狽しながら）だつてせめてあのお山の、あの樹影に行つてあの紅葉狩の時のことを偲んだら——

娘　よしてお呉れ。あの方のいらつしやらないあの山は、妾には禿山よりも詰らないんだから。

長者　（持て餘したやうに）そんなことを云はないで、何かこしらへるがいゝ。さあどれが氣に

入りましたか。どれでもそなたの欲しいのをいくらでも取るがいゝ。

娘　妾着物などこしらへたくは御座いませんわ。

乳母　でも一つ位。折角旦那様がお嬢様を喜ばせたいとお思ひになつて、とらせてお置きになつたので御座いますから。

娘　（益々不機嫌になつて）嫌ですよ。あの方の爲でなくては妾どんな着物も着たくはないのだから。

長者　いや〳〵娘、花婿はいつおいでになるか解りませんぞ。花嫁はいつでも身仕度をして待つてゐなくてはいけない、と云ふ諺がありますぞ。嗜みの悪い所を不意に見付けられて、婿殿に嫌はれてはなりますまいぞ。

娘　あの方がいらつしやるもので御座いますか。本當に情けない。（泣き出しさうになつて暗い燈籠の蔭に顔を背向けながら）皆もういゝ加減なことを云つて、慰めるのは止して下さい。妾は一人で考へたい、一人で泣きたいのだから。

（皆持て餘したやうに沈默。）

乳母　（長者の耳に何か囁く）お嬢様、これから妾が思ひ付で面白いお慰みをお目にかけたう御座います。外の事とは違つてこれはきつとお嬢様のお慰みにならない筈は御座いません。これから腰元達と狂言をして御覽に入れます。お嬢様にお内緒にちやんと仕度をして置いたので御座いますから。

娘　そんな陽氣なことを。

乳母　お嬢様がいつち見たい、見たいとお心にお思ひになつてゐらつしやるものを、出してお目に掛けませう。あの方のお姿を。あの方とお嬢様との物語を。

娘　まあ乳母やが何を云ひ出すことやら。

乳母　まあ見てゐて御覽遊ばせ。きつとお慰みになりますから。尤も失禮な所はお許し下さいまし。

長者　それはよい思ひ付きぢや。では皆で賑かに遊ぶがよい。娘、機嫌よく遊ぶのですぞ。

（退場しかける。）

乳母　旦那様もどうぞ御覧下さいませ。

長者　いや、わしがゐては皆が窮屈だらうでな。（退場しながら）今夜は無禮講ぢや、皆思ふ様に遊ぶがよい。

（長者退場。）

乳母　では始めませう。（侍女達に）燭臺を。お嬢様、少時御免遊ばせ。

（退場。）

（侍女達、一人の侍女だけ殘し、凡て燭臺を持ちて退場。部屋暗くなる。）

（娘と一人の侍女燈籠の灯影に並んで待つてゐる。）

（間。）

（太鼓の音きこゆ。やがて拍子木の音。侍女達次の間の内より襖をあけ放つ。長者の家の紋所を染め抜いた幕が垂れてゐる。廳て丁稚一人袴をつけ、福助の面をかぶり、幕をかゝげてあらはる。）

（丁寧にお辭儀をし）御覧に入れまするは「初紅葉戀の懸文」と題しまする狂言に御座り

福助

ます。不鍛練なる私共の演技が、秋の夜の一興ともなりますれば恐悦至極に存じます。何分俄か作りの一座のことに御座りますれば、見苦しき所は御容赦を願ひまする。わけて此の狂言の花形たるお小姓の役を勤めまする役者の儀は、所詮さる御最負様の御氣に叶ふ程のものはこれなく、宜敷お斷り申し上げ置き呉れよとの太夫元よりの言傳に御座りまする。さらばすぐさま開幕致しまする。御目止め御覧を願ひまする。

（丁稚御辭儀をして退場。）

（賑かなる囃にて幕あく。紅葉の模様の襖が一面に立て廻してある。前面左手に紅葉の樹が一本造つてある。舞臺は大いなる蠟燭をつけたる多くの燭臺にて明るく照らされてゐる。後方右手に橋、中央に腰掛あり。）

腰元一　こちらで御座いますよ。

（腰元數名左手より手を拍ち乍ら一人の盲鬼となれる腰元に追ひかけられ乍ら登場。）

盲鬼　（追ひかける。）

腰元一　（逃げる。）

腰元二　（手を拍つ。）こちらで御座いますよ。

盲鬼　（追ひかける。）

腰元二　（逃げる。）

腰元三　（同じく手を拍つて）違ひますよ。こちらで御座いますと申しますのに。

盲鬼　（突き進む。）

腰元三　（逃げかけて、躓いて倒れる。）

盲鬼　（つかまへる。）

腰元三　（振り放さんとす。）

盲鬼　（しつかりと抱きつき、喘ぎ乍ら）今度は放しませんよ。

腰元達　頭到つかまりましたね。

腰元三　お放し遊ばせ。袖が千切れて了ふでは御座いませんか。

盲鬼　（しつかりと抱き緊めて）もう駄目で御座いますよ。

腰元三　解つて居りますよ。お放しなさいつてば。あなたは私をあのお小姓様とでも間違へておいで遊ばすのではなくて。

盲鬼　（目隱しをとつて。）冗談ばつかし。

腰元達　・（笑ふ。）

腰元四　今度はあなたの番で御座いますよ。

腰元三　（目隱しをしながら）私いゝことを思ひ付きました。間違へた眞似をしてあのお小姓様を捉へてあげませうか知ら。

腰元一　さうでもしなくては傍へは寄りつかれませんよ。あの方は女嫌ひださうで御座いますから。

腰元二　本當にさうなんで御座いませうか。まだ戀人はおあり遊ばさないので御座いませうか。

腰元三　ひどくお氣になさいますのね。

腰元二　あら。さう云ふ譯ではないけれど。あのやうな方に愛される人はどんなに幸福（しあはせ）だらう

かと思つて。

腰元四　殿様のいつちお氣に入りで、圖書の頭さまの御末男で、お小姓様達の中でいつち悧巧で、いつち綺麗で——

腰元三　（うつとりとしながら）本當に水のしたゝるやうな前髪。あの凛々しい朱鞘の太刀。

腰元四　そんなにぼんやりなさらないで早く鬼におなり遊ばせ。

腰元三　（目かくしをする。）宜しう御座いますか。

腰元四　えゝ。では殿様の幕屋の方へ逃げてあげましてよ。

（腰元達皆手を拍ち乍ら橋を渡つて退場。）

（盲鬼あとを追うて退場。）

（殿様と小姓、覆面を被り右手より登場。）

殿様　（橋の上にて）よい眺めぢやな。

小姓　左様で御座います。

殿様　「楓葉は二月の花よりも紅なり」とあるのは本當ぢや。實に美しい。

小姓　谷川に散つた紅葉がしがらみをかけて居りまする。

（二人橋を渡つて舞臺の前方に出て來る。）

殿様　（上機嫌で）今日の紅葉狩は面白かつた。林間に紅葉を焚いて暖めた酒で、微醉を帶びた顏を山風に吹かせてかうして微行で人々の間を歩いて見るのは、實に愉快ぢや。

小姓　下々の者の遊山の有様が殿様にはお珍らしくお見えになるで御座いませう。

殿様　予は世間の人達の様々な相を見るのが好きぢや。愛すべき者共ぢや。（間。）少し休んで行かう。

（二人腰掛にかける。）

殿様　（邊りを眺めてゐたが、傍の紅葉の枝を手折つて扇にかざし乍ら）一首出來たぞ。

小姓　（短册と、矢立から筆を拔いて殿様に渡す。）

殿様　（すら〳〵と歌を書き、小姓に短册を渡す。）

小姓　（よむ。）手折らずて散らば惜しみと我が思ひし秋の紅葉を挿頭しつるかも。

殿様　如何ぢや。

小姓　寔に結構と存じまする。

殿様　そちも一首詠め。

小姓　（首を傾けて考へ乍ら短冊に何か書く。）

殿様　出來たか。

小姓　しばらく御猶豫を願ひまする。

殿様　左様か。そちは日頃から歌の上手だから定めてよい歌が出來るであらう。

小姓　中々もちまして。（歌を考へる。）

殿様　（默って景色を眺めてゐたが）紅葉の美しいのは葉だけではないな。幹から枝の感じが實にしなやかぢや。そして幹の肌が何とも云へない柔らかな艶を持つてゐる。（間。）今日は予に話してお聞かせ。そちの嬉しい物語でも。

小姓　（顔を赤らめ乍ら）私にはそのやうな話は一向御座りませぬ。

殿様　いや〳〵そちのその器量で。

小姓　（眞面目に）全くもちまして。

殿様　（小姓の顔を見て微笑を含み乍ら）左様か。それでは予がそちに良き花嫁を媒立してやりたいものぢや。腰元達の内にそちの目に止つたのはないか。

小姓　（益々硬くなつて）殿様私はひたすら殿様に忠勤を勵み、すは戰場となりますれば御馬前にて功名を立てたいと希つてゐる外は御座りませぬ。

殿様　うむ。そちは文武に秀でた頼もしい奴ぢや。如何ぢや。歌は出來たか。

小姓　（首を振り乍ら）どうしたものか今日は一向出來ませぬ。

殿様　お見せ。（短册を取つて）初紅葉（もみぢば）に似てこそありけれ。下の句しか書いてないな。どうしたもので御座いますか、上の句がどうしてもつきませぬ。

殿様　うむ。時に依つてさう云ふこともあるものぢや。

小姓　誠にお恥かしく存じまする。

（この時下手にて賑かな囃の音と人々のどよめき聞こゆ。）

殿様　（立ち上り）あの池の汀で何かあるやうぢや。あちらに行つて見やう。

小姓　それが宜しう御座います。

殿様　その短冊はあの紅葉の枝に結んで置け。

（小姓短冊を枝に結ぶ。）

（殿様小姓左手に退場。）

（少時して左手より乳母と娘と登場。）

乳母　お嬢さま、こゝはひつそりとして宜しう御座いますよ。

娘　さうね。あんまり人混（ごみ）の中で燥（は）しやいだものだから少しのぼせて了つて。

乳母　こゝに腰掛が御座います。お休み遊ばせ。

（乳母と娘並んで腰を掛ける。）

娘　ひんやりしてこゝは氣持がいゝのね。

乳母　小鳥が鳴いてゐますわ。

娘　おやあの紅葉の枝に短冊が結んであるよ。

乳母　本當に。（立つて楓の傍に行き。）歌が書いて御座いますよ。手折らずて散らば惜しみと我が思ひし秋の紅葉を挿頭しつるかも。

娘　（耳を傾けて）ふむ。

乳母　（も一つの短冊を見乍ら）初紅葉に似てこそありけれ。下の句しか書いて御座いませんわ。

娘　さうかい。（一寸考へて）乳母や、その短冊を持つておいで。妾が上の句をつけたいから。

乳母　それは面白う御座いますね。（短冊をとつて娘に持つて行く。）

娘　（懐から紙入を出し、紅筆で上の句を書く。）乳母やどうなの。

乳母　（短冊をとつてよむ。）愛らしと我が思ふ君は秋山の初紅葉に似てこそありけれ。本當にうまくつきましたね。

娘　さう。

乳母　まるで始から一人の詠んだ一首のやうに、しつくりと出來ましたわ。

娘　（何か考へ乍ら）　ねえ乳母や、この下の句を詠んだ方はどんな方だらうね。

乳母　さあ。何んだかその方が偲ばれますのね。

娘　若しかすると趣味の勝れた立派な方かも知れないよ。

乳母　（短册を見乍ら）見事な手蹟で御座いますね。きつとお若い方で御座いますよ。

娘　考へると不思議なものだね。ちつとも知らない人と一首の歌を詠み合はせるなんて。これも何かの御縁で御座いませう。

乳母　（何か考へ乍ら）一生お目にかゝることはないのだらう。

娘　（間。）

（小姓引き返して登場。）

小姓　（紅葉の枝の傍に寄り、自分の短册を探し求める。一寸思案して後、二人の方を眺め、少時躊躇す

るが、思切つたやうに、覆面をしたまゝ會釋をし。）一寸物をお尋ね致しまする。この紅葉の枝に、もう一つの短冊が結んで御座いましたのをもしや御存じではありますまいか。

乳母　（娘と顔を見合し）其短冊はあなた様がお結びなされたので御座いまするか。

小姓　左様で。御存じでございませうか。

乳母　其の短冊ならば私共がさつき解いて拜見させて戴きまして御座います。

小姓　（始めて覆面をとる。其時木の葉の間を洩れたる夕陽（ゆふひ）燃えるやうに小姓の顔を照す。）左様ならば其の短冊を私に御返し下さいませ。

乳母　はい。かしこまりました。

娘　（其時までうつとりとして小姓の顔を見て居たが我に歸つて乳母の耳に何か囁く。）

乳母　手前の主人が申しまするには其短冊は御返し申上げかねるとの事で御座りまする。

小姓　これは何故で御座りまするか。私の短冊を私に。

娘　（又何か囁く。）

乳母　實は其短冊には下の句だけしたゝめてございましたのに手前の主人が上の句を書き添へましたので御座いまする。

小姓　（思はず娘の顔を見る。直きに乳母の方に向いて）それでも苦しうござりませぬ。其短冊を何とぞ御返し下さりませ。

娘　（不承不承に短冊を懐より出して乳母に渡す。）

乳母　（短冊を小姓に渡す。）

小姓　（短冊を受取つてじつと見る。感動したる様子にて吾を忘れて暫く歌を見て考へて居る。やがて襲而をし）では御免下さりませ。（去りかける。）

娘　（乳母の耳に急いで何かさゝやく。）

乳母　御待ち下さいませ。

小姓　（立止る。）

乳母　手前の主人が申しまするには誠に申し兼ねまするが、其短冊をいたゞきたいとのこと

で御座りまする。

小姓　（一寸考へて）御易いことの様では御座いますが、此の短冊は上げられませぬ。

乳母　では御座いませうが。

小姓　吝しむでは御座りませぬが、私も和歌の道には由緒ある家に生れたる身、未熟の歌の下の句だけを残し置くは心に掛り、取りにかへりましたので御座りまする。

娘　（乳母の袖を強くひき何か囁く。）

乳母　強いる様ではござりまするが、手前の主人の切なる御願ひに御座りますれば、扞げて御承諾下さりませ。

小姓　これは近頃迷惑な。

乳母　では御座いませうが主人のたつての所望ゆゑ。

小姓　（暫く考へて）左様に御所望遊ばさるゝ故然らば御あづけ致しまする。何うぞ人目御無用にかたく御願ひ致しまする。

乳母　有りがたう存じまする。承知仕りました。（短冊を小姓より受けとり娘に渡す。）

娘　（乳母に何か囁く。）

乳母　手前の主人が申しまするには、文函の中にをさめ、決して誰にも見せは致しませぬ。今日（こんにち）の思ひ出にいつまでも大切に保存致しおきまするとのことに御座りまする。

小姓　左様ならば御免蒙むりまする。（御辭儀をする。）

乳母　御めん下さいませ。

（乳母と娘丁寧に御辭儀をする。）

（小姓退場。）

娘　（短冊をぢつと胸に抱いたまゝ、小姓の後ろ姿を見送りうつとりとして立つて居る。）

乳母　お嬢様。

娘　（なほぼんやりして立つて居る。）

乳母　（輕く娘の肩を打ち）これはしたりお嬢様。

娘　（はっとして）あい。

乳母　もう薄暗くなりました。旦那様が御待ちかねで御座いませう。もうそろ〳〵歸りませう。

（拍子木の音、幕。）

侍女の一　（笑ひ乍ら）お嬢様、面白い狂言で御座いますね。

娘　（少しきまり惡さうに）あの乳母やが思ひ付くことは。

侍女の一　しのぶさんのお嬢さまは如何で御座います。

娘　さあどうだか。一寸可愛らしいね。

侍女の一　私共の内でいつち器量よしだと云ふので選ばれたので御座います。だけどあの丑松どののお小姓様はお氣に召しましたかしら。

娘　妾は知りませんよ。

侍女の一　數多い店の前髪衆の中で日頃お嬢さまにいつちお氣に入りのあの方を、乳母やさんが

選んだので御座いますけれど。でも迚も――

娘　下手な繪かきに描かせた肖像(にすがた)よりはね。……幕があくよ。

（拍子木の音、幕あく。）

（娘の閨。金屏風が立て廻してある。娘美しき蒲團の上に面窶れし、亂れ髪にて寢てゐる。傍に長者。少し下つて乳母。）

長者　（心配さうに）氣分は如何ぢや。

娘　お父様。妾もう深い谷間に陷ちて行くやうな氣が致しますわ。

長者　娘。氣を強く持つてお呉れ。お醫者様もそなたの病は氣からぢやと仰つた。お藥をお上り。

娘　（頭を振り）お藥はもういや。妾死んで了ひたいのですから。

長者　（少時無言にて凝と娘を見て後）さて〳〵そなたの病は不思議ぢや。お醫者様も首を傾けてゐられた。（乳母の顏を見て）若しか。（氣を變へて）まあ良いわ。多分時候のせいであらう。

氣長に養生するがよい。（立ち上り屏風の陰にて乳母を呼ぶ。）

（長者何か囁き乍ら、乳母と共に退場。）

娘　（蒲團の下より短冊を出し凝つと眺め）もうしお小姓さま。妾は想ひ死致しまする。この水莖の跡より外に、あなた様をお偲び申し上げるよすがはないので御座いますか。あの日のあなた様の御姿が胸に烙きついて。（間。）（籠の鳥鳴く。）あゝ小鳥よ、そなたがあのお小姓様の御書院の窓の邊に飛んで行つて、妾の心を御傳へして呉れたら。あゝお小姓様、小さな乙女を憐んで下さいませ。妾の此切ない想ひを御傳へする術はないので御座いませうか。（涙ぐみ乍ら短冊を胸に抱き緊める。）

（乳母登場。）

娘　（短冊を隠し遲れ、恥かしさうに顔を蔽ふ。）

乳母　（寢床の傍に坐り）御嬢さま御打明けなされて下さりませ。お嬢さまの御病氣の元はこの短冊で御座いませう。

娘　……

乳母　御隠しなされますな。乳母は存じて居りまする。

娘　（啜り泣く。）

乳母　御心配遊ばしますな。小さい時から御乳を差上げ、お母様の御亡くなり遊ばしてからは、失禮乍ら、我子も同様に御育て申し上げた私で御座います。あのお小姓様は私がきつと尋ね出して、も一度お逢はせ申上げずにはおきませぬ。

娘　乳母や。妾は死んで了ひたいよ。これきりあの方とお目にかゝれないのだつたら。

乳母　御安心なされませ。其短冊を手懸りに家中のお小姓様を調べれば解らぬ筈は御座りませぬ。

娘　だつて乳母や。

乳母　私にお任せなさいませ。きつと私が引受けて——

娘　乳母や、お願ひだよ。お願ひだよ。（顔を蔽ふ。）

乳母　（短冊をとりながら）直ぐに探しに参りませう。ですからお嬢様、氣を引きしめて早くお癒り下さいませ。お目におかゝり遊ばす時にあんまりお窶れになつておいで遊ばしては——

娘　（手を髪にかざし乍ら）ひどく衰へて見えるかえ。

乳母　今は雨に傷んだ花のやうにおいぢらしくて、反つてあの方のお心を牽くで御座いませう。でもこの上お窶れ遊ばしては——

娘　若しあの方にお氣に召さなかつたら——

乳母　だからお嬢様。早くお丈夫におなり遊ばさなくては。あの方のことはきつと私が引受けました。

娘　乳母や妾もう何にも云ひませぬ。（手を合せる。）

乳母　まあお嬢さまとしたことが。（涙ぐみ）御安心なされませ。乳母奴が御恩返しをする時が來たので御座います。

（拍子木の音。幕。）

侍女の一　お嬢様、如何で御座います。

娘　乳母やのやることは。あんまり打ちつけで妾見てはゐられないぢやないの。

侍女の一　でも、も少し御辛棒なさいませ。（傍白。）お見になりたい癖に。

娘　何んですと。

侍女の一　いゝえ、乳母様は器用人で御座いますね。

娘　而白い氣性の忠義者さ。

侍女の一　幕があきますよ。

（拍子木の音。幕あく。）

（御殿櫻の模様のついた襖が立て廻してある。）

（堀のほとりの心持。）

（小姓と娘、石垣に腰を掛けて語りゐる。）

娘　（小姓に寄り添ひ乍ら）ほんとに夢のやうに存じますわ。貴方さまと斯うして朧月夜に花の下でお語らひ申し上げることが出來ますなんて。

小姓　不思議な御縁で御座りまする。假初のおめもじから。

娘　妾は叶はぬ戀路と諦めてゐましたのに。どうせ片思ひと思つてゐましたから。それだのに貴方さまはこの不束な妾を——

小姓　乳母どのからあなた樣のお心をきいた時、私も夢かと思ひました。紅葉狩の日にお別れしてから、あの短冊の上の句のことばかり思つてゐましたから。

娘　人目を忍びおめもじ申し上げることの繁くなる毎に妾の心は（小姓の膝に縋り乍ら）いつまでもお心變り遊ばしませぬやう。

小姓　（刀の束に手をかけて）この太刀の錆びぬ限りは。浮きたる心と思ぼし召しますな。

娘　死ぬ程嬉しう存じまする。

（二人寄り添ひたるまゝ沈默。突然城の中より陣太鼓の音、鐘の響起る。）

小姓　（凝と聞耳を立て、娘を放しきつとなる。）いよ〳〵始つたな。

娘　何事で御座りまする。

小姓　戰が始まりました。傳て聞き及んだ夷との戰が。御免蒙りまする。（去りかける。）

娘　（小姓の袖を捉へ）そのやうに慌しく。

小姓　出陣の用意を致さねばなりませぬ。一刻も早く殿様のお傍に。

娘　御出陣遊ばすので御座りまするか。

小姓　今夜直ちに。（袖を振り拂ひ）心せきまする故。

娘　（泣き乍ら再び袖を捉へ）お待ちなされて。

小姓　公の務を忘つてはなりませぬ。

娘　も少し名殘を惜しませて下さりませ。いま御出陣遊ばしたら、いつまたお目にかゝれますやら。

小姓　いや、かうしてはゐられませぬ。

娘　でも、もうちよつとの間。

小姓　（きつとなり）一大事で御座りまする。弓矢とる身の初陣で御座りまするぞ。（太刀にて娘の袖を拂ひ）御免を蒙りまする。

娘　（泣き乍ら）あゝお小姓様。

小姓　凱旋の日をお待ち下さいませ。

（小姓決然として退場）

（泣き伏す。）

娘　（陣太鼓の音益々烈しくなる。幕。）

（その途端一心に芝居を見てゐた娘突然着ざめて額に手をあてる。）

侍女の一　お嬢様、お嬢様。

娘　（倒れかゝる。）

侍女の一　（叫ぶ。）あれ誰か來て下さい。早く、早く、お嬢様が。

（乳母と侍女の二と三、驚いて幕を掲げて飛んで來る。）

乳母　お嬢樣、しつかり遊ばせ。誰か！　水を早く。

（丁稚水を持つて來る。）

乳母　（水を呑ませる。）お嬢樣、しつかり遊ばしませ。

娘　乳母や、ひどいよ、ひどいよ。

乳母　御免遊ばせ。飛んだ粗相を致しました。

娘　今の妾にあんな所を見せたりして。妾のいつち苦しい所を。

乳母　でも御嬢さま、此の次の幕にお目出度い場で結んであるので御座いますもの。も少し我慢遊ばして次の場を御覽下さいましたら。

娘　いやだよ。いやだよ。妾もう澤山。

乳母　どうぞ御勘辨下さいませ。こんなことにならうとは夢にも思はないもので御座いますから。

娘　止してお呉れ。止してお呉れ。狂言はもう止めてお了ひ。ほんとにひどい。

乳母　誠に申譯御座いません。

娘　ほんとに人の心も知らないで。

侍女達　どうぞ御免下さいませ。

娘　（泣き乍ら）いゝから皆下つてお呉れ。妾一人で泣いてゐたいんだから。

（乳母と侍女達持て餘したやうにぐづ〳〵して居る。）

娘　（烈しく泣き乍ら）皆下つてお呉れと云へば。妾今夜は一人で夜通し泣き明した方がいゝ。

（乳母と侍女達仕方なく退場。）

娘　（疊の上にうつ伏して泣き續ける。）

長者　（靜かに登場。優しく傍に寄り）娘そんなに泣くものではありませんぞ。

娘　だつてお父さま、乳母やがあんまり思ひやりのないことを。

長者　それはお前がきゝわけがないと申すものぢや。狂言は目出度く結んであるのぢや。お

前がも少し辛棒してさへゐれば。

娘　いやです、いやです。妾の悲しい心はどう世人には解りませぬ。

長者　その悲しさを慰める爲めに皆が苦心してゐるのではないか。

娘　（焦立たしさうに）お父様もう澤山。あちらにおいで遊ばして。妾一人で泣きたいんですから。

（泣く）

長者　（嚴しく）さて〳〵、そちはきゝわけのない娘ぢや。私は云ふが、そなたは罰が當りませうぞ。そなたはこの上もない果報者なのぢや。考へて見るがいゝ。あの人も羨む三國一の花婿どのと、固い婚約を結んであるのではないか。世の常ならばあのやうな花婿を、我々風情の家に迎へることは、迚も思ひもよらぬのぢや。町人のわしがあの圖書頭さまの御末男を申し受ける爲にどれ丈の苦心をしたと思ふ、それは皆そなたがいとしい爲ばかりぢや。幸ひ殿様の特別の御愛顧と、祖先の德に依つて、苗字帶刀を許されてゐ

た爲に迎も望むことの出來ない良緣が結ばれたのぢや。それを疎そかに思つて濟むと思ひますか。

娘　（泣き乍ら）だつてお父樣、約束してあるばかりでその日はいつ來るか解りはしないのですもの。

長者　そなたが待ちさへすればその日はきつと來るのぢや。

娘　あの方は只の一度もお音信さへも下さらないのですもの。

長者　初陣は武士の一大事ぢや。武士は戰場に望む時は、妻のことも忘れねばならぬ。そなたに音信を寄越すやうでは賴もしい婿どのとは云へませぬ。

娘　お父樣のお酷いこと。あんまり思ひやりがなさ過ぎますわ。あまりお年をお召しになつたので、若い乙女の心の切なさがお解り遊ばさなくなつたので御座いませう。

長者　いやいや娘。わしの胸はしなびても、そなたのと一緒に痛むのぢや。

娘　（溜息をつき）戀する者の心は戀する者にしか解りませぬ。あちらにおいでなされて、ひ

長者　とりで泣かせて——

（凝と娘の亂れた姿を眺めて後）よし／＼、わしはあちらに行きませう。千百のわしが慰めの言葉も今のそなたに何の役にも立つまい。戀の女神様に、そなたをお任せする外はない。娘、わしはもう云ふまい。だがそのやうに徒らに心を掻き亂すよりは七夕さまのお惠みをお願ひして、早く嬉しい日が來るやうにお祈りするがいゝ。それが目出度い七夕祭の夜に、一番相應しいことでありませうぞ。

（長者靜かに退場。）

娘　（少時咽び泣く、聽て茫然として考へに沈む。少時して七夕の棚の方に向き）もうし織姫様、哀れな娘を顧みて下さりませ。妾は寂しい戀をして居りまする。思ひ亂れてゐる小さな、小さな地の上の人間の子の悲しみを哀れと思ぼし召して下さいませ。そして妾の戀に惠みをお與へ下さいませ。どうぞあの人に一刻も早く會はれますやうに。（間。）妾としたことが自分の悲しみに浸つてしまつて、一言もお祝を申し上げるのを忘れてゐました。どう

ぞお許し下さいませ。あなたさまの今宵の御幸福を心からお祝ひ申し上げまする。あなたさまはどんなにお嬉しいことで御座いませう。でも織姫さま、妾はお羨ましく存じ上げますわ。あなたさまは今宵は彦星さまとお睦しくお語らひ遊ばすので御座いませう。妾はつまりませんわ。でもでも織姫様、妾は心からあなたさまの御逢瀬をお祝ひ申し上げますわ。今日詠んでお捧げ致しましたあの拙ない歌を御覧下さいませ。そして可哀相だと思ぼし召し下さいましたら、どうぞどうぞ一日も早く戰が終つて、あの人が凱旋致しますやうお恵みをお掛け下さいませ。（猶默つて祈り續ける。祈り疲れてうと〳〵とする。）

（ダーク、チエーンヂ。）

第二場

（舞臺天上。織姫の部屋。天の川に臨む。右手に數個の機臺ありて侍女達機を織つてゐる。紅白の絹機に巻きつけてある。一人の侍女廊下に出て川の向を眺めてゐる。川づらは一面の霧。幽かに向ふの岸を望む。）

侍女の一　靜かな夜だこと。今夜だけはどうぞ浪が立ちませぬやうに。

侍女の二　（機を織り乍ら）もう夜も大分更けましたね。

侍女の三　（踏木を踏み乍ら）早く彦星様がお渡り遊ばせばいゝのに。

侍女の四　お姫様がお待兼で御座いませう。

（織姫盛裝して登場。）

織姫　皆今夜はもう機をお止め。（侍女の一に）まだ向岸に何も見えないかえ。

侍女の一　（手をかざして向を眺め乍ら）渡場には船と渡守の外まだ何も見えませぬ。もうお見えになりさうなものだが。浪は高くはあるまいね。

織姫　侍女の一　寔におだやかで御座います。（耳を傾けて）あれ鵲鳥が霧の中で鳴いてゐるのが、あのやうによく聞えまする。

（侍女達機を止めて姫の傍に集る。）

侍女の二　お姫様、お祝ひ申し上げます。

侍女の三　お目出たう御座います。一年の間あんなに待ち焦れておいで遊ばした夜がとう〳〵参りました。

侍女の四　お姫様の今宵のお美しいこと。彦星さまもほんとにお見惚れ遊ばすで御座いませう。

織姫　御前たちの嬉しがらせも今夜は耳に心よい。樂しくお前達の祝ひの挨拶を受けますぞ。妾はほんとに嬉しいのだから。

侍女の二　御尤もで御座います。一年に只一夜のお逢瀬で御座いますもの。

侍女の三　お姫様は只今宵一夜を命に長い月日を生きておらつしやるのですもの。

侍女の四　私はお姫さまが寂しさをお紛らしになる爲に一年の間、毎日毎日機を織つてばかりおいで遊ばすのを見ては本當においとしくて——

織姫　彦星様に捧げる爲に、妾が織つた絹は天の河に橋渡しするにも足る程、長うなつた。一梭(ひ)ごとに妾の眞心を織り込んだのだよ。

侍女の二　お姫様のお心を彦星様がお知り遊ばしたら、どんなにお勤かされ遊ばすで御座いませ

う。

侍女の三　今夜こそお姫様、日頃の積る思ひの有りたけを盡してお語らひ遊ばすことがお出來になるので御座います。

侍女の四　お待詫び遊ばした日の長かつた丈、今宵のお語ひはどんなにかお思ひ深いことで御座いませう。

織姫　あゝ七月七日の宵、今宵一夜が妾の命なのぢや。今宵の爲に妾は生きてゐるのぢや。

侍女の一　お姫様、お姫様。彦星様がお供をお伴れになつて渡場にお見えになりました。

（織姫無言にて立ち上り、廊下の方に出る。侍女達從ふ。）

（此時一陣の嵐川上の方より吹き起り、霧を吹き拂ふ。向岸の光景がはつきりと見える。見る〳〵風吹き募り、川面の浪高くなりまさる。）

侍女の一　風が。

侍女の二　あれ浪があのやうに。

織姫　（蒼ざめて向岸に向つて呼びかける。）彦星様いのう。（頴巾を振る。）

彦星　（向岸にて牛車の上より合圖をし乍ら）織姫どのう。

織姫　早くお渡り下さいませ。

彦星　直ぐさまそれへ參りまする。（牛車より飛降り舟に乘る。）

（舟岸を離れる。）

織姫　（なほ頴巾を高く振り乍ら）彦星さまいのう。

彦星　（沖より合圖をし乍ら）織姫どのう。

侍女の一　あれ舟があのやうに。

侍女の二　高い浪頭が。あれお危い。

織姫　龍王よ、今宵ばかりは浪を立てないでお呉れ——

（風益々強く、浪いよ〳〵高くなる。）

侍女の三　あれ舟が流されまする。

（舟の中にて彦星たちと渡守と何か云ひ合つてゐる樣が見える。）

織姫　彦星樣いのう。

彦星　織姫どのう。

侍女の一　あれ舟が引返しまする。

織姫　彦星樣、早くお渡り下さいませ。

彦星　（沖より）織姫どの。浪が高くて渡られませぬ。

織姫　あゝ彦星樣、妾はこゝに居りまする。待ち焦れて。何とかして渡る術（すべ）は御座いませぬか。彦星樣いのう。（狂ふやうに領巾（ひれ）をふる。）

（烈しき風の音。浪の音。沖より何か呼はる聲すれど、打消されてよく聞えず。「織姫どの……」「渡られませぬ……」「悲しや……」等の幽かに浪風の音の合間に聞ゆるのみ。）

侍女の一　舟は向岸につきました。彦星樣はお供の衆と淋しさうに岸邊に立つてゐられまする。

侍女の二　合圖して何か仰つてゐられるやうで御座いますが。

織姫　あゝ神々様。

侍女の三　あれ幣が流れまする。彦星さまの舟路の御無事なやうに、私達が瀬毎に立てゝお祈りした幣が。

侍女の四　あゝもう駄目で御座います。

織姫　（泣き崩れて）今夜に限つてこの大風とは。何て惨めな。あゝ死……死よりも酷い。おゝ。天の河よ。呪はれてあれ。盲目川となれ。盲目川となれ。（又立ち上り川岸に向つて）彦星様いのう。

（向岸より風の絶え間に「織姫どのう……」「天の運命……」「來年の今夜まで……」と云ふ聲僅かに聞ゆ。）

織姫　（泣き崩れる。長き間。やがて立ち上り涙にぬれた顔をあげ向岸に向つて）彦星様妾は待ちまする。來年の七月七日を。妾達の愛さへ變らなかつたら。いつまでも、いつまでもお待ち申しまする。お待ち申しまする。二人の間に劫初の昔から定め置かれた天の河をもう慨

くことは致しますまい。許された限りの幸福を感謝して受けませう。今宵の嵐は二人の愛を鍛へる試みで御座いませう。又來る年の今宵を忍んで待ちませう。二人の愛さへ變らなかつたら……いつ迄も、いつ迄も（間。新しく涙を流し乍ら）又一年の間妾は機を織つて暮しませう。

（侍女達默然として立つてゐる。）

（川向ふに牛車に乘つた彦星とその供の行列の小さく動いて行くのが見える。）

（ダーク、チエーンヂ。）

第三場

舞臺第一場に同じ。

（娘眠つてゐる。）

（眼を覺し）あゝ織姫樣。（四邊を見廻し）夢だつたのか。（花籠を見上げて）萩の花の露だつたのか。織姫樣の涙が妾の顏にかゝつたと思つたのだが。（凝と考へに沈む。）

娘

（長者と乳母と登場。）

長者　もう夜が更けた。もう寝るがよい。

乳母　いつ迄も泣いてばかりゐらつしやらないで。お心はようくお察し申しまするけれど。

娘　（急に涙を流し乍ら手をついて）お父さま、妾が悪う御座いました。許して下さい。乳母や勘忍してお呉れ、妾が我儘だつた。

長者　娘、どうしたのだ。

乳母　まあお嬢さま。

娘　（泣き乍ら）妾が我儘で御座いました。天にもあれ丈の嘆きがあるものを、まして地の上に住む妾達に悲しみがなくて濟みませうか。妾は織姫様の夢を見ました。天の河に浪風が立つて彦星様とお會ひ遊ばすとの出來ない所を。あゝおいとしい織姫様、あなたさまでさへもそのやうにお悲しみがお有り遊ばすのに、それを素直にお忍び遊ばすのに、妾などが不足ばかり申して濟みませうか。身に餘る幸福が與へられてゐますのに。ほん

とうに身の程知らずで御座いました。お父様、妾はもう不足は申しませぬ。いつ迄もお待ち申します。殿様に忠義を立てゝあの方の御歸り遊ばす日を。

長者　あゝ良い所に氣がついて呉れた。わしはどんなに安心したらう。

乳母　（涙ぐみ乍ら）お嬢様、どうぞ少時御辛棒遊ばしませ、きつと今に——

（この時子の刻の鐘鳴り渡る。）

（番頭急ぎ登場。）

番頭　申し上げます。只今門前に早馬の使者が御到着遊ばしました。殿様は御凱旋で御座います。御小姓様は今宵これへおなりで御座ります。も早村外れまで御行列はおいで遊ばしたさうで御座います。

長者　直ぐに皆に云ひ傳へて呉れ。そしてお出迎の準備をするやうに。

番頭　かしこまりました。

（番頭退場。）

娘　（ぶる〳〵顫へてゐる。）

乳母　お嬢様、お聞き遊ばしましたか。早くお出迎のお仕度を遊ばせ。

娘　乳母や、妾――

長者　（廊下に出て）一杯の灯ぢや。行列はもう松並木の側まで來てゐる。娘早く仕度をなさい。

乳母　直ぐにお出迎へ遊ばさなくては。

娘　だつて乳母や、妾こんなに亂れた風をして。顏も涙で汚れてゐるもの。

長者　だからわしが云つたではないか。花婿はいつ御見えになるかも知れないからと。さあ早くなさい。

娘　（慌てゝ）乳母や手傳つてお呉れ。一寸お化粧をするから。

長者　いや〳〵娘、それでは暇がかゝる。そのまゝ、そのまゝ。

娘　でもお父さま。これではお目にかゝれませぬ。一寸一寸。

（侍女達登場。）

侍女達　（口々に）お目出度う御座います。お目出度う御座います。

（丁稚登場。）

丁稚　只今花婿様が御到着遊ばされました。

（馬の嘶く聲。）

幕

一九二一・一〇・一〇

大正十一年三月一日印刷
大年十一年三月二日第一刷發行

父の心配（一〇〇〇）

定價壹圓五十錢

版權所有

著者　倉田百三

發行者　岩波茂雄
東京市神田區南神保町十六番地

印刷者　島連太郎
東京市神田區美土代町一丁目二番地

製本者　寺島藤二郎
東京市日本橋區本銀町一丁目九番地

發行所　東京神田南神保町　岩波書店
振替東京二一六二四〇〇番
電話九段一一二二八一〇番

□倉田百三著 出家と其の弟子 百卒版 定價壹圓五拾錢 送料内地書留拾八錢

□倉田百三著 歌はぬ人 五十七版 定價壹圓五拾錢 送料書留拾五錢

□倉田百三著 愛と認識との出發 九十九版 定價貳圓 送料内地書留拾八錢

□古屋芳雄著 地を嗣ぐ者 十四版 定價壹圓五拾錢 送料書留拾五錢

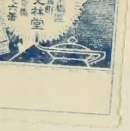
□古屋芳雄著 暗夜 八版 定價壹圓八拾錢 送料内地書留拾八錢

□古屋芳雄著 樹間の光 五版 定價壹圓五拾錢 送料書留拾五錢

□レッシング著 大庭米治郎譯 賢者ナアタン 再版 定價貳圓貳拾錢 送料内地書留拾八錢

□クライスト著 大庭米治郎譯 公子ホンブルク 新刊 定價壹圓參拾錢 送料書留拾五錢

東京 岩波書店刊行



PURCHASED FOR THE

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE

CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR

CHINESE AND JAPANESE STUDIES

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03060 4771